

RESEARCH REPORT

No. 44

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
INSTITUTE FOR EDUCATION

Contents

2013 Record of Lecture at Academic Meeting on Higher Education (1) :
Tasks of Higher Education Policy in Japan
.....TAMAI, Hideo

2013 Record of Lecture at Academic Meeting on Higher Education (2) :
Actual Relationships between Showa Women's University and Its Attached
Junior and Senior High Schools
.....OSHITANI, Yoshio & SUZUKI, Madoka
TOMODA, Yasumasa & ANDO, Yoshinori (eds.)

Profiles and the Current Situation of Women's Colleges & Universities in the Unites States
.....ANDO, Yoshinori

Trends of Women's Colleges & Universities in the U.S. over the Last 25
Years : A Comparison with Coed Colleges & Universities
.....ANDO, Yoshinori

Progress Reports on Mukogawa Women's University Center for the Study of
Child Development 2013
.....KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SASAKI, Megumi,
ISHIKAWA, Michiko & TAMAI, Hideo

Faculty Achievements (2012)

March 2014

武庫川女子大学教育研究所
研究レポート第44号

武庫川女子大学教育研究所

研究レポート

第44号

Research Report, No.44
Mukogawa Women's University
Institute for Education

〈特集〉大学教育研究会講演／アメリカの女子大学研究

平成25年度 大学教育研究会講演記録(1)
－高等教育政策の課題－
玉井日出夫

平成25年度 大学教育研究会講演記録(2)
－大学と中学校・高等学校との連携の実際－
押谷由夫・鈴木円
(友田泰正・安東由則編)

アメリカにおける女子大学のプロフィールと現状
安東由則

Trends of Women's Colleges & Universities in the U.S. over the Last 25 Years :
A Comparison with Coed Colleges & Universities
安東由則

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2013年度活動報告
河合優年・難波久美子・佐々木恵
石川道子・玉井日出夫

2012年度 研究員の業績および特別研究の経過報告

2014年3月

二〇一四年三月

武庫川女子大学教育研究所

研究レポート第44号

目 次

平成25年度 大学教育研究会講演記録 (1)

－高等教育政策の課題－

玉 井 日出夫

今回の課題設定.....	1
講演.....	1
はじめに.....	1
1. 背景.....	1
2. 課題.....	4
おわりに.....	11
議論.....	12

平成25年度 大学教育研究会講演記録 (2)

－大学と中学校・高等学校との連携の実際－

押 谷 由 夫・鈴 木 円
(友 田 泰 正・安 東 由 則 編)

今回の課題設定.....	23
講演1：押谷由夫 氏.....	24
はじめに.....	24
1. 多様な交流.....	24
2. 大学から附属への働きかけ.....	26
3. 附属から入学後の指導.....	26
4. 校長推薦に関する学科ごとの基準.....	27
参考.....	27
講演2：鈴木 円 氏.....	28
はじめに.....	28
1. 私学における連携とは.....	28
2. 附属と大学の連携のあり方：昭和女子大学と附属昭和中学・高等学校の場合.....	30
3. 今後どうすべきか.....	38
議論.....	39

アメリカにおける女子大学のプロフィールと現状

安 東 由 則

序.....	59
はじめに.....	59
1. アメリカにおける女子大学のプロフィール.....	59
2. 他大学との比較からみた女子大学の特徴.....	70
3. 日本との比較.....	79
4. まとめ.....	81
おわりに.....	82

Trend of Women's Colleges & Universities in the U.S. over the Last 25 Years
: A Comparison with Coed Colleges & Universities 安 東 由 則

Abstract.....	89
1. Introduction.....	90
2. The Outline of Women's Colleges & Universities in the U.S.....	91
3. The Outline of Ex-Women's Colleges in the U.S.....	96
4. A Comparative Analysis of Women's Colleges with Coed-Colleges.....	97
5. Findings.....	103

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2013年度活動報告

河 合 優 年・難 波 久美子・佐々木 恵
石 川 道 子・玉 井 日出夫

I. はじめに.....	111
II. 2013年度の子ども発達科学研究センターについて.....	111
III. 2013年度活動概要.....	113
IV. 研究業績.....	127

2012年度 研究員の業績および特別研究の経過報告..... 131

研究レポート掲載論文総目次（過去10号分）..... 141

平成 25 年度 大学教育研究会講演記録 (1)

－ 高等教育政策の課題 －

2013 Record of Lecture at Academic Meeting on Higher Education (1) :
Tasks of Higher Education Policy in Japan

玉 井 日 出 夫*

TAMAI, Hideo

* 武庫川女子大学・客員教授、武庫川女子大学教育研究所・研究員／公立学校共済組合理事長／元文化庁長官

平成 25 年度 大学教育研究会講演記録 (1)

－高等教育政策の課題－

講 師 玉井日出夫（教育研究所研究員 / 公立学校共済組合理事長）

実施日 平成 25(2013)年 12 月 13 日(金)

場 所 武庫川女子大学教育研究所

今回の課題設定：

高等教育がエリート教育段階からマス教育段階へ、さらに現在、日本においてもユニバーサル化の段階へと入ってきた。これに伴い、これまでになかった、あるいは余り意識されてこなかった問題や課題が立ち現れてきている。日本における高等教育の歴史・政策の流れを概観したうえで、今日、そして今後の大きな課題である高等教育における「質」の整備のあり方・考え方、高等教育財政、大学教育と職業教育との接点などについて、文部科学省で高等教育行政の中核におられた玉井日出夫先生からお話いただき、それに基づいて、これからの武庫川女子大学の教育、大学運営のあり方について議論を進めていく。

講演

はじめに

少し（高等教育史の）復習になる部分もありますが、今回の資料では、武庫川女子大学がこれから先をどんなふうと考えていくのかというときの参考として、現在、高等教育自体がどのような動きをしているのかを俯瞰しています。その中に、武庫川女子大学のこれからにとってのヒントがあるかと思っております。

1 背景

まず「背景」ではありますが、今日の大学が置かれている状況理解が重要であると考えます。例えば、大学進学率がまだ 10% ぐらいしかないときの大学、特に、女子がそれほど大学に行かなかったときの女子大学と、今のよう、男子よりも女子の進学率が高くなっ

た時代の女子大学では状況が大きく異なります。このような状況をどのように認識すればよいのかを考えてみたいと思います。ここでは、ユニバーサル時代の大学の役割、そして知識基盤社会における人材育成はいかにあるべきかという2つの視点から議論したいと思います。

(1) ユニバーサル時代の大学

最初にユニバーサル時代の大学の役割について考えてみたいと思います。高等教育の研究者である、マーチン・トロウ (Martin Trow) は、エリート、マス、ユニバーサルという用語で大学教育の変化を語っています。エリートというのは、大学進学率が15%未満のときの大学であり選ばれたものが学ぶ大学ということになります。進学率が15%を超えると大学教育が大衆化し、学生がマスになり大学がより人々に近い存在になる。そして進学率が50%を超えたら、ユニバーサルの時代になると彼は言っていました。人々にとって大学進学が普通のことになる時代ということになります。

さて、我が国の大学進学率を見てみると、確か50%強で、2010年のデータでは52.2%となっています。これが多分今までで一番高かったと思いますが、現在はそこから少し低くなっています。それでも2013年で50.8%となっています。これは大学、短大の進学率ですから、専門学校への進学率20%余りを加えると、実に70%以上の若者が高等教育という場で学んでいることになります。今の実態を見てみますと、やはりユニバーサルの時代に入ったということになります。このような現状を考えますと、これからの大学教育については、ほとんどの人たちが高等教育にアクセスできる時代を前提に考えねばならないということになるわけです。

そういう時代の大学はどのような大学なのでしょう。大学のあり方についてよく言われるのはフンボルト理念です。この考え方は1900年代に入ってつくり上げられた理念だという説も最近出ていますが、従来の定説に従っていくと、1800年代のフンボルトのいたベルリン大学で、「大学は研究が中心である」とされた考え方に基づくものです。つまり、大学というのは研究が中心で、研究を通じて教育がある。だから、研究と教育がいわば一体となるように統一されるようなものが大学なのだという考え方なのです。日本は、もともとヨーロッパの大学をモデルにしていたところがありましたので、そこからつくり上げられたヨーロッパ型の大学が日本の原型の中にあります。途中からアメリカ型の大学が入ってきて、今日ではいかにもアメリカ型の大学のようになっていますが、もとを正すとフンボルト理念でつくり上げられた大学と言えるのです。

そのように考えますと、もう30年以上前になりますが、大学がマスの時代に入ったときに、大学関係者はフンボルト理念ではうまくいかないのではないかと感じたのではないのでしょうか。少なくとも学部までは、研究ではなくて教育だと思ったのだと思います。フ

ンボルト理念を本当に実践するためには大学院なのだと考えたのではないのでしょうか。この段階で大学院政策をしっかりとつくるべきではないかと考えられ、平成に入ってから大学の改革の基本的な発想に繋がっていったのです。

(2) 知識基盤社会における大学

もう1つの大学改革の視点は、知識基盤社会における人材育成です。今日では、産業社会から知識基盤社会に移っているというのが、経済学、社会学では主流になっています。

知識基盤社会というのは、知識や技術が主役になる時代だと言われています。産業社会は、経済学的に言えば生産要素は原材料であったり、労働力、資本であったりということになります。この生産要素が、原材料などではなく知識や技術になるという時代に入ってきているのです。つまり、大量の原材料や資本金、労働力がなくても、知識から生み出されるアイデア1つで大きな産業を起こすことができるような、そういう時代に入ってきているという意味です。

このような知識基盤社会において大切なものは何かと言われると、実は教育なのです。もちろん教育というのは、その前の時代であっても大切だったのですが、この時代の教育というのは2つの意味があります。

1つは一時期で終わる教育ではないということです。つまり、産業社会までは教育は大切で、人材育成のための社会装置として学校という制度がつくり上げられていったわけです。そこでは知育を中心として、ある知識量を持った若者が生み出されていく、そういう人たちが産業社会を支えるという社会のシステムがあったわけです。しかし、知識基盤社会においては、その知識自体が常に陳腐になり、流動化してゆくわけで、常に学び続けなければならないことになります。大学であることを学んだのだから、あとは一生それを使えばいいということが全然通用しないような、そういう時代に入ってきているのです。ですから継続教育が重要な役割を果たすのです。

もう1つは、どこでも学ぼうと思ったら学べる時代に入ってきたということです。大学には、文化を継承しかつ文化を創造する、つまり伝えていくという教育の世界と、それを新たにつくり上げていくという創造する世界が必ずあるわけです。大学の先生は、一般の人たちが知らないような膨大な知識を持っていることでステータスを持ち得たのですが、それが通用しなくなってきているのです。今日では、知識は、いつでも手に入れようと思ったら手に入れることができるようになっています。そこでは、知識を沢山知っているだけではステータスにはならないのです。知識をどう活用するのが大切な役割を果たすような時代に入ってきているのです。

ユニバーサル時代の大学、知識基盤社会における大学において、大学は何を教えるの

か、研究はどうするのだとなると、アメリカ型の大学教育とヨーロッパ型の大学教育とは異なってくるのです。例えば、ドイツにはそもそもドクターという制度がなく、教育と研究が一体となっていました。それに対して、アメリカ型では、教育と研究は一体とはならない。なぜなのかというと、アメリカにおいて大学院をつくっていった発想というのが、教育というのは既に分っていることを教育し、研究はわからないことを創造していくのだということであったからです。だから、教育と研究は一緒に扱えないものと考えられていたのです。学部までは、分っていることを教える教育でよいのだ、分らないことを創造していくのは大学院なのだという考え方が定着していたのです。ですから、大学院制度というのはアメリカでつくり上げられ、世界の大学院をリードしたのはアメリカだったわけです。

今日の日本でも、学部までは教育で、研究は大学院でという時代に入っています。しかも、教育というのは単に知識の量を教えればいいわけではなく、学び続ける基礎となることを教育するのだという時代に入ってきているわけです。そのような目で改めて大学というものを見てみる必要があるのだらうと思います。

学び続けるということが言われるようになった節目は 1990 年頃であるとされています。この時期は、情報化、特にインターネットが一般化された時期とも一致しています。つまり、軍事機密上のスキルだったものが民間にもオープンになり、誰でもあらゆる情報を手に入れようと思えば手に入れることができる、そういう情報革命が起こったのです。これが知識基盤社会を動かしている原動力なのだらうと思います。

2 課題

さて、今日の大学の課題ということになるわけですが、大学の位置づけが変わってきたということを前提として、幾つか（5つ）の課題を考えてみようと思います。

(1) 大学の機能別分化

まず機能別分化の議論ということになります。これは、もとをたどれば昭和 46 年の中教審答申に遡ることになります。今日に至る政策もかなりの部分はこの答申をもとにしています。例えば、私学助成が始まったのもこの四六答申からなのです。この答申では、いろんな政策提言が出されたのですが、そのうちの 1 つとして、大学の種別化という考え方がありました。マスの時代が目前に迫ってきた時代に、大学の機能を制度として分ける、例えば研究型の大学、あるいは教養型の大学に制度として分けてみたらどうかというものがありました。これは大学関係者から大反対を受けたわけです。四六答申で具体化されなかったことは、この大学の種別化と、学制改革くらいで、それ以外はだいたい具体化

されています。

その後を見てもみると、予想通りに大衆化時代に入ってきて多様な大学が生まれてくることになるのです。平成2年に、私は大学審議会室長に就任していました。その審議会では大学設置基準の大綱化といったような政策が打たれたのですが、そのときすでに存在していた多様なタイプの大学について議論がなされました。どのような機能に力を入れるのか、どこに特色を持たせるのかなど、多様な大学のタイプがあってもよいのではないかという議論があり、それに応じた政策も必要ではないかということになったのです。ここでは大学を制度として分けるのではなく異なるタイプとして捉えて、大学の制度としては同じであるというような考え方が出されたのです。ですから、機能別分化というような言葉はそのときは実は使ってなかったのです。多分これを使ったらまた、大学種別化のときと同じような大学関係者の反対を引き起こすのではないかと考えたのです。はっきりと機能別分化という用語があらわれてくるのは、それから10年後くらいになります。

平成3年の「大学設置基準」の大綱化では、教員数だとか施設の基準などのハード面は従来と同じにしておいて、カリキュラムの組み方や単位のとおり方というようなソフト面での自由化を図ったわけです。それまでの高等教育政策は、いわば護送船団方式でした。もちろん大学には、研究に主を置いた研究型の大学もあれば、人材育成型の大学もありますし、地域貢献型の大学もあるのですが、みんな一緒にいきましょうという政策だったのです。これに対して大綱化は、最低基準を定めて、そこから先は、自由に大学改革を進めてくださいというものでした。ですから、自分の大学は、どんな機能に着目して、どこに力点を置く大学なのか、そのタイプを考える必要が出てきたのです。

(2) 教育機能の強化と質保障

そのような意味で機能別分化が始まってくると、少なくとも学部までは教育が非常に重要なんだという視点から、教育機能の強化というものが当然のことながら必要になってまいります。これは、どちらかといえばアメリカ型の教育モデルとなります。つまり、学部までは教育をしっかりとやろう、研究は大学院で行おうということになるのです。このようなことがあって、大学院政策は平成3年から変わってきたのです。そのときの大学審議会の答申では、大学院の抜本的な質的・量的改革ということで、大学院倍增計画のようなものが出されたわけです。大学院をつくり過ぎたという批判は受けましたが、本当は修士を増やそうという話だったのです。しかし、結果的には博士まで急激に増加してしまい、これが今や問題になってしまっています。

ただ、もう少し長い目で見たら、少なくとも大学院レベルの力を持った人材が増えないと日本全体のパワーにはつながらないだろうと思うのです。確かにドクターをつくり過ぎたのではないかと、ドクターの受け皿がないというような批判は受けています。しか

し、方向としては間違っていないと思っています。マンパワーとして大学院が非常に重要になって来ているのは事実だと思います。同時に、学部までの教育機能をもっと強化すべきであると考えています。教育機能の強化のためには、大学におけるカリキュラムの再検討が必要だということになります。

実は、従来の「大学設置基準」には、教育課程つまりカリキュラムという用語がありませんでした。それが入ったのは平成3年なのです。それまでは「大学設置基準」には、必要単位のみが示されていました。人文系何単位、自然科学系何単位、というような規定だったのです。武庫川女子大学においても、学位プログラムだとかカリキュラムツリーだとかの議論が行われていると思いますが、今日では学部・学科の教育課程の整合性が求められています。それまでのカリキュラムのつくり方の発想というのは、何が科目として必要かというコア科目についての議論だけで、コアになる科目で何を本当に教えるのかは、科目を担当した教員に委ねられることになります。ですから、言葉は悪いのですが、教員の好き勝手と言いますか、自分の得意な部分についての授業になってしまうのです。コアでさえそうですから、コアでない科目は推して知るべしです。この背景には、さきほどのフンボルト理念があるのです。大学の教授というのはしっかり研究する。教育も行うのですが、それについてくることができる学生たちが自分たちで勉強してついてくる話だということになるのです。

しかし、教育課程なので、これは何を必ず教えるのかとか、どのような方法で教えるのかまで、ある程度共通理解がないといけないわけです。その裏打ちが実はシラバスだったのです。平成3年の「大学設置基準」の大綱化のときには、シラバスは必ずつくらねばならないというところまで考えていました。

その後、教育機能をしっかりさせると同時に、質保証の問題が出てきます。今、議論になっているキャップ制は、まさに教育課程というカリキュラムの問題と質保証の問題が一緒になったものと言えます。これが、カリキュラムツリー、そして学位プログラムのところまでつながる議論になるわけであります。

この学位プログラム、つまり教育による付加価値とは何でしょうか。例えば芸術系について考えてみると、音楽大学を出て（アメリカの）ジュリアード音楽院まで行く人は何人いるのでしょうか。もしジュリアードまで行ったとしても、何人が本当にプロのソリストになっているのでしょうか。ある大学での芸術系のカリキュラムの検討をしたことがあります。まず、卒業生が何になっているのかというのを分析しました。5年間分を調べたのですが、結構多くの卒業生が一般事務、サービス業、販売業などに就職しています。そのような学生が（就職先企業から）どこを評価されていたのか分析しましたところ、コミュニケーション能力だったのです。経団連が、あなたの企業はどの資質能力に着目して採用人事をしたのかという調査を毎年やっています。ここ10年くらい断トツで1位に

なっているのがコミュニケーション能力なのです。時代がそのような能力を求めているのだと思います。

このような視点で芸術系のカリキュラムを検討してみました。何をやったかというところ、コアを見つけていったのです。それに何を付加価値として与えるのかを検討しました。やっぱりコミュニケーション能力が一番で、それにコーディネート能力、プロデュース能力などが加わっている。つまり、人にどう伝えるかということになります。音楽もそうなのですが、そういう資質能力がコアに付加価値としてついているのです。

その視点でカリキュラムを見てみました。そうすると、ばらばらにあった科目が、1年次、2年次、3年次で何を学んでいくのかを横串で見ることができるようになるわけです。2年次、3年次でこういうふうにコアを積み重ねていって、付加価値としてこのようなものを身につけさせて、全体としてこのような卒業生を作り出すのだという考え方です。これは、学位プログラムそのもののなのです。先生たちが自分の好き勝手に科目を教えるのではなく、学生も数合わせのように好き勝手に単位を集めればいいわけではない。ある目的に沿って科目が設定され、付加価値を明確にする。そのようなカリキュラムの組み方が求められているのだと思います。

中央教育審議会の大学分科会も学位プログラムを視野に入れています。ですから、カリキュラムツリーに言及したり、キャップ制などに触れたりするのです。

次にポートフォリオの話をししたいと思います。金沢工業大学もかなりきちんとしたキャップ制を持っている大学です。あそこはなかなか参考になる大学です。

金沢工業大学は、カリキュラムがしっかりしていて、コアがはっきりしていて、付加価値がはっきりしている大学だと思います。問題は確実にそれが学生に身についているかということです。具体的な中身は、ホームページを見られると詳しく載っていますので、そこをご覧ください。要するにポートフォリオですから、学生は自分が何を目標に置くのか、何を学ぶのか、学んでうまくいったのか、いってないのかという反省も常にしながら自分なりの記録を持っています。4年間かけて、自分は1年生のときにこれを計画してこれをやり遂げた、2年はこうだった、3年はこうだったということを反省することができます。しかも、興味深いことに、10年後の自分というポートフォリオをもっており、10年後、自分はこの分野でこんなレベルのエンジニアになりたいと書くのです。そうすることによって、自分の夢に向かって、この大学で4年間、どう学んでいくのかということを描けるようになるのです。それと現実の履修プログラムを持っており、常にプラン(Plan)、ドゥー(Do)、チェック(Check)、そしてアクション(Action)というサイクル(PDCAサイクル)をポートフォリオで学生一人一人にやらせているというわけです。きめ細かい指導になるわけで、学生は嫌でも育つことになります。それが大学なのかという議論が一方にあります。しかし、そこまでやっているのです。彼らはそれで評価が高いの

です。教育機能の強化というものは考えていかねばならないということです。

それでは質保証はどうなのでしょう。大学を出たから質が保証されているという時代ではなくなっています。コアがあり、明確な付加価値があって、それを学生がちゃんと身につけているということが質保証の問題なのです。問題はどのように質保証をしていくのかということになります。

1つはやはり評価です。平成3年に初めて自己点検・自己評価が入ってきました。護送船団方式ではなくて、自由化を図ったのですが、評価は必要ということだったのです。当時、大学人は非常に評価に対して過敏になっていました。企業だって評価が当たり前と皆さんおっしゃいますけど、企業でも評価を入れ始めたのは1980年代ぐらいでしょうか。時代がそういうことを求め始めたのだと思います。教育機関は保守的ですから、少し遅れて自己点検・自己評価を組み入れたのです。

自己点検・自己評価ですから、さすがにこれには反対できない。これに続いて、外部評価がそんなに遅くない時期に入ってきました。つまり、自己点検・自己評価を大学自らが行うときに、外部の委員を入れようということになったのです。平成12年ころに第三者評価機関をつくって評価をするというのが始まりました。そのときに議論になったのが、評価によって財政支援が左右されるのかということでした。評価は、私学助成にリンクしないかたちで出発し、今もリンクしていないはずですが、ただし、国立大学の法人化に際しては評価が入っています。つまり、評価によって運営費交付金が左右される仕組みになっています。

アメリカでも、もちろん評価をやっています。むこうでは、大学評価全般と、学問分野別、学部別に専門の評価がなされています。それは奨学金制度とリンクしています。評価をきちんと受けて、アクレディテーション（Accreditation）を受けていない大学は奨学金制度の対象にしないという形になっています。いずれ日本も、そういう議論は当然起きてくるのだと思います。

質保証のもう一つのものとして、ガバナンス（Governance）の問題があります。これがどこまできちんとできているのかも課題になります。私立大学だけでなく、国立もそうなのですが、統治機能がきちんと働いているかどうか、コンプライアンス（Compliance）を含めた機能がちゃんと働いているかどうかは質保証でもあるのです。

私立大学は歴史的に言うと、戦前の国家による統制という時代があるものですから、統治という視点で考えるとノーコントロールを前提にしているわけです。ですから戦後に私立学校法ができたときも、私学に対する規制というものはできるだけ排除されたのです。ところが、それではやはり変だろうということで、段階的な是正指導の議論が起きました。1つは、大学の理事会、監事についてのものでした。これが非常に不明確であったので、私立学校法を改正して、理事会の機能を明確にし、監事の機能を強化しました。それ

によって大学のガバナンスが明確になりました。いざとなったら是正指導が入るということだったのです。実際、昨年は閉鎖命令も出ました。ガバナンス、コンプライアンスの考え方なくして、質保障は考えられないのです。

(3) 高大接続

大学教育を考えるときの課題として高大接続の問題があります。既に教育再生実行会議が答えを出して、いよいよ中教審の議論が始まっています。高校までの教育と大学での教育は、本来性格が違うものです。高校までは国民教育ですから、ある一定レベルの教育を全ての国民が受けるというところを中心にでき上がったわけです。大学は、中世ヨーロッパに作り上げられたもので、最初は「神の御わざ」を解明することを目的としていたのです。これが科学の発想なのです。神がこの世をつくるある仕組みがあるはずだ、その仕組みを解き明かそうというのが、大学ができ上がった理由なのです。

そういう大学が、16世紀の技術革命、17世紀の科学革命によって知の拠点になっくわけです。そこにおける発想というものは、まさにそういう知の拠点としての役割を果たす大学というものだったのです。そのことによって、入学試験が、いかにふるい落とすかという発想になっていったのです。しかし、7割以上が高等教育に学ぶ時代になると、どう落とすのかではなく、どう選ぶのか、どういう学生に付加価値を与えていくべきなのかというのが問われるようになったのです。ですから、そういう目で高大接続というものは見直していかなければならないだろうと思うのです。

そういう意味では、今、議論が始まっているのは、それなりの意味があると思われます。つまり、高等学校は高等学校で質保証せねばならないし、大学入試のところは1点刻みではないレベル論で、今言ったようなことを考えていくことは必要なわけです。このような時代では、高大接続は避けて通れない問題であり、あえて言いますと、入試改革というものは必ず起こるのだといえるのです。なぜかという、入りたい人が多くいて、その一方で大学のキャパシティー（Capacity）が決まっているということは、振り分けをせざるを得なくなるのです。そうすると必ず不満が出ます。では理想的な入試はあるのかというと、私はないと思います。その時代時代に応じてそれにフィットしたやり方はあるのですが、常に不満は残るのです。

(4) 高等教育財政

最後の課題は、高等教育財政です。日本の高等教育にかかる経費が少ないのは、各国と比べても明らかです。各国の公費による高等教育財政がかなり高い理由は2つあります。1つはヨーロッパの高等教育の制度にあります。ヨーロッパの高等教育は国立、公立が中心なのです。よくオックスフォードやケンブリッジは私学じゃないかと言われますが、

ファンディング（Funding）を見てください。財政は、エンダウメント（Endowment）、基金なのです。実際に彼らが運営している基金は公費です。公費ででき上がったのです。ですから性格としては、国公立と言っても過言ではないのです。日本のような純粋な私学というのは非常に数が少ないのです。

日本のような純粋な私学が多いのはアメリカです。しかし、アメリカにおいても、数では私学が多くなっていますが、引き受けている学生数は、州立大学、公立大学が多いのです。6割は公立で、4割が私学なのです。日本のように8割の学生が私学というのは、多分世界中でもちょっと例がないのではないかと思います。

アメリカの高等教育財政は、私学が4割だと言いましたが、かなり手厚く補助されています。それは2つの理由があります。1つは寄付税制です。アメリカは寄付文化を持っているのです。豊かになれば必ず寄付をするというのが当然の文化になっているのです。これは教育に対してだけなされるものではなくて、福祉にも、芸術にもなされるわけです。もう1つは、奨学金制度です。奨学金制度が大変充実していて、ほぼ返さなくてもいいものや、後で簡単に返せるような奨学金があります。大学で学ぼうと思ったら、それでほとんど賄える。だから、日本のように私費による家計負担によって成り立っているわけではないのです。それが現実の姿であります。したがって、高等教育財政をもっと充実していかなければならない。それからもう1つ、アメリカの高等教育財政の強いところは研究費です。確か（日本は1割であるのに対し）研究費の3割が公費になっています。それだけ研究費に対する手厚い高等教育財政が働いているということが言えます。

ですから、日本も経常費助成をどれぐらいの規模にするのか、奨学金を今のような形のままでいいのか、研究費をどう持っていくのかなどの課題があるのです。特に私学の経営実態、私学の財政構造というのは、大学院の経費は学部が一生懸命稼いだ経費で成り立っています。極端な言い方ですが、現にそうなのです。私学の理系教育も同様の構造があり、文系の授業料がつぎ込まれるという財政構造になっているわけです。現実を見詰めて、構造を直していかなければならないと思うのです。

教育と研究を強化するためには、やはり大学院政策として、大学院にもっと財政的な支援をしっかりとしていかなければならないということです。もう1つは、研究費に対する支援です。これをもっと充実していかなければならない。多分、私学助成における一般助成の部分を増やせと言われても、今の時代難しいと思っています。では何に着目して伸ばしていくかというと、それは研究費に対する助成ということになります。大学院生は私費負担が重いですから、奨学金政策も変えていかなければならないだろうと思います。それが多分、現実的な高等教育財政につながってゆくものだろうと思います。科学研究費を伸ばすこともいたしました。伸ばすときに、間接経費の制度をつけたのです。これは大学の一般経費に組み入れられるのです。ですから、科研費というものは、研究者頑張るなさいという意味

だけではなくて、大学の一般経費にも役立つという意味でもあるわけです。現時点では、財政論は幼児教育のほうに目が向いていますが、その次には高等教育に目が向くと考えています。競争的資金をどうするのか、奨学金をどうするのかなど、高等教育財政のマネジメントが問われるのだと思います。

寄付文化という点では現在も育ってはいませんが、税額控除なども視野にあるのではないのでしょうか。委託研究も税制改正し、委託研究費というのが損金として計上できるようになっています。それから現物で大学に寄付する場合もたしかあれは譲渡所得の問題を税制改正してあると思います。税制も1つの可能性として考える必要があります。

おわりに

大学がユニバーサル化し、知識基盤社会のまさに知識とかスキルそのものが原材料になるような時代になってきました。たくさんの原材料を仕入れて、たくさんの労働者を働かせて、大きな資本金でたくさんの物をつくるという時代から、むしろ知識や技術が原材料そのものになる、そういう知識基盤社会に変わってきたのです。そういう中で学校教育、特に大学は教育機能の強化が必要です。一度学んだ財産だけでずっと食べていける時代ではなくなり、いかに継続教育を強化していくのが課題となってきました。何度でも学び直せる、そういう時代に入ってきたのだらうと思います。

20年余り前、大学審議会室長のときに、その当時まだ珍しかった社会人用の夜間大学院を訪ね歩いて調べたことがあります。当時の慶應義塾大学のMBAを出す経済学研究科とか、あるいは青山学院大学の国際研究科だとか、東京大学が始めたばかりの法学研究科の社会人入学だとか、こういうものを調べて歩きました。

学生たちにもインタビューをしたのですが、本当にびっくりしたことは、自ら学ぼうとする学生の多さでした。私の先入観では、夜間大学院は企業から派遣されている学生のほうが多いのだらうと思って行ったのです。インタビューしてみると、確かにそういう学生もいるのですが、自らのブラッシュアップ、キャリアアップのために、自ら来ていたのです。実はそのとき、世の中が変わってきたなと思いました。

最近ではサテライト大学院が非常にはやっています。そういう時代になったのですが、大学の財政という意味では、むしろ収入にはあまりならない。それなりに入るけれども、大学の大きな柱としての収入にはそれほどならないだらうと思います。だけれども、それが大学のステータスになることは間違いないのではないのでしょうか。それだけの機能を持った、教授陣を持った、あるいはノウハウを持っている大学院があるということがこれからの大学の勝負になるのではないかと考えております。

議論

(○：質問者)

高校教育の問題、高大連携の問題

司会 ありがとうございます。学位プログラム、カリキュラムツリーとかいうのは、本学ではまだ深く議論されていないことでもあり大変参考になりました。

コアカリキュラムについての議論はいろいろ行っているわけですが、それを全体の構造として各教員が共有するということについての手だてについては、それぞれの学科に任されているというところがあるかと思います。そのあたりのところはやはり我々も考えないといけないところかなと思います。

もう1つは、高大の接続問題で、大学が落とすのではなくて選ぶという、要するに高等学校と大学のマッチングの部分ですね、それに合うような高等学校の質、言い方をかえますと偏差値で輪切りではなく、入りたいところに入る選抜というものも非常に大きな議論になるかと思います。

玉井 高等学校の質保証をどうするのかというのが大きな論点です。義務教育では、既にその議論はありました。学力テストをどうするかという議論の時にあったのです。義務教育課程ではもう質保証は始まっているのです。しかし、高等学校についての質保証の議論というのはほとんどされてこなかったのです。義務というのは何だかんだ言っても国民教育の一番基礎的な部分ですから、はっきりしているわけです。大学というのも、また別の議論ではっきりしているわけです。間に入る高等学校というのは何かということが昔から議論されてきているのです。

1つの視点は、大学予備教育だというものです。これは、どちらかというと旧制高校的な発想でしょうね。予備門みたいな発想です。

もう1つは、義務教育の延長としてのものです。高等学校は97%が進学するわけで、実態としては国民教育です。だけど、高校のレベルは一体どこなのかというと、これはもう全部高校に任せてしまっているわけです。高校のレベルを保証しているのは、これまでの実態は大学入試ということになります。大学入試が、その高等学校のいわばランクづけになるわけです。しかし、5割が進学する、そういう時代に、大学入試が本当に質保証を果たしているのかというと、そこは疑問になる。今も一部の大学は、もちろん大学として入試による質保証の機能を果たしていますけれども、大学入試が質保証としての機能を果たさないと何が高校の質を保証するのかということなのです。

それが前からの議論にあって、それが基礎テストみたいな話につながるというのはよくわかるのです。つまり達成度調査です。そういうことも必要になってくるのだらうと思います。ただ、それと大学入試とはちょっと別次元なんですけど、今ちょっとリンクしてしまっているのが、非常にややこしいなと思うわけです。

司会 高等学校の教育で、教科書がありますよね。その教科書を理解してない人たちが大学に上がる。教科書をどの辺まで、どの程度まで理解していたら高校を卒業させるのかという視点で考えると、現実に卒業させないということにつながるのではなかなか難しいことになります。

玉井 まず、高等学校教育の基本的な仕組みは、中学校教育の基礎の上にプラスアルファされた教育課程といえます。プラスアルファがちゃんと実現されるための材料が教科書で、まさにそれが全部載っているわけです。「学習指導要領」でも、どこどこを教えなさいと指導されています。高校1年生は基礎なのです。2年、3年はそこからもう一つ発展させています。少なくとも高校1年生のレベルの教育は、多分、進学率が六、七割なら何とかこなせるだろうと考えられています。9割の進学率を想定していないのです。じゃあどこまでの習得を求めていくのかということになります。思い切って、もっと低いレベルの高等学校でいいのではないかとということもありますが、高等学校の先生たちはなかなか納得しないのではないのでしょうか。

落第の問題も大きいですね。日本は落第がないとはどういうことなんだということです。出席日数が足りないから落第ということはあるのですが、レベルが足りないから落第というのは一部の高校は別として一般的にはやってない。制度的にはあるのです。校長の課程認定権、卒業認定権というのは制度上きちんとありますから、それをちゃんと使えば落とせるのです。だけれども、それをよしとするかということになります。

実は、だいぶ前になりますが、昭和の終わりに1カ月間ヨーロッパからアメリカを教育の調査のためにずっと回った際、フランスで落第問題を議論しました。フランスは当時、もう20年余り前ですけど、落第制度がすごくしっかりして、小学校1年生でも落とすのです。その当時、小学校全体で1割が落第をするのですよ。それはなぜかといったら、ヨーロッパの中で最も知育を中心とした教育システムを持っているのはフランスなのだと思います。知育に耐えられない子供というのは当然落とす。落とすのが当然であって、それは何ら恥ずかしいことではないとされてきたのです。しかし聞き取りをしてみると一部のフランス人は、実は恥ずかしいと思っているということが分かったのです。しかも、その後、いろんな調査の中で、あまり早い段階で落第をさせると、発達課題をクリアできないということが明らかになったので

す。ですから、今日では大分緩和されているみたいなのですが、本当に落第をさせるかどうかという問題は文化論なのですね。罪の文化と、恥の文化の違いなのかもしれません。よってそれよりは、達成度テストでもよいのですが質保証をして、少しでも付加価値を高める、そして、その子供たちのモチベーションを高めるのがよいのではと思っています。

単位制高校の導入はそのこともあったのです。高等学校は学年制を中心にしていました。学年制というのは定食型なんです。5教科7科目といますか、主要科目を1つ1つこなしていけばたいへん栄養価の高い食事ができるという定食なのです。栄養的には満点の献立ができていますから、それをしっかり食べればいいんですけども、好き嫌いも当然出てきますから、それに合う、合わないもでてくることになります。それで、アラカルトでもいいじゃないかという考え方が出てきたのです。それが単位制高校なのです。ですから、定食型に向く教育とアラカルトに向く教育があるだろうということになるのです。定食型は確実に身につけさせることができるのだけれども、選択の余地が非常に少ない。アラカルトは偏食に陥るおそれがある。そこはバランスなのですが難しいですね。

昔の高等学校に比べればはるかに多様なタイプの高等学校が出てきているし、科目も多様になっている。それはそれでいいことなのですが、反省すべきは、多様化が多層化になってしまうということです。つまり、レベルの低いところは低いままに安住してしまう。そこを刺激するための達成度のテストを含めた質保証というのがもう一度議論されてしかるべきであるし、具体的な政策として出てきてもいいだろうと思うのです。

大学の単位について

司会 大学の単位の問題について少しお聞きします。1単位の単位認定は、授業1時間、授業外2時間というような決まりがあるようですが、これはどういう根拠でこうなっているのでしょうか。1学年のときの1単位と4年次のゼミの1単位を比べると、4年ではもっと時間が必要だと思います。それを一律に3時間と定義しているのは、キャップ制の問題にもひっかかってきて、教育を展開するうえでのネックになっているのではないかと思います。キャップ制自身も学年によって割合を変化させてよいのではないかと思いますのですがいかがでしょうか。

玉井 おっしゃるとおりです。もともと、講義は15時間で1単位、演習と実験はたしか30時間で1単位なのですね。その発想は、いろいろ説はあるのですが、私はこう思っています。もともと中世ヨーロッパで大学制度ができたときは、寄宿舎制度でスタートしているのです。通うのではなくて、寄宿舎があって、昼間は大学で学んで、

夜は寄宿舎で学ぶのです。多分、あのような時間が根っこにあるのだと思うのです。

もう1つは、近代的になってきて、学習のボリュームなり評価というものに何かの根拠が必要になったということかと思います。好き勝手に誰かが、こんなにやりました、うちの大学は何十単位です、うちの大学は何単位ですというわけにはいかないだろうというふうになったのですね。ですから標準的にはこれくらいの時間数でやろうということになったのだと思います。

この時数ですが、平成3年に設置基準が変わっています。あまり皆さんご存じないかもしれませんが、15時間、30時間と書いているのですが、もともとの単位の構成の仕方が変わっています。それまでの「大学設置基準」で、1単位の認定について、講義は15時間で、あと30時間は自ら勉強しなさいと規定してあります。ところが平成3年の大学設置基準は、1単位は、標準だったかな、45時間相当の時間を要する内容をもって構成することを標準とすると、ボリュームにしたのです。それぐらいのボリュームが1単位なのですよということになったのです。実際に教室で勉強するのは15時間です。けれども、トータルは45時間ぐらいの勉強が標準です。平均的に45時間ぐらいの勉強時間がかかるぐらいのボリュームで1単位は構成しなさいというふうになっています。ボリュームに置きかえたのです。

実際問題として、学生によって勉強時間は違ってくるはずだし、進み方によっても違ってくるはずだし、講義の内容によっても違ってきます。したがって時数にこだわらず好きなようにしたらどうか、自由化してはという議論がかなり大勢を占めたのですが、では質保証はどうするのかという議論になり、最後に45時間相当のボリュームは共通項で持っておこうということになったのです。

キャップ制の問題なのですが、その意味はよく理解できるのですね。それはたくさん単位を用意しておけばいいわけではない。さっきの学位プログラムですよ、付加価値を何にするのかを明確にして、付加価値に見合う単位を用意する。そして、より広く学ぶということにすると、キャップを決めておかないと本来の目的が達成できなくなるわけです。たくさん単位を取ればいいわけでもないし、ぎりぎりでもよくないということになります。こういう議論を始めると、結局はさっき言ったように大学も高等学校並みだよ、じゃあ思い切って教科書でもつくるかという議論もありそうですが、そこはやっぱり違うのだと思いますよね。

大学における質保証

司会 質保証のところで一番問題なのは、やはり日本の大学生が授業外であまり勉強しないということが問題なのです。

玉井 それは主体性が一番望ましいんだけど、なかなか理想どおりにはいかないですよ。そうすると、そう仕向ける仕組みを持っておかなければならないということになります。

司会 質保証の質の内容が難しいと思うのですが。文科省のほうとか審議会のほうの答申でも目安になるようなことはかなり書いてもらっているのですが、少しお教えいただけますでしょうか。

玉井 日本はジェネラリストがまだ主力の社会です。それは必要だとは思いますが、知識基盤社会では付加価値、つまりどういう専門性を持っているのかということもかなり問われるようになってきているのはまず間違いありません。ですが、アメリカのような専門細分化された社会にはならないと思います。恐らくもう少し専門性が求められるでしょうが、あそこまで細分化されないのではないかと思います。

そうすると大学はどういう付加価値、どういう専門性を目指すのかということになります。もちろんジェネラリストを目指す大学、学部・学科もいいのですが、より専門性を目指す学部・学科が出てくるだろうと思うわけです。さきほどポートフォリオのお話をしましたが、勉強せねばならない仕組みが質を規定するのでかと思うのです。

司会 大学生がそれぞれの夢とか目標とか、そういうものをみんな持ってればいいのですが、なかなかそういうのをイメージできない学生も多いというのを、どのようにエンカレッジ（encourage）すればよいのでしょうか。

玉井 アメリカやヨーロッパと比較してしまうのですが、欧米の場合には、どういう仕事を選ぶかというのは、かなり早い時期に描いてきます。多くは大学に入るときには決まっています。多くの高校生はいい職業につく、自分はこんな職業につくのだと言って大学を選ぶことが結構あります。しかし日本ではそれはあまりないわけで、キャリア教育をきちんとしていないと言われるのです。確かにそのとおりで、中学校あたりからキャリア教育というものがありますが、日本にあるキャリア教育というのは進学教育で、どこに進学するかという意味でのキャリア教育であって、どういう仕事、どういう生き方を社会人としてしていくかというキャリア教育は非常に手薄だと思います。これは少しずつですけど、やっていかなければならない課題なのです。まさにキャリア教育から積み重ねていかねばならないと思います。ただ、大学ではそれをずっと待っているわけにはいきませんので、それでさっき申し上げた金沢工業大学の10年後の自分というのはなかなか面白いやり方かなと思うわけです。そうすると自分の夢を描きますよね、10年後の自分はこうだと。それが目標の意識化に有効なの

だと思います。

勉強させる仕組みとして、例えば島根大学の教育学部はなかなかユニークです。あそこは卒業するまでに 100 時間ボランティア活動をするようになっていきます。それが教員になる道なのです。あれもポートフォリオなのです。ポートフォリオで、自分はどれだけいろんなボランティア活動しながら学んでいくのかを 100 時間かかってやるわけです。あの取り組みは高く評価されています。

司会 1 時間の講義に 2 時間の学習という方向性はやはり正しいと思いますよね。受け身で聞いているだけじゃなくて、自分でやっていって授業に出なきゃなんないという仕組みがあると、もう少し主体的になると思うのですよ。ただ、いきなり 2 時間やれと言われても、実績が全然なくて「はい、2 時間です」というようなことはなかなかできないので、当面 1 コマの講義に 1 時間ぐらひは学習するようなシステムをつくっていくべきだろうと思うのです。

キャップ制の方はびしっと来るわけで、先生方はどうしてキャップ制が厳しいのだという話になってしまうのです。オーバーしているぞと言われても、いいじゃないのという話になるのですね。時間をのばせといいながら単位数は制限を設ける。いろいろな制度がうまくまとまっていないように思うのですが。

玉井 そうですね、それは大綱化以来の方向なのです。教育課程という言葉が初めて入ったのは平成 3 年の「大学設置基準改正」ですから、それまでは教育課程という言葉がなかったのです。ですから、それまでのものとうまく整合しないと感じる先生もいたのだと思います。

教育と研究のバランス

司会 大学の教育や質保証の問題を論じるときに、グローバルスタンダードということが出てきます。欧米の大学でいろいろ展開されているようなことを日本の大学に導入することについて、それって大学の先生の仕事なのというようなものもありますよね。コンセンサスがないとなかなか進められないような気がするのですが大きな課題ですよね。

玉井 アメリカ型というのはちょっと異質な大学制度なんです。とにかく教育と研究は一緒に成れない。なぜならば、研究はわからないことを研究することであって、教育はわかっていることを教えるのだという考え方なのです。大学院制度をつくったのはアメリカなのです。ヨーロッパは教育と研究が一緒だと考えてきたわけですが、大学が大衆化し、ユニバーサル化するに及んで、一緒はもう難しいとわかったのです。ヨーロッパでもそうなので、やはり学部までは教育だということになってきたのです。グ

ローバルスタンダードというよりも、時代の流れなのではないでしょうか。日本もそれがほぼ今当たり前になってきているのだと思います。

しかし、今いらっしゃる教授陣を考えてみると、それらの先生達は、そういう世界に育っていないのです。ですから教育に力を注ぐべきだと言われても、研究はということになるのです。そこはやっぱり徐々に変えていくしかないんです。突然、意識を変えろと言われてたって、なかなかそう簡単にはいかないのではないのでしょうか。

導入の方法なのですが、例えば慶應義塾大学の藤沢キャンパスが、時代を先取りする形で二十数年前にできました。今はちょっと落ちていますが、当時は非常によかった。あのとき、慶應の石川さんが塾長で、私は大学審議会室長で、石川さんが（大学審議会の）会長でもあったものですから、いろんな話をいたしました。その時の記憶で残っているのが、石川さんが言ったのは、慶應の三田はなかなか変えられないと言うことばです。三田のキャンパスはなかなか変えられない。それで湘南にしたのだそうです。湘南は、欧米に留学した教員を主に配置したのですが、そこで初めて大学改革が動いたのです。湘南が動けば、三田も座してはいないだろうという戦略だったそうです。

人の意識を変えるのはそう簡単ではないので、どこかで刺激をしながらやっていく。方向としては、学部までは教育機能、大学の使命の1つである研究は大学院でしっかりやればということであったのです。ただし、大学院まで含めて、自分の大学はどの機能に特化するのか、総合型で本当に世界に伍してまで戦うのか、あるいは特定の人材育成で頑張るのか、それともほかの道なのかを選択しなければなりません。これはやはり戦略の問題ですね。

司会 玉井先生に言われて研究も重要であると思うのですが、予算をいろいろ投じていっても、現場の先生方もそれにかなりエネルギーを注がなきゃいけない、時間もかけなきゃいけないということになってくると、予算はあってもなかなか研究の時間が作れないということになります。その中で教育の質保証ということが出てくるとこれは大変な話で、授業の持ち時間を少なくして質をとという方向が出ればいいのですが、そうはいかないわけで、難しい問題なのだと思うわけです。

玉井 難しいですね。いかに教育が主であっても研究があることが刺激なのですから、そこがうまく機能するように配慮しなければならないわけです。だから、持ちコマ数をもうちょっと下げる。玉川のキャップ制の発想はそうなのですよ。持ちコマ数も下げて、1つのコマにもっとエネルギーを注入してくれという意味でもあるのです。それが1つのやり方と言えます。

もう1つは、大学の運営の仕方いかんなのですが、教員の事務的な仕事が

多くなったのです。それをどのように整理するのが問題なのです。それを教務職員がどこまで補助できるかがポイントになります。そのためには、単に教職員をふやせばいいということではなくて、仕事のやり方を考えることが重要なのです。大学教員の仕事のやり方は、一人職場みたいなもので、一人で全部やってしまうことが多いのです。それは非効率的です。それをいかに分担するのかということなのです。

司会 仕事は事務職員ができるように体制を整え、精査して簡素化することが必要なのだと思います。学生のためということで、守備範囲が広がり過ぎているのですよね。いいことなのですがけれども、縮めないと先生もたまらないのです。このあたりがまだ課題なのです。

玉井 そうなのです。ちょっと前までの大学はカリキュラムそのものがなかったのです。自分の好きな科目を好きにとっておいて、聞いていても聞いていなくても、単位は取っていたわけです。

司会 今は15回必ずやらなきゃいけないということになっていて、休んだら補講なわけで、この負担はしんどいですよ。私たちが学生のころは、文学部の先生なんか授業回数でいうと10回もしていなかったですよ。おくれてきて早く帰ってね。でも、大学はのんびりしていたのですよね。その頃は、学生が勝手に勉強するからという考えがあったのですけどね。学生も教員も必ず15回ってなるとなかなかしんどいですね。

玉井 それだけカリキュラムが大切になってきたのです。だから、シラバスというのが入ってきて、最初のシラバスは実に簡単でしたけど、今は相当きめ細かなシラバスになりつつあります。進んでいる大学のシラバスを見てみると、中学や高校の授業案みたいですよね。週案みたいな感じです。毎日の授業案までではないけども、少なくとも週案ぐらいは書いてるのじゃないのかと思います。

司会 シラバスはある意味では、学生に対する契約書という形で言われたりしますよね。大学院クラスになると、こういう内容の授業があると書かれていたのここに来たのにないんですねとか言う話になると大変なことになります。そこら辺も気を遣いますね。

玉井 でも、ユニバーサル段階まで来た現在では、誰でも高等教育にアクセスできるようになっていて、そういう人たちが何らかの付加価値を得ることができるというのが高等教育の役割になったのだと思います。大学はその役割を果たさねばならないのだと思います。

大学経営と質保証

司会 そうなのですが、大学の入学定員は増えているのですが、18歳人口は減っているわけで、大学入試のセレクション機能がだんだん弱まって来ているのも事実ですよ。そのような時代の大学教育の苦労というか仕組みづくりが大変になってくると思うのですがどうなのでしょう。

玉井 どうなのでしょうかね。これは大学、各学科といいますか、それぞれの戦略の問題でしょうけれども、レベルを下げてでも学生を確保するのか、それともある程度のレベルはやっぱり守るのかという選択になるのだと思うのです。レベルを維持してそれに対する評価を得ていくということも考えられるのです。私はどちらかという、痩せ我慢をしてでもレベルはできるだけ維持していくという方を選びます。そして、それを評価につなげていくのがよいのではないかと考えていますが、経営的には苦しいことになります。

司会 経営側からすると、そういう時代が来るからという予想のもとに財政をしっかりとっておくということが課題だったのだと思うのですが、これからどんどんとそういう時代に入ってきますよね。オリンピックの2020年からが問題ですよ。レベルを維持するだけでなく、上げられればそれにこしたことはないのですがどこの大学も課題ですよ。

玉井 一概には言いにくいのですが、やはりある程度維持してそれを評価につなげるほうがよいように思えるのですけれどもね。

司会 冗談みたいな話ですけど、府立高校の先生が卒業する生徒を見ていて、この子はとても社会で働いていけないと思ったら大学進学を勧めるのだそうです。定員割れの大学であればその生徒が合格することになるのですよね。52%が大学に行っているからといって、それが上位の52%であるという保証はないわけです。そうするとやっぱり高校の質保証ですか、学力テストをしてほしいというような議論もおきてくるのですよね。

玉井 このように質保証について議論できるようになったのは、やはり豊かになったのだと思います。社会が余裕を持ってきたというわけです。そうじゃない時代だったら、そもそもそういう余裕がないわけですからね。教育の世界では、昔から知識の質が問われてきていたのですが、そうもいかないのが現実で、ずっと量の問題として議論されてきたのです。ですから質保証の問題は、むしろ教育の原点に戻れるのではないのでしょうか。知識は、量ではなく質の問題だということなのです。当然、社会全体がそういう方向に動いていくことになります。それができるような余力ができてきたのだ

から、学生が持っている力をさらに増加させてほしいということになります。能力を倍増するくらいでないといこの人口減の社会は乗り越えられないと考えるわけです。

大学院の需要

司会 大学院の問題なのですが、文系の大学院卒生の採用が企業のほうではなかなか進まないのですが、これはやはり大学院教育が企業とミートしないような問題があるのでしょうか。文系の大学院の修士卒をエンカレジしても、就職にうまく結びつかないのです。理系の大学院修了者は採用されるのですが、文系大学院では企業の求めているものがプラスされてないからなのではないのでしょうか。

玉井 昭和の終わりから平成の初めにかけて、企業にアンケート調査をやったことがあります。これからの人材育成で、大学院をどう見ているのかというものでした。そうすると、かなりの企業が文系でも大学院修了が必要だと答えたのです。二十数年前ですよ。多分、世界的にもそうなのです。企業人は、外国の人とやり合うとすぐわかるのです。相手の名刺に Ph.D. と書かれている。それが欧米ではごく当たり前になっているのに日本ではなかなか進んでないのです。それは多分、企業側の問題もあるのでしょうけれども、やっぱり大学院にそれだけの魅力がなかなか育っていかなかったのだらうと思います。

じゃあ今、本当に昔のままなのかというと、私は文部科学省の官房長だったわけで、採用にも関わっていたのですが、院卒（大学院修了者）が多くなっています。特にいわゆるキャリアとよばれる一種では多いですね。これは別に文部科学省だけじゃないですよ。院卒がかなり出てきている。5、6年前ですが、応募者の半分とは言いませんけれども、2割から3割は院生だったですね。なかなかしっかりしていて、やっぱりいいですね。ですから大学院修了が求められるという方向に向いているし、多分そうなると思います。

司会 私もそう思います。事務職員などでも、修士を出た専門家が必要なのですが、企業に認められないというのは本当なのかなと思っていますが、いかがでしょうか。

玉井 多分、実態調査をすれば、日本の院卒が増えたということもあるのですが、文系でもかなり進出しているのだらうと思います。ただ、リーマン・ショックなどの社会情勢もあってのびていないのだと思います。ここがもう少し変わってくれば、私はもっと上がると思っています。少なくとも国家公務員は増えてくる。他の役所に聞いても院卒は増えていると言っていますし、多分、企業でもかなりのところはそう見ていないかと思っています。学部卒で、あまり勉強していなくてもよい、あとは会社が鍛えるという時代ではなくなってきていると思います。

司会 ありがとうございました。

※ ここに掲載した文章は、玉井日出夫先生に内容を確認していただいた上で掲載した。

平成 25 年度 大学教育研究会講演記録(2)

－ 大学と中学校・高等学校との連携の実際－

2013 Record of Lecture at Academic Meeting on Higher Education (2) :

Actual Relationships between Showa Women's University and
Its Attached Junior and Senior High Schools

押 谷 由 夫* ・ 鈴 木 円**

OSHITANI, Yoshio & SUZUKI, Madoka

友 田 泰 正*** ・ 安 東 由 則**** 編

TOMODA, Yasumasa & ANDO, Yoshinori (eds.)

* 昭和女子大学人間社会学部初等教育学科・教授

** 昭和女子大学人間社会学部初等教育学科・准教授

*** 武庫川女子大学文学部教育学科・教授／教育研究所長

**** 武庫川女子大学文学部教育学科・教授／教育研究所・研究員

平成 25 年度 大学教育研究会講演記録 (2)

－大学と中学校・高等学校との連携の実際－

講 師 押谷由夫（昭和女子大学人間社会学部・教授）
鈴木 円（昭和女子大学人間社会学部・准教授）
実施日 平成 26(2014)年 2 月 27 日(木)
場 所 武庫川女子大学教育研究所

今回の課題設定：

昭和女子大学をもつ昭和学園は、幼稚園から大学院までを有する総合学園であり、全人教育を掲げ、私学としての特徴を生かして、様々に先進的な取り組みを行ってきた。附属学校と大学との連携における「五修生」の導入（中高課程を 5 年ではば終え、残りの 1 年は高校に籍は置きながら、昭和女子大学の授業に出席して先取的な学びを行う制度）は、その一例である。この他、人見記念講堂などでの芸術鑑賞や著名な研究者や企業人、社会人の講演等や著名な研究者や企業人、社会人の講演等の実施、自然の中にある自前の施設を利用した協働体験や作業体験などの体験学習の導入、ボストンにアメリカ・キャンパスの創設、ブリティッシュ・スクールとの連携、各学科の特徴を生かして地域と連携した様々な取組などを挙げることができる。

今回の研究会では、附属中学・高等学校と大学との連携のあり方をテーマとする。昭和女子大学とその附属学校では、どのような取り組みがなされてきたのか、そこにどのような問題や課題があり、どう対処しているのかなど、実際の取り組みを話題として提供してもらい、議論することとした。折しも、昭和女子大学附属中学・高等学校では、従来、その卒業者のほとんどは上の昭和女子大学に進学していたが、近年、大きな方向展開を行い、大学進学先の選定を自由とされた。こうした改革の背景やその効果、課題、見通しなどについても学びたいと考えた。

少子化がさらに進んでいく中、附属をもつ女子大学としての課題は共通している。昭和女子大学での実際の取り組みの紹介とそれをもとにした議論から、本学の附属中学・高等学校の進路指導のあり方、武庫川女子大学との連携のあり方について考えるための手がかかりとしたい。

（文責：安東）

講演 1：押谷由夫 氏

はじめに

本学と昭和女子大学とは、先代からになるのでしょうか、理事長先生同士が大変仲がよくて、お互い切磋琢磨しながら学園を発展させてきたということを伺っております。もちろん規模からいいますと貴学のほうが断然大きいのですが、そういう縁をいただいておりますので、少しでもお役に立てるようなお話ができればということで、お引き受けさせていただきました。よろしくお願い申し上げます。

実は、この企画をお聞きしたときに、本学で一番核心をついてお話ができる先生をと考えましたときに、鈴木円先生がおられました。実を申しますと、本学の建学の精神を具体化されたのは人見楠郎¹⁾という先生です。その人見楠郎先生の懐刀が鈴木円先生でした。人見先生も御老体になってこられますと、常に鈴木先生に、学園でいろいろと書いたりすることとか、いろんな方針等において、先生に任せるぐらいの信頼関係の中で、中高の教育についてもしっかりと取り組んでこられました。そして、私どもの初等教育学科に来ていただきまして、社会科の教育を担当いただいておりますが、先生は非常に万能ですから、国語、社会、その他もろもろ全てについて御指導いただける先生です。

具体的なことは、だから鈴木先生にお話しくたくといたしまして、私のほうは、大学のほうで、どういう形で附属と連携を保っているのかという簡単なレポートをさせていただこうということで、用意させていただきました。

1 多様な交流

大学において附属との多様な交流ということを行うわけですが、これはどこでも同じだと思います。

・教員の交流

まず、先生同士の交流、そして施設の交流、活動の交流、勉学の交流、研究の交流ということが挙げられると思います。教員の交流におきましては、中高部の先生が大学の教員になっていただく。鈴木先生がそのお一人であります。そういう形です。と同時に、中高部の先生が大学の非常勤講師や特別講師として来ていただくということがあります。さ

¹⁾ 創設者人見圓吉氏の子供で、2代目の理事長。「世の光となろう」を中心に据え、戦後において建学精神の具体化と学園の基盤整備を、強力なリーダーシップのもとに推し進め、学内環境整備や国際化対応などにも力を尽くした。

らに大学の教員が中高部の研修に講師で参加する。これはどこでもあると思うのですが、ただ、それらがスムーズに行っているかという点、なかなか難しいところがあります。こういう交流をもっと活発化させるべきだと思うのですが、私のところでは、一応計画的に、そういう教員の交流が行われております。

・施設の交流

次に、施設の交流ですけれども、本学には人見記念講堂とかグリーンホール、あるいは体育館とかグラウンドとかがあるわけですが、附属の皆さん方もそれを使っていたいて、普通の中学校、高等学校と違う大きなグラウンドとか大きなホールを使って、いろいろ練習したり発表したりできる。こういう利点があります。大学の図書館や高度の実験器具や観察器具なども附属の子供たちが使えるようになっています。

・活動の交流

活動の交流では、大学祭への招待とか、附属の発表会とかへの学生の参加、協力があります。後者はどちらかというと、大学のほうが附属の恩恵を受けているのであり、附属があることによって、学部の指導を充実させるということになります。

・勉学の交流

勉学の交流ということで言いますと、鈴木先生のほうからお話があると思いますが、五修制度、つまり高校2年で一応高校の勉強は終えて、3年生になると大学で授業を受けて単位として認められるという制度があります。5年間大学に在籍することによって、ダブル・ディグリー、つまり留学制度などを確立して2つの学位を取ることができるように、今、模索しているということでした。うちの大学と、もう一つ提携している海外の大学においても5年間の期間を設ければ学位をもらえるようにしようということです。そういったことにも附属の皆さんが魅力を持っていただければ、五修制度をさらに充実させていけるのではないかと。

あるいは、附属の学園祭への大学の協力では附属の生徒がいろんなことを調べますが、その際に取材に来ていただいたり、私も取材を受けたことがあるのですが、いろいろ附属が取り組んでいる中で、大学の先生に聞いてみようかという交流があります。

さらに、制度的には、教育実習を受け入れていただいたり、あるいは計画的に観察参加をさせていただいたりしています。またこれも鈴木先生からお話があるかと思いますが、附属のほうに大学生の参加席というのを設けていただいて、時間があいているときにはそこへ行って常に観察することができます。今、参与観察的にかかわっていくことができるようになっております。

研究の交流では、附属の先生方が大学院生として学んでいただくこともあります。今、附属小学校の先生がドクターコースに来て、学んでいただいておりますが、こういうこともこれから活発化していけばいいなと思います。

・研究交流

次に、附属の研究活動への大学教員の協力については、もっと活発化すればいいと思います。中高部はかなり頑張って、ユネスコ・スクールの指定を受けているとか、あるいは国際バカロレアにも挑戦していこうとか、あるいは文部科学省のいろんな指定を受けていこうとかいうこともありますので、もっと交流できるかもしれません。

あるいは、大学のいろんな研究施設ありますので、そういったものをいっそう附属の生徒が使えるようにして、勉学意欲を高めていくこともできると思います。多様な交流ができるというのが、附属の大きな特徴かと思いますので、そういったことをさらに考えていくということが課題としてあると思います。

2 大学から附属への働きかけ

大学から附属への働きかけということで言いますと、実は附属の皆さん用のオープンキャンパスを行っていますが、そのときには、3年生だけではなく、2年生、1年生も広く参加いただいて、オープンキャンパスと体験授業と一緒にやったりすることもあります。3年生だけじゃなくて、2年生とか、あるいは1年生とかでも大学への興味を持たせるような取り組みを行うこともできます。

入学前のオリエンテーションをどのようにしているかという質問があったんですけども、初等教育学科の場合は、他のAO入試とか、高校推薦で合格した生徒と一緒に、入学前オリエンテーションをしています。だから、附属の生徒用に特別に行うというオリエンテーションはありません。初等教育学科の場合は、共通に課題図書を与えてレポートするというような形で対応しております。

3 附属から入学後の指導

次に、附属から入学後の指導はどうするのかということですが、ほとんどなされていないように思いました。学科によってやっているところもあるかもしれませんが、ただ、成績は附属に報告する。これは、どの学生も一応母校に成績を報告するというようなことをやっておりますけれども、五修生については特に連絡を密にして、高校の履修もしっかりできるようにと、そういう指導をしているところです。附属の学生用に、入学後、特に指導するということは、課題であるかもしれません。

4 校長推薦に関する学科ごとの基準

次に、校長推薦で学科ごとに何人か入学できるということになっています。その校長推薦の基準は学科において異なっておりますが、一般的に学校推薦のための条件を設定しておりますけれども、それよりも若干低く設定してあります。しかし、基準を満たしている学生がいる反面、満たしていない学生も出てきます。それをどうするかということで、学科で検討するのですけれども、余りかけ離れていないのであれば、基準に満たしてなくても入れるという形で対応しています。ただ、余りにも基準に満たしていない場合は、校長推薦で上げてこられることが実はおかしいわけで、一応、ノーサンキューと言う場合もあるという形で対応しております。うちの学科（初等教育学科）の場合ですけれども、100%希望すれば、全部受け入れるというわけではありません。具体的なことは鈴木先生のほうからお話しすることになりますが、とりあえず前座ということで私の話を終わらせていただきます。

参考

昭和女子大学の建学理念

人見圓吉・緑夫妻が、トルストイの「愛と理解と調和」を基調とする教育の理念に深く共感し、大正9(1920)年に日本女子高等学院を創設し、その2年後に附属高等女学校を附設した。人見は雑誌『劇と創造』を発刊して詩集を発表するなど、詩人としても活躍した。

「世の光となろう」を建学の精神とする。これには新しい時代を切り拓くには世のため人のために進んで自分の力を役立てようとする女性を育て、女性の力で新たな世界を築かねばならないという思いが込められている。

また、創設以来、学習面のみならず、「豊かな人間性を築いていくための教育＝全人教育」に力を入れてきた。その一環として、人見記念講堂での芸術鑑賞、自然の中で仲間との共同と協働の体験をする学寮研修などが行われている。さらに、国際的な視野をもって社会に貢献できるよう、アメリカキャンパス（昭和ボストン）での研修やブリティッシュ・スクールとの交流なども積極的に取り組んでいる。

講演2：鈴木 円 氏

はじめに

よろしくお願いいたします。それでは、押谷先生からのお話の後を受けまして私からお話しさせていただきます。私は、どちらかという、大学の人間というよりは、附属の人間として、ここ10年ぐらい東京の改革の波の中にいましたので、どちらかという、附属寄りのお話になるかなと思います。まず、私立学校における連携はどういうことかということ踏まえておきたいと思います。

1 私学における連携とは

今、連携ばやりで、何でも連携しますよね。幼小、小中、中高、中高大が連携すれば何かいいことが起こるというような勢いで連携というキーワードがすごく多用されています。特に東京では、公立の私学化と言われるような現象が非常に多く起こっておりまして、今まで私立学校がつくり上げてきた中高一貫教育とかの、一貫性を持った教育を公立がどんどんやるようになった。そうすると、財力、マンパワーともにまさる公立に、私立が太刀打ちできないという状況にも陥ってしまうのではないかというのが、東京の私学が抱いた危機感であったわけです。

(1) 教育的側面

そのような危機感から、東京私学教育研究所が中心になって研究会を立ち上げ、私立学校の特性はどこにあるのかということを私立学校の仲間といろいろ研究することになり、5年半にわたって研究を行いました。行き着くところは、教育理念の一貫性ではないかということにやはり帰着してしまうのです。中高一貫教育につきましては、私の拙い論文²⁾をコピーしていただいております。戦前の中等教育は、現在の言い方では中高一貫が自然な形でしたので、旧制から続いている私学は、中等教育5年制とか、7年制とか、そういう旧制度のもとで教育体系をつくっていたので、むしろ、戦後改革でそれを変化させられなかったという思いが、現在の中高一貫教育に結びついたのでないか。人見楠郎などの考え方を見ているとそう思います。

このようにもともと自然な形で一貫教育を成立させてきた中高一貫に、今度は、大学をどう

²⁾ 鈴木円 2007、「私立中高一貫教育に関する一考察：私立中高一貫教育研究委員会編『私立学校における中学校高等学校の一貫教育』（1973年）を中心に」『学苑』800、pp.50-62

くつつけるかという話になってくるわけです。私どもの学校などは、どちらかというと旧制高等女学校であった中高の方の力が強くて、大学は後からできたというような位置づけになっていたわけです。特に人見楠郎が生きていた時代はそういう形でありました。

大学と中高が連携していく方法については、やれば何でもできると思います。つまりあるのは、中高と大学の間の心理的障壁だけだと思うんですね。うちなどは非常にやりやすく、ワンキャンパス（one campus）ですから、お互いに行き来しようと思ったら、ものの2、3分で行けるわけですから、どんどん交流を進めて、どんどん授業をやり合おうじゃないか。先ほど押谷先生がおっしゃっていましたような、いろいろ行ったり来たりして授業をやり合う。中高の理科の教員が大学の専門的な実験室を使って授業をやるといった試みもしていますから、そういうことはやろうと思えば幾らでもできます。教員も学生・生徒の交流も、円滑にいけばどんどんやれると思います。

恐らく一貫性ということで、一番重要であって、かつ難しいのは、カリキュラムの内容の一貫性ということだと思います。これはなかなか難しい問題で、大学と中高のカリキュラムの一貫性をどこで出していくかということは非常に難しい課題です。いろんな私学に聞いてみしても、これはなかなか実現できていないようですね。基本的には、先ほど冒頭に申しましたように、カリキュラムの内容よりも、理念の一貫性というところで教育的な側面は考えて、結局、そこに戻っていくのかなとは思っております。

(2) 経営的側面

経営的な側面としましては、下世話な話ですけれども、こっちのほうが非常に重要になってきているので言いますけれども、内部進学者が存在しているということは大学入学者の安定確保につながります。これは絶対に外せないところで、附属の学生が一定数入ってくれるから大学がもつということです。そういうふうにいる私学はいっぱいあります。他方、中高のほうは、大学進学が保証されているということが入学者の安定確保につながってきたということですね。これは現在どうかというと、ちょっと疑問符がつきますが、かつてはそうであったということは言えると思います。

(3) 状況の変化

それで、状況の変化ですが、冒頭のお話にありましたように、大学のほうでは18歳人口の減少ということで、入学者獲得競争が激化しております。それから大学を取り巻く環境が非常に変化しておりますので、文部科学省と大学の関係等も変化しております、それはご案内のとおりだと思います。それから就職や進学実績による新たな大学の序列化も始まっていると思います。

中学、高校のほうは、地域によって差があると思いますけれども、東京などは偏差値に

よる序列化が非常にひどくなっています。学習塾が学校経営に口を出してくるということが、もう 10 年以上前から始まっています。偏差値自体も、どのように算定されているのか、よくわかりません。

それから、大学受験競争が緩和しております。ですから、できればチャレンジしたい、自由に進路を選びたいというニーズが高まっております。さらに保護者、生徒のニーズもどんどん多様化してきているということで、今までやってきたやり方が通用しなくなったというのが本学などの場合は実情です。それで大学への進学要件について改革を行わざるを得なかったということになります。

2 附属と大学の連携のあり方：昭和女子大学と附属昭和中学・高等学校の場合

2 番目ですが、附属と大学、大学と附属の連携のあり方です。ここからの話は、昭和女子大学や附属の公式見解ではなくて、私の個人的な見解だということをまずお断りしておきます。いろんな見方があると思いますが、若干、裏話めいたもので、そのつもりでお聞きいただきたいと思います。

(1) 中高一貫 5 年制カリキュラム開発と五修生（大学授業参加学生）制度

附属としては、冒頭のご案内にありましたように、中高一貫 5 年制カリキュラムを開発しました。本当は 6 年あります。中・高、3・3 の 6 年ですが、その 6 年間の学習内容を精選集約することによって、5 年間で完了させるというカリキュラムを開発しました。

それは、昭和 50 年代の研究開発指定の最初期のころでしたが、その前から、いわゆる四六答申を受けて、私学の理事長、校長の仲間が集まって、中高一貫教育研究会をやっていました。その中では中高の一貫性は何が長所かということをいろいろ議論したようで、そのうち私どもの中学・高校の場合は全人教育ということに力点を置きたいと考えました。「全人教育」に力点を置いて、カリキュラムを精選し、余裕が出た 1 年間を自由に使わせればいいじゃないかというのがカリキュラム開発の発想のもとです。どうして 5 年間で終わるかという、中学と高校の学習内容のダブりを精選して、完全にカリキュラムの組みかえをやりました。当時、研究開発指定は、研究開発指定が終わったらもとのカリキュラムに戻すということになっていたようですが、そのまま研究を続けて、中高 5 年制を完成させました。

あまった 1 年間の使い方の 1 つのオプションとして、大学に 1 年早く進んではやく専門的な学問に触れるのもいいじゃないかということが、五修生制度の始まりだったわけです。これも制度的にはかなり当時は難しいことでありまして、今でもいろいろと制約はありますけれども、名目上は科目等履修生です。大学の科目等履修生という形で、ほぼ全て

の授業を大学で受ける。ですから、高校の制服も着ないで、大学生と全く同じ生活を送らせるという形です。ただし、ホームルームだけは高校のほうに設けなければいけませんので、週1回ホームルームだけは高校でやるということで、東京都はそれで認めるという形になっています。これは監督官庁によって見解は異なるかもしれません。

(2) 中高と大学の接続方法

・従来の制度設計

昭和50年代から五修生制度をやっておりまして、これで中高一貫教育、それから中高大一貫教育でどのような効果があるかということを検証するということで、中高部の場合は、中学校入学時に昭和女子大学に進学を希望するということを条件にしました。ですから、昭和女子大学以外には行かないという条件で、中学校に入学させるという方法をとりました。そうは言いましても、途中で進路は変わりますから、中学校3年生までは変更を許すことにしました。中学校3年生までは変更を許すが、高校に入った段階では、高校は昭和女子大学の進学課程であるということで教育を行ってきました。

当時は、中高大を一貫させて、五修生ということで3分の2ぐらいの生徒が大学に進みました。当然、大学に五修生として進学した当初は学力面では他校からの入学生と比べて劣ってはいたのですが、卒業までの長いスパンで見ますと、卒業時には非常に優秀な成績になった学生が多かったという検証結果があります。

そのようなことで、15年あまり続けてまいりました。従来はそういう制度設計をしておりまして、昭和女子大学に進学するための中高であるという位置づけですから、非常に入り口を厳しくしていたわけです。入り口を厳しくして、中学校の入試は、学力テストだけではなくて、本人の面接も保護者の面接もやっていましたし、多面的に選抜をしておりました。それで、非常に厳しい条件を課して、これこれの条件、昭和女子大学に進学するための条件をのめないなら入学を希望しないしてほしいという言い方をしていました。そんな形でも、たいへん多くの保護者・児童が中学校に入学を希望してきたわけですね。それが当時の状況です。午前3時ぐらいから正門前にテントを張って願書受付の開始を待っている保護者の方もいるという状況でしたから、かなりの競争率になって、入試査定には徹夜で取り組むという状況でした。

そのときは学校側が非常に強い態度をとっておりまして、中学校から高校に行くときにも内部選考をやりまして、学力の低い生徒は落としていました。ですから、中高一貫教育ではありましたが、中学校までしか行けない子がいたわけです。ごく少数、数名というレベルですが、落としました。他校に移る者を出すというのは、本当はどうかと思うのですが、中だるみの防止ということで、そういう厳しい態度をとっていたと思います。

それから、高校から大学へというところですけども、こちらでも学力試験を課してありました。ですから当然、五修生として進学を希望しても行けない学生もいるし、あるいは普通に高校3年生を修了して大学に行こうとしても落ちる、つまり入試で不合格になる生徒はありました。学校のしいたルールはルールなんですけれども、そこに最後まで乗れるとは限らないというのがうちのやり方です。

ただ、当時は五修生として3分の2ぐらいの生徒が昭和女子大学に進学しておりましたので、教育理念の一貫性という面では彼らは非常に貢献したのではないかと思います。本学の場合は、行事面とか、生活様式とかが、大学と中高と非常に似通っているものが多かったので、彼らの働きによって一貫性は維持されたと思います。大学のほうの教員にも中高卒業生がたくさんおりますので、教員間の意思疎通という意味でも一貫性には貢献していたと思います。

このような強い私学のやり方というのは、実は先ほどから話に出ております人見楠郎が中高大の校長、学長であり、さらに理事長も兼ねていたので可能であったということは言えると思います。つまり、理念の一貫性は、やはり上に立つ人によるところが大きいので、同一人物が理念を体現していたということがうまく作用していたと思います。

・現行の制度設計

ところが、従来のやり方が時代に合わなくなりました。現行の制度設計は従来とはかなり変わってきております。従来から変わらないのは、五修生制度そのもので、それはまだやっています。五修生として大学に進学する、それから、高校3年生が終わって大学に進学する、の両方できます。これは変わっておりませんが、従来は、できれば五修生として進学しなさいという指導をしていたのが、全く生徒の自由にまかせることになりました。生徒の意志でどちらでも選択できる。それから、高校から大学へ進学するときの学力試験を一切やめました。何で判断するかというと、高校の成績のみです。

現行制度は、まず五修生として進学する場合は、高校2年時の11月ごろ、大学の各学科に希望者リストを中高から提出いたします。高校の成績順に並んでいるリストで、各教科の点数が書いてあります。それから中高独自の性行査定、生活評定ですが、それも点数化して載っています。さらに勤怠状況も加えた、そういうリストを大学のほうに送ります。

大学のほうでは、各学科での受け入れ人数が決まっております。この学科は何人受け入れますよということをあらかじめ決めておきます。それを中高部に知らせて、生徒にも公開されています。それを見て、生徒自身が行けそうかどうかを決めますけれども、リストは成績順ですので、ほぼ上からとっていくという形になります。ですから当然、落ちる子もいる。第2希望を記入させていませんので、第1希望単願でチャレンジしたら終わり

ということです。それが五修生の場合です。

実は、この五修生を受け入れない学科もあります。現在、初等教育学科では受け入れていません。各学科の特性によって受け入れないというところも出てきています。それから高校卒業後、普通に高校を卒業して昭和女子大学に進学する場合は、高校3年生の同時期の11月ごろ、同じように大学の各学科に希望者リストを中高から提出します。これは調査書そのものです。評定平均値の基準を3.4以上にしてあります。3.4といいますと、外部からの推薦入試の基準よりも若干低いレベルです。それと、あと付帯条件がいろいろつく学科もありまして、学科によって、例えばこの科目とこの科目を高校で履修していることという条件がつきます。それは、学科の特性に応じて、例えばここでは化学と生物は必修で取っていないとだめとか、あるいは英語はこれだけ取っておいてくださいという条件を大学側がつけています。それらの条件を満たさない場合には、昭和女子大学の各学科には内部選考では入学できないということです。

でも、高校3年生、うちでは6年生と言っていますが、その学年の場合は、第1希望だけではなく、第2希望までエントリーできることになっています。もちろん、学科の受け入れ人数も決まっています。ですが、最近では、第2希望に回る生徒はいません。ほとんど第1希望で入れる子は入れる、入れない子はもともと受けないふうになってきています。つまり、条件が公開されているので、自分はもう無理だと思ったら受けないということになります。さらに、入学辞退者が出て、繰り上げ合格はしません。

それと、新しい制度の特徴は、昭和女子大学に入学する権利をこの内部選考で得ていても、他の大学を受験してよいということになっています。ですから、11月から12月の段階で内部進学の特権を得て、その権利を保留したまま他大学を受けることを認めているということです。他大学に合格した場合、昭和女子大学を辞退してもよいということになっています。

結局のところ、成績面がふるわなくて昭和女子大学に進学できない者は1割ぐらいかと思います。この内部選考以外に、一般入試で昭和女子大学を受験する者も少しいますので、最終的には1割ぐらいが行けないと考えています。

昭和女子大学への入学権利を持ったまま他の大学を受験してよいという制度にしたことが非常に大きな改革でして、かつては考えられなかったことですね。先ほど申しました人見楠郎が生きていた時代の昭和女子大学へ進学する課程としての高校、昭和女子大学に行くことが約束ですよと言って中学校に入学させ、高校入学・大学入学時点で学力試験による内部選考を課す完全一貫の制度から、生徒が自由に進路選択ができて、その保険として昭和女子大学を使っていけるという制度に変わったということです。

この改革で一番強力なリーダーシップを発揮したのが、法人が附属に対してつくった、アドバイザー・ボード (Advisory Board) という組織です。これは私が教頭をやって

いたころですが、唐突につくられまして、こちらにも全く相談がありませんでした。法人の理事、大学関係者、私も最初には入っていましたが高校関係者、外部の有識者を集めてアドバイザリー・ボードという臨時的組織をつくりました。そこで意思決定をするという形でした。

そこで附属の問題点、附属と大学の接続の問題点が議論されて、大きな改革を行ういうことを決めました。ですから当時、現場にいた私どもとしては、若干、釈然としないところはあったのですが、結局のところ、いわゆるトップダウンの形で制度改革が行われたということになります。

・変更の影響

なぜ、そういうふうな大きな変更をしたかといいますと、まず 2000 年に人見楠郎が亡くなりましたので、中高大の一貫性を、教育において維持発展させる人物が実質的にいなくなったのが、大きな原因です。つまり、私学独自のリーダーシップを発揮する人間が不在になったということです。ですから、中高のことも、大学のことも、完全に知っている人間がこのときいなくなったということになります。それで附属側はどう考えていたかといいますと、人見が亡くなってからは、人見の理念を継承するということに尽力しておりました。

ところが、徐々に情勢の変化もあって、附属側の競争率はほぼ 1 倍というところまで落ちました。ほぼ 1 倍です。ほぼ 1 倍で入試をやって、ほとんど不合格者を出せない状況でしたが、それでも不合格者を出していました。定員を割ってでも学力の足りない者は落とすという覚悟で、少しでもレベルを維持するという苦肉の策をとっていたわけですね。

そういうことで、何とか附属の現場教員はこのころは一致団結してやっていたわけですが、東京では学習塾、ここでは名前を出しませんが、学習塾の力が非常に強くて、学校経営にいろいろと口を出すというか、助言してくださるようになりました。私どもの学校は、「受け付け窓口が狭い」と指摘されました。昔風のこういう小さい窓口ではだめだから、もっとオープンにきなさいと言われました。それで私どもは受付の工事をしました。明るい感じに。そういう細かいところまでいろいろ言うてくださるわけです。

そのような中で一番強い助言は何だったかという、「あなたのところの教育理念が大事だということはわかるが、それよりも保護者や本人のニーズにこたえてあげるほうがいいのではないか。もっと自由に進路を選択させてあげてはどうか」ということでした。当時、なぜ学習塾がそんなに強く言ってきたかといいますと、私どもの学校は学習塾に通塾することを禁止しておりました。これは、学習塾が学校教育にいい影響をもたらさないという考え方から一切通塾は禁止していたのです。習い事はいいけれども、学習塾はだめ

だ。自学自習という視点から、塾に頼らないでやれということを言っていましたので、当然、学習塾のほうからの圧力も強くなるわけです。そのようなことで、圧力というか、助言というか、そういうものがあったということは非常に大きいファクターでした。ただ、偏差値もどんどん下がっていました。それからやはり規則が厳しいということを、非常によく言われました。決まりはきちんと守ることと私どもは常々言っていましたけれども、厳しすぎると。決まりは必ず守らせるということで、昔風の厳格なしつけを大事にしているところがありました。進路についても、申し上げましたように制限がかかっていたということで、時代の変化とともに、これが保護者のニーズに合わなくなっているということとは明らかでした。

従来は、人見楠郎の教育方針にほれ込んで入れるというような保護者層がたくさんいたのですが、それがだんだん失われ、やはり本人の意思を尊重したい、自由に選ばせたいというニーズのほうが大きくなりました。それで、まず中高部としては、これは苦汁の決断でしたが、通塾を解禁しました。塾に行ってもいいということにしました。それから、大学進学にしても自由化の方向へ動いておりました。それから、そのころアドバイザー・ボードが設立され、教育の理念、建学の理念をどう実現していくかというよりも、いかに入学者を維持していくかという現実的な側面に議論の中心はシフトしていったように思います。

附属側は、大学進学については、昭和女子大学に入れない生徒をなくしてくれという主張をしていたのですね。つまり、落とさないでほしいと。学園の一貫性を言うのであれば、これは慶應義塾もそうですけれども、附属に入ったら大学までとりあえず行けるというふうにしてもらえないかというようなことを言っていましたが、それは通りませんで、その代りの案として出てきたのが、先ほど申しましたように、昭和女子大学への入学権利を保有したまま他大学を受けられるという改革案でした。

この改革案のメリットは何かというと、他大学を目指すぐらいの優秀な生徒がもし落ちたら、受け入れてあげればいいじゃないかということです。これも学習塾が提案していた方法ですけども、それを受け入れた形になったということですね。

ところが、この改革が恐らく一番大きな要因だと思いますけれども、附属中高部の競争率を押し上げました。つまり、息を吹き返したということです。昔の方針を知っている者としては、なんとなく釈然としない思いがありましたけれども、うまくいってしまったんですね。保護者のニーズをぴたっと捉えたということです。今や、安心して大学受験のできる学校ということになったわけですね。

ただ、見方を変えてみますと、学業優秀な生徒には大きな権利が与えられていると思います。学業が優秀であれば、昭和女子大学にも入れるし、その権利を保有して他大学も自由に受けられる。他大進学の権利を得ることができる。ただ、学業の振るわない生徒に

としては、昭和女子大にも入れないし、他大学も保証されるわけではないというような格差が拡大した形になります。これは見方にもよると思います。でも、やはりこの進学を自由化するということはものすごく効果が大きいのですね。効果は大きい。

本学は、この配付された資料にもありますように、中高から昭和女子大学への進学率が50%を切りました³⁾。この傾向は恐らく歯どめがかからないと思います。今のところ、大学側はこれについて何もコメントをしていないので、特にそれでも構わないということであらうとは思いますが、このまま減り続けるとどうなのかなとは思っています。ただ、やはりそれでも昭和女子大学に行きたいという生徒は3割、4割はいるのだらうなとは思っていますけれども、どんどん減ってきたというのが事実であります。

では、中高の方が進学校化を目指しているかといいますと、ここは若干微妙なところがあります。一時期GAクラス、ジェネラル・アドミッションクラスというものをつくって、今度は昭和女子大学を一切受験しないで他大学一本でいくというクラスにしたようですが、実はこのクラスへの希望生徒が多くなり過ぎたそうです。つまり、昭和へは行かず、他大学一本で受験したいというクラスの希望者が多くなり過ぎて、これはまずいということで、今はやめたということであります。

ですから、附属から大学に進みたいという生徒の数が非常に減っているということですね。つまり、それは今のシステムで入学してくる層が、もともと昭和女子大学を第1希望と考えていないということになってきているのかもしれない。

このような変更はどのような影響をもたらしたかといいますと、まず保護者のニーズにはぴったり合致しました。先ほど言ったとおりです。それで、中高への入学志願者は大幅に増えました。競争率の上昇に伴って入学者層の成績が若干向上しましたので、中高部の学校生活の安定にも寄与しました。

ただ、逆に保護者から学校に対するさまざまな要求、要望が非常に強く寄せられるようになりました。と申しますか、クレームが多くなったようです。今までは、学校の教育方針に共感するから入りたいという保護者だったのですけれども、そうではなくて、やはり学校を利用するという考え方になっていますね。学校を利用していきたい。だから、学校は保護者のニーズに応えるべきだという論理に変わってきました。そういうところで、今の現場の悩みとしては、やはり保護者対応に非常に苦勞していると言っております。

(3) 中高と大学のカリキュラム、その他の連携

それでは、どういうふうこれから進んでいくのかということですが、実は進学校化は目指していないのです。それに成功した学校もありますが、進学校にするには、教

³⁾ 2008年：63.1% → 2010年：58.8% → 2012年：44.2%。

員の入れかえが必要になります。つまり、全人教育をやるということになれてきている教員は進学指導にシフトできないというのが現実ですので、やはりそういうふうに進学指導の得意な先生をどんどん集めてこないといけないということになるかもしれません。ですから、その方法はとっていません。

どうやるかといいますと、パンフレットを後ほどご覧いただければわかると思うのですが、文系、理系の分類もしていませんし、コース分けもしていません。これは中高一貫5年制のその考え方にに基づいていると思うのですが、高校3年生については自由に選択していいということにしています。自分でプログラムして自由に選択をしていく。それで自分の進みたい大学、あるいは昭和女子大学の設定する条件に合わせて科目選択をすればいいということなのです。ですから、古文、漢文もとりたいし、理科もとりたいという場合でも、それは結構ですよということになっています。進路によってコース分けするということはやっていません。

全体の大きな方向性としては、大学のほうは、現在キャリア教育の充実とグローバル化の方向を強く打ち出していますし、また、産業界のニーズに応える大学としての姿勢を打ち出しておりますので、中高のほうもその姿勢を共有していると言えるかもしれません。もともと大学のほうでは、グローバル人材育成推進事業とか、産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業とか、その他もろもろっておりますので、中高のほうはどうやっているかという、現在、スーパー・グローバルのほうのエントリーをしています。

それから、先ほど押谷先生がおっしゃいましたIB、つまり国際バカロレアの認定を目指しているようです。その前は、スーパー・イングリッシュをとっておりまして、英語を重視したグローバル化の方向性、それと経済同友会とタイアップして、産業界の人を講師に呼んで授業とか、いわゆるキャリア形成重視の方にもシフトしているように思います。もともと本学はボストンにキャンパスを持っていて、グローバル志向があったと言えるかもしれませんが、これが非常に大きく推し進められているということになります。

ただ問題は、これは裏話ですけども、保護者はグローバル化をさほど要望していないという現実もあるようです。つまり、社会のニーズはグローバル化志向であるけれども、本校、中高に入れてくる保護者は、自分の子どもをグローバル化しようとは思っていないということですね。そのニーズの乖離というのは少し起こってきているのではないかと思います。

今の東京のほうの私学の現状はといいますと、中学校入学者の数が予想よりも減っております。どんな改革をしても、ほとんどカンフル剤にしかならないというのが実情です。一時的には改革の効果は上がるけど、すぐその効果がなくなってしまうというのが現状のようです。

ですから、考え方としては、どんどん改革をし続けて変え続けていくのか、それとも、そういう方法はやめて、じっくりと自分の学校でできることを見定めていくのか。もう、そのどちらかだろうということになっています。

でも、本当のことを言うと、生き残りというようなことを東京の私学はすごく言った時期がありまして、生き残るにはどうしたらいいかといろんなことをやってきたのですが、実は改革疲れみたいな状況になっていて、結局のところは建学の理念しか頼るところはないのではないか。結局、生き残るかどうかどうかというのは基礎体力の問題だろう、つまり、学園にどのぐらいお金があるかということだろうということに来てしまっているということです。ですから、例えばいわゆるミッションスクールなどは強いねという話になるわけですね。

3 今後どうすべきか

今後、どうすべきかということですが、大学の教学側としては、附属に対して優秀な学生が欲しいと言っています。法人側は五修生をとりたい。なぜ五修生かということ、1年早く大学を選択してくれるわけですから、財務的には安定するということでしょう。

中高のほうは大学に対してどう言っているかということ、とにかく成績が悪くても昭和女子大学にはせめて入れてほしいというようなことになります。つまり、お互いの利益は永遠に一致しないということです。

一方では五修生を増やせ、大学授業への参加学生で優秀なものを増やせと言われ、他方では他大への進学実績を上げろと言われるという2つの二律背反の要求が中高に課せられていますが、これも現場の対応をなかなか難しくさせていることだろうと思います。

(1) 不易か流行か

高大連携を経営的な面から見ますと、経営的なメリットは、大学入学がこれだけ容易になった時代においては、中高側のメリットは余りないのですね。実は少ない。進路の自由化の要望を認めたほうが入学者のレベルも上がってくるというのが、現状だろうと思います。ただ、大学側が18歳人口の減少期を附属に頼らず乗り切れるかどうかという問題がありますので、大学にしたら高大連携を強化しておいたほうがよいという理屈になります。ですから、中高側からいくと、現状では地域差とか学校差もありますが、昭和女子大学レベルであると、むしろ大学進学を条件にしないほうが保護者ニーズに適応しているというのが現実であります。

今のやり方を変えるべきか否かというのは非常に難しいことですが、これからの教育はこうなりますよというものに本当に乗っかって大丈夫なのか。ちょっと難しいところだす

ね。今、グローバル化を言わない学校はほとんどないですし、キャリア教育ということと言わない学校もほとんどないです。実はこういうパンフレットを見ても、最近の傾向はどの学校を見ても余り変わらない。ほとんど同じ。業者が入っていますから、ほとんどデザインも一緒というふうになってしまうわけですね。

つまり、冒頭、公立の私学化と言いましたけれども、私学の公立化が進んでいるのではないか。どこも同じような形になる。なぜかという、ニーズを外から持ってくるからですね。つまり、社会的ニーズに適応しようとするからです。でも、それが本当に正しいのかということとはちょっとわからない。

(2) ニーズか理念か

2 番目に、ニーズか理念ということですが、私立学校のミッションはどこにあるのかということになります。何のための私立学校なのか、今のニーズに合わせるためか、それとも 50 年後のニーズなのか、ということですね。

(3) 外からの改革か、内からの改革か

それから、外からの改革か、内からの改革か。これは同じことですが、とにかく外からこういうニーズがあるからこう改革してほしいというのに応えるべきなのか、それとも自分のところの生徒、あるいは学生の姿から改革のあり方を模索していくべきなのかということですね。このあたりは考えるべき点ではないかなと思います。

最後に、押谷先生の前で言うのもまずいのですが、国や文部科学省がこういう方向性をと打ち出した後に私立学校がそれに乗っかって、もう遅いということが言えると思います。スーパー・グローバルにしても何にしても、国が言い出した段階では、実は私立学校としては乗りおけている。国が言う前に動くべきだというのが本当で、そのためには自分のところの生徒をじっくり見ていくしかないのかなとは感じております。

雑駁(ざっぱく)ですけれども、以上のような形でございます。どうもありがとうございました。

議論

(敬称略／○ A ～ D：質問者)

司会 ありがとうございました。

では、ただ今お話ししていただいた内容で確認したいことや質問、意見、本学の状況を踏まえて議論したい点など、何でも結構ですので、お願いいたします。お二人のお話を踏まえて、率直な意見交換や議論ができればと思っております。

附属と大学の接続をめぐる現状

○A さきほど、いろいろな話を聞かせていただきまして、いろいろ考えていけないといけない面があるのですが、附属高校生の他大学受験について伺います。昭和女子大学への入学を保証して、他大学を受験させるというのですが、この近隣の学校でも、他大学を受ける生徒たちが、(附設の大学と)同じようなレベルの大学でも、そっち(他大学)に行くという傾向が出てきて、それはちょっと困るということで、内部進学を保証して受験させる大学を制限している学校もあると聞いています。その辺りの現状はいかがでしょうか。

鈴木 うちの中高の場合は、全く自由です。つまり、昭和女子大学以外の大学のどこを受けるかということについては全く干渉しないということにしています。ですから、受験する大学のレベルが云々とか、昭和女子大学にある学科じゃないと受験できないとか、そういうことは一切言わないということになっています。

○B 現状の確認をちょっとさせていただきたいのですが。

附属高校を卒業した方の1割が昭和女子大学へ進学できないということをおっしゃられたと思います。また、昭和女子大学への進学者が、全体では50%を切ったというお話でございますね。実際に、五修生として昭和女子大学に行っている学生は全体のどのくらいなのでしょう。また、実際に進学していく場合に、どういう制度があるのでしょうか。校長推薦ということを述べておられましたが、それ以外に、どのような形で昭和女子大学に進学しているのか、その辺をもう少し教えていただけますか。

鈴木 五修生のほうは年々減っております。附属高校の1学年の定員は252人ですが、現在は定員いっぱいということはおらず、少し減らしております。毎年、だいたい225名くらいが高校を卒業します。年によって違うんですけども、200名強ということです。そのうち五修生として進学する者というのが、ちょっと正確な数字は持ってないんですけども、約1割程度になっています。ホームページに載せている、さきほど配られた資料の併設大学進学率44.2%というのは、高校3年生全体の進学率ですから、五修生として前年から大学で生活している生徒も含んでの数字になります。

○B 高校3年生になる生徒は、要するに約9割ということですね。

鈴木 それで、1割は行けないと言ったのは学力不振で、行きたいのに行けないという者がです。しかし、これは推測。「私は最初から外の大学に行くつもりだった」と言えばわからないので、感覚的なものです。

逆に言うと、昭和女子大学にチャレンジして落ちるということが少なくなっているんです。もともと諦めてしまうということです。つまり、条件を見ると、自分は無理

だということがもうわかってしまうので、そしたらもう他大学進学とか他の専門学校とかにシフトしてしまうということです。ですから、こちらでフィルターかけるといっても、本人のほうで選択してしまう形になっているようです。

○A 関連しますが、成績評定 3.4 以上という付帯条件を各学科がつけているということですけど、普通の、いわゆる正規分布で成績をつけた場合、3.4 というのはかなり厳しい数字かなという気がします。そうしたリクワイアメント（条件）に合う生徒は少ないのではないかという気がするのですが、いかがでしょうか。

鈴木 評定平均 3.4 は若干厳しい数字ではありますが、しかし、一応表向きは 3.4 ということにしますけれども、3 ぐらいまではある程度幅を持って、ここまではいいだろうというふうになります。もちろん、これは学科によっての见解の相違はあります。それは大学側の判断になるので、その辺のあんばいを見はからって高校もリストで出すという形になりますので。それと評定に関しては、いわゆる正規分布の時代から若干上にシフトしていますので、昔よりは甘くなっているんだろうとは思います。

押谷 大変失礼ですけど、高校から言えば、もうちょっと低くても行けるかなとかなど、いろいろ探りを入れられるということになるわけです。大学から言うとか、ちょっと高めにしていかなないとどんどん下がっていくというのが、実態ですかね。

鈴木 そこは、いわゆる駆け引きという形になっていますよね。

押谷 さきほど校長推薦と言いましたが、制度的には、推薦は全て校長推薦という形になるわけです。ところが、校長推薦でいくとなると、かなり評定は低いのに推薦で来たりするわけです。つまり、学科で定員 5 名とか出していますと、それ以内ということで出してくるのですかね。低くても出してきたりすることがあるのですけれども、そのあたりも事前に調整してもいいのかななどと思います。

鈴木 最近の傾向は、いわゆる外部生と一緒に大学を受験するという生徒も増えているんです。例えば、AO 入試をうちは行っていますが、時期的に AO 入試のほうが時期は早いので、早く進学を決めたいという生徒は AO 入試を受けてしまうんです。いわゆる内部の校長推薦の選考まで待たないという生徒も出ています。逆に、内部の校長推薦がだめでも、その後の一般入試を受けることはできますので、そこまでチャレンジする生徒もいるということです。それはもう全て本人の自由という形になっています。

押谷 初等教育学科がなぜ五修生の受け入れをやめたかというとか、教務がなかなか難しいという事情があるのです。それと同時に、教育実習の実施などについて、五修生のメリットが余らないということもあります。ですから、制度的には 4 年間で卒業して大学院へ行くなど、いろいろできるのでしょうけれども、やはり「資格」「免許」という足かせで、様々な形で履修が制約されてくるといったことで、余りメリットはな

いかなということを受け入れをやめました。

同時に、これまた失礼なのですが、最近は優秀な生徒が五修生として来るわけでもないのかなとの認識があります。早く進学を決めたい、そういうニーズで五修生として来る学生もいるのですね。つまり、高校生にとって、五修生についての意識がかつてとちょっと違ってきているのではないのでしょうか。また成績からみても、大学生活で苦勞する割にはメリットもないのかなという感じもありました。そのことも、受け入れをやめたという経緯にあったように思うのです。

鈴木 五修生に関しましては、最初のころには、1年早く大学に行くんだという自負がありましたから、非常に優秀な生徒で、大学でも勉強もよくしたんです。ところが、今の制度になってしまうと、いわゆる五修生で行く生徒のなかには挑戦をしない生徒であって、かつ高校の生活、それが厳しいからかどうかはわかりませんが、そこから早く自由になりたいというような生徒も多くなってきたように思います。先ほど押谷先生がおっしゃったようになっていく。ただ、それはもうやむを得ないということで考えております。

確かに、文部科学省のほうは非常に柔軟で、いわゆる飛び入学制度も許しているわけですから、教員免許状に対しては五修生であっても単位取得が可能なんですけれども、初等教育学科は保育士養成もやっぴりして、厚生労働省はかなり厳しくて、この年齢ではここまでというふうなことがありました。やはりそういうことから、ちょっとメリットが少なくなったということですね。

押谷 五修生で大学に来て、その5年間の5年目には、留学するとか、いろんな学生がいます。なかなかそれを十分に生かせないというところもありましょかね。

鈴木 資格関連の学科などでは、なかなかうまくいかないところが多いですね。

グローバル教育への取り組み

○A 幾つかのお話をさせていただいたので、質問がたくさんあって申しわけないですけども、最近、文部科学省では「スーパー・グローバル」の選定作業に入っていますね。それにはいろんな海外留学とかがあると思うのですが、ふだんの授業の中で、特に昭和女子大学附属のほうでは、こういう特色あるグローバル教育をやっているとかがありましたら、教えてほしいと思うのですが。

鈴木 まず、附属の『学校案内』の最初のページに書いてありますけれど、ユネスコ・スクールというのがあります。これは本校のカリキュラムがユネスコから認定を受けたということで、このために大きくカリキュラムを変更したということではありません。

次に、外国人と一緒に写っているのが、ブリティッシュ・スクール・イン・トウ

キョウ昭和 (British School in Tokyo Showa) です。いわゆるイギリスのナショナル・スクールが、本学の中にあるわけです。ワン・キャンパスなので、キャンパスの中に位置しており、中学・高校部の校舎の隣にあるので、そこと行き来ができるということで、日常的にそのイギリスの生徒とのやりとりをしたりしています。研修旅行とかではなくて、日常的に行っているブリティッシュ・スクールとの交流というのは、結構大きいのかなと思います。

それから、昔からやっている学寮研修等の中に、イングリッシュ・キャンプ、つまり外国人講師による英語漬けの一日とか、そういうのを入れていますし、現在は修学旅行も国内はやめまして、海外のいずれかの選択制でということで、アジアとヨーロッパ方面の幾つかのところから選べるという形にしています。そういうようなところは、試みとして行っています。

また、「スーパー・イングリッシュ」の指定をとりましたので (平成 17 年～)、そこで開発したことなどを実践に取り入れたアクティビティ授業などもやっております。いわゆる論理的思考力の育成、日本語と英語とタイアップしてみたいなことです。その他、英検や英作文コンテストなどにも積極的に参加しております。あとは、これは昔からなんですけれど、ネイティブ・スピーカーの先生をたくさん雇用していますので、日常的に、ネイティブ・スピーカーと接することはできるようになっています。英語に限らず近年の新採教員はほとんど大学院を出ており、英語の教員では TOEIC で満点近くとっている者もいます。

ただ、グローバルを標榜する学校であれば、同じような工夫をそれぞれにしています。留学生の受け入れ等も、以前から行っています。

押谷 それと、その結果かどうかは分かりませんが、附属中高の英語の先生が大学の英語の先生に採用されたりします。そしてお力をお持ちですね。

鈴木 はい、そうですね。そういうのはあります。

特色ある教育の教育効果

○C 全人教育をやっておられるということで、私はこの大学に来て 5 年なのですが、他の大学とかを見ても、宿泊を伴わないものでこういったことをやっているというのは幾つかあると思うんですけども、自ら施設を持って、宿泊をさせてというのは少ないと思うんです。

先ほど、五修のほうもだんだん今は減ってきているということですが、こういう特色ある教育をされていて、その効果として、学生募集には反映されているとか、あるいはキャリア形成として就活なりに効果が出ているとか、昭和女子大学としてそういう特色ある教育をしているその効果なり評価なりというのは、どのような

ものでしょうか。

押谷 さきほど鈴木先生がおっしゃいましたように、同じような行事的なもの、例えば宿泊研修などは大学も続きますから、既に経験している人たちがやっぱりリーダーシップを発揮して、大学でもしっかりと指導してくれています。それをメリットと捉えるのか、学生としてみれば、やっぱり自分たちがやってきたことが大学にとっても生かして、自分の能力を伸ばせていけるという、そういう意識になるかもしれませんけれども、何かこのごろの学生を見ていると、そういうメリットは感じてないような気がします。

○C 企業のほうから見ても、企業側のニーズも、やはりリーダーシップだとか責任感とか、そういう人間性の部分を問うているところがほとんどですね。資格とか知識だけではないと。そういった中で、その辺の評価はないのでしょうか。今は学生主体のものでしたけども、そういった大学からのものというのは。

鈴木 大学としては、そういうことをアピールはしているんですけども、それが受験生ニーズとしてはね返ってくるかという、これはちょっとわかりません。というのは、実は、自前の施設を持って、自前の理念でやっているということが、それほど認知されていないんです。というのは、どんな大学でも、外の施設を使ってやっていると。それと何が違うのかということが、受験生レベルとか保護者レベルでは、それほどわからないということが実情ではないかと思うんです。

だから、自分のところで持っているよりももっといい施設が、今はどんどんできてきているし、例えば本学はボストンにサテライトキャンパスを持っているといっても、それよりも安価で同じ効果を持つような工夫としては、例えば、神田外語グループの「ブリティッシュ・ヒルズ」だったと思いますが、福島にイギリス人ばかりのエリアをつくってしまして、そこでいわゆる合宿生活をやる。そしたら、イギリスに行ったのと同じ効果があるというような施設をつくっているところもあります。費用的には留学に比べて安くなるわけです。そういうところは、すごく人気を集めたりするのです。だから、自前で施設を運営するというのが、コスト的にたいへん重みになってきます。ですから、経営サイドからいくと、それをいかに広報していくかという問題になってくるのです。

人間力の形成というのも、例えば私学の独特の理念に基づくものが好まれているのか、それとも社会的ニーズに合ったというような、いわゆるコミュニケーション能力とかそういうようなタームで表されるようなもののほうを重視するのかということに、微妙にズレがあります。昭和女子大学などの場合は、例えば本学の独特な教育理念を好む企業は、ずっと昭和女子大学に求人を送ってくるわけです。

その幅を広げるということも、なかなか難しいです。もう昔から、「昭和の学生の

こういうところがいい」と思ってくださいっている企業は一定数ありますが、それを増やしていくには、逆に、一般的に社会的ニーズとして言われているような力をアピールしていくというふうにシフトしなければいけない。私学の個性をどう評価されるかというところで、ちょっと難しいところなのかもしれないです。

押谷 鈴木先生のお話とちょっと関係するんですけど、今までどちらかというと、「うちはうちでしっかりとその理念のもとに学生を育てますよ」という形のものではなかなか評価されにくくなってきたということで、だんだんと外部から評価されるようなことを行って、「うちはこんなことをやっていますよ」というようなPRをするようになってきているのではないのでしょうか。

その1つとして、いろいろな全国の学生たちを対象とするコンクールなどのような取り組みに、うちの学生が参加したりするという形で、知名度を高めていくなどしています。そして同時に、内部においても、外部の人たちの協力を得ながら、少しでもその力を高めていくようなことをやっていくとかしていますが、どちらかというと、昭和女子大学は外部の評価基準に合わせるというよりも、うちの理念に基づいてしっかりといい学生を育てていきますよという形で行っているように思います。

だから、新聞などでよく大学の広告がありますがけれども、他が出ているのに、昭和女子大学は出てないというようなこともあったりします。けれども、それも徐々にほかの大学並みにしていこうという形になってきているかと思います。なかなか難しいところですよ。

建学理念と学校経営

○A そうですね。先ほどの話を聞いても、いわゆる時代の変化に伴って、先ほどの不易が流行かという部分ですけども、いわゆる教育と経営の両立というか、どちらに軸足を置くかということですね。私もここ（武庫川女子大学）へ来てずっと見てみると、経営のほうに軸足を置かざるを得ないかなという感じがするんです。建学の理念等があっても、国からの補助金の縛りなどで方向性が決められていたら、少子化の中、私学が生き残っていくためには、理念と少し違う部分があっても国の方針に沿っていかざるを得ないこともできます。そのあたりで、人見先生から代わって後、先ほどのお話からすると、教育環境にしても社会の変化に迎合していつている、せざるを得ないところがどうしてもあるように思えます。

大学として体力をつけなきゃいけない、それで今、こういった議論があるんですけども、このあたりの議論はどのようにされているのか、お聞きしたいです。

鈴木 そのあたりが、実はもう解決のつかない問題です。

人見は、もうこの学校は最初、生徒が8人だったんだから、8人になってもいい

じゃないかと言ったんです。「うちの学校がいいと思ってくれる人がいる限りは、このやり方でやる」と言っていたんです。それでは、勤めている教員としては給料が出ないですから困りますけれども。でも、そのときはそれで、じゃあそれなら、そう言うんだったらやろうか、たとえ仕方がないやという形ではあっても、一種の同志的結合が教員のほうでは強いわけですね。

いろんな私学を見ていると、そういうリーダーシップをとる人というのは、だんだんいらっしやらなくなっているような気がします。やはり今はどうしても維持しなきゃいけないと考え、潰れてもいいというような判断はできないわけですね。潰してはならないというふうになると、やはり社会のニーズをすくわなきゃいけない。そのニーズに応えるということとその学校独自の理念ということが両立するのが一番いいわけです。それがうまくいっている私学もあります。そういうところは、非常に力が強いのですよね。

私が見ていると、慶應なんかはそうだと思います。ずっと理念的なところはある程度握っておいて、うまく社会のニーズとも即応していっている。何だかわからないけれど成功する私学というのも、東京のほうではあります。すごく偏差値が伸びちゃったとか、ちょっと改革したらすごく伸びたというところもありますけれども、その私学を取り巻く環境とうまく改革の方向性が合致したケースです。しかし、多くの私学は試行錯誤しているというのが実情でしょう。なかなかどっちつかずというところだろうとは思います。

やはり、生え抜きの先生が多い学校は、割と理念寄りになりますけれども、今は外部有識者を入れるというのがブームというようになっています。そうすると非常に一般論的というか、経営サイドに振ってくる。判断が民主的になってきます。

というのは、変な言い方ですけども、私学というのはある種、貴族的なところというか、ノーブル (noble) なところがあって、わかる人だけわかればいいというようなところで、ちょっとお高くとまっているところがかつてあったと思うんです。しかしそれでは当然、ニーズは少なくなるわけで、パイ全体が縮小してくる場合には、それだと経営的に苦しくなる。ざっくりばらんに言うと、そういうことなんだろうと思います。だから、やはりニーズそのものの最大公約数的なところをとらないと、受験生を引き付けるのは無理じゃないか、というような考え方になってくるのです。

あともう一つはニッチ (niche) なところをつく戦略です。東京のほうの話ですけど、要するに、すき間を埋めるような方針を持っていくと、強い場合があります。例えば、偏差値を上げたら人がたくさん来るかという、そんなことはないんです。偏差値順に学校を序列すると、すき間があるんです。そのすき間のところに入ると、たくさん受験者が来るのです。

また、偏差値が下手に上がると、競争相手が増えるというようなことも言われていて、自分の学校がどの位置でやっていくのかということが、非常に難しい判断だったりします。これは、中学、高校の場合ですけれども。だから、学力を上げれば人が来るとするのは、案外そうでもない場合があります。これも地域差があると思いますけれども。

押谷 もう一つ付け加えると、要するに出口、就職のことなのですね。大学の場合ですけれども、いろんな職種があります。以前であれば、例えば先生とかマスコミとか、私企業でもある程度決まっています。そういうところの卒業生を見ていると、私が多く接触するのは先生ですけれども、「この人は、やっぱり昭和女子大学出身だな」という、そのカラーをみんな持っておられます。例えば、昭和女子大学の創始者は詩人でしたから、みんな、附属からずっと詩を書く。いろんなときにそういう訓練をずっと受けてきて、だから先生になってもやっぱり子どもたちにそういうことをさせて、文集をつくったりしています。そして、一人一人に対して丁寧な指導をされていて、そういう伝統というのはやっぱり受け継いでいっているのだと思います。

いろんな職種があるから経済界のニーズに云々となってくると、確かにそのキャリア的な技能というか、その仕事に対する技能とかは身につけているかもしれないですけれども、何か根本にある精神的なものがちょっとおろそかになってくるのかなという気がします。

要するに、昭和女子大学であれば「世の光となろう」ということ、そして「全人教育」という形で、単にその知識とか技能だけじゃなくて、相手のことをしっかり考えながら献身的に取り組んでいくという基本的な理念があります。古いと言われれば古いかも知れませんが、これがなくなり、どこの大学を出ても同じというのは、やはり寂しいなという気がするのです。また、そういう伝統をつくってきたのに、その伝統がどこかへ行ってしまうなんてことがあっていいのか、そんなことを感じたりすることがあります。

鈴木 押谷先生がおっしゃったのをとても端的に表す事例があります。中高では卒業式のときに、同窓生代表のスピーチをいただいているんですけれども、かつて人見の時代には、どこかたいへん田舎のほうの農村に嫁がれて、荒れ地を夫と一緒に開墾して、何とか食べられるようになったというような体験談を、卒業生の代表の方が話されていたんです。その姿が「世の光」とうちで言っている姿だというような、一種の倫理というか価値観を持っていたのです。けれども、最近やはり第一線で活躍している人、名前のある人というような選択になってきて、やはりその辺がちょっと、ニーズか理念かというところの変化、本当に簡単に言えば、そういうようなところに現れているんじゃないかなと思います。

外部からの改革案提示のメリット・デメリット

司会 ありがとうございます。司会からお尋ねしてよろしいですか。

先ほど、中学・高校の改革において、アドバイザリー・ボード（Advisory Board）がどこからか形成され、外からの改革になったと言われました。その改革を、附属中学・高校の先生方がどう捉えられており、どういうふうに対応されたのかということが1つの質問です。

もう1つは、外からの改革ではなくて、内側から、つまり附属の先生が主体となって改革されるとすると、何ができるのかということです。もう少し言えば、社会変化の中でうまく展開していかなくちゃいけない、このままでは定員を割れてしまうという中で、内から、つまり中高のほうから改革をしていこうとすると、どういったことが起こった可能性があると思われますか。

鈴木 改革というのをどういうものと捉えるかによって、また違うと思うのですが、現場サイドというのは、本当は、日常的に改革は行っているわけですね。よっぽど怠惰でなければ、どうやったらいいかということを常に考えています。ただ、それは外には見えないです。いわゆる広報的価値もないです。

ですから、まず2番目の質問から先に答えますけれど、内側の人間だけで何ができるかと言われたら、外から見れば、ほとんど何もできなかったというのが答えになるかと思います。それで、恐らく受験倍率が1倍ぐらいまでになっていた状況は、徐々に回復したと思います。というのは、ほとんど改革をしない私学でも、東京の場合は波がありまして、減れば増える、増えれば減る循環があるんです。それで何とかもっている。ただ、大きく入学者を伸ばすことはできなかつたろうと思います。じゃあ潰れちゃったかというのと、潰れはしなかつただろうとは思いますが、そんなに伸びなかつたと思います。

外部の方の意見というのは、我々、要するに中高の教員が現場を見ているのとは違う視点ですから、非常に新鮮です。新鮮でかつ驚きであり、かつ驚異でもあるわけです。ただ、私も中・高を離れてだいぶ時間がたちましたので、そういう意見も、やはり聞くべきところはあるなということは思います。ただ当時は、何てことを言うんだという反発のほうで教員の間では強かつたし、実は校長がその方針を発表したとき、現場の会議ではかなり反発する意見もでました。何でそうなるんだというふうなことをすごく言い立てたこともありました。

ただ、本校の教員は、それでもその方針に逆らうということはしません。やはり、上が決めてきた方針には従うというのが私どもの持っている職業倫理ですから、もうその方針が決まったのであれば、その方向でやろうというふうには、早くになっていたと思います。ですから、校長に反発してまでというような動きにはならなかつたで

す。

なぜそうかという、それはもともと人見楠郎という人物が作り上げてきた教員組織であったから、そこまで方針が決まったんだったらそれには従いましょうということではあったと思います。ただ、感情的な軋轢というのがなかったかという、それは違うと思いますけれども。結果として、その改革が成功しましたので、みんなこれでよかったのかなと思っているというのが本当のところだと思います。

押谷 今度は大学のほうなのですが、その人見楠郎先生が亡くなられて、その後、同等のリーダーシップを発揮する人がいないわけです。そこで外部に、組織的な改革を検討してもらおうということで、大分お金を使って改革を提案してもらって、そして、改革に向かって実際に動いたんです。でも、結果的には2年くらいでまた元通りになってしまったというようなことがありました。だから、確かに外部の意見を聞くことは大切なことなんですけれども、それを素直に受け入れてそのままやってしまうと、結局、実態に合っていない形で取り組まれることになり、逆効果ということもありますね。

そのとき、内部でもいろいろやらなければいけないということで、事務の方々は、特に立命館大学に1年間出向くなどしていろいろ学ばれたようですが、後から聞いてみますと、やっぱり組織が違うからなかなか難しいということでした。でも、そういう外部にいろいろ接してみて、その意見を受け入れることは大切だと思います。けれども、そこからどうそれを取り入れるかというのは、やっぱりその学校独自のコンセプトを踏まえながら対応をしていかないと、余りうまくはいかないかなというふうなことを、実感として持ちました。

司会 では、そういう外部からのアドバイザリーなどから意見をもらい、それを強制的でも受け入れながら、内部でこなすといいますか、ならしていくという作業が、やはり必要なのでしょうかね。

鈴木 必要かと言われると、それはもう考え方の問題で、そういうことはやるべきでないという考え方もちろん成立すると思いますけれども、スピーディーな改革と考えるのであれば、やむを得ないのかなという気もします。ただ、最善の方法であったかといいますと、ちょっと難しいです。みんなの合意形成をしていったわけではないと思いますから。その辺は、その法人がどうお考えになるかということであろうと思います。

押谷 また大学側から見ていますと、そういうことで混乱があったけれども、でもみんな危機意識を持っていますから、いろんな意見がワーワー出てきて、結局は5年か6年たって、何か、何となくまとまりができてきた、そんな印象を持ちます。だから、やっぱりみんなで話し合わなきゃいけないというか、その場が必要なんではないでしょうか。

ね。附属と大学の間にしても、何かそういう場を設けて、とにかく危機意識を持ってやるということが必要のように思います。人見先生が亡くなられて、やっぱり7、8年かかったんじゃないでしょうかね。

司会 そうしたことを、大学と附属の教員間で話し合うという機会や定期的な会議はあるのでしょうか。

押谷 そういうことも必要かなということです。形式的にはあると思いますがもっと実質化する必要があります。今までワンマンでやっていたわけですが、そうした時代が終わって、大学の中では、とにかくみんな、ああでもない、こうでもない議論して混乱すると、それで外部に委嘱して、ちょっと改革してもらおうかみたいなことになったけれども、結局はうまくいかなかった。しかし内部で何かワーワーといろいろ話し合ってやっていったほうが、むしろ現実的だし、何か新しい体制が生まれてきて、結構順調に運営するようになってきたかなという気はしました。そのようなことが附属と大学の間でも行われればという願いをもっています。

鈴木 改革というのは、メリットとデメリットの場所を変えるだけなんです。今持っているメリットは減ります。その一方で、デメリットはある程度解消されるというようなものなので、デメリットの位置が変わるということです。ですから、全くメリットだけにはならないんですね。

ものすごく細かいことですが、例えば、昔の本学の中学・高校で言えば、先生方は、大雪が降れば朝6時くらいに出勤してきたんです。雪かきをしにです。誰も何も指示しないのにです。それは、そういうものだと思っていましたから。でも、最近、若い中高の教員がふっとこう言っているのを聞いたんです。「雪かきだけで出勤なんかしねえよな」と言っていました。これはやはり、それだけ考え方が変わってきたということです。

私は、これはいけないなと思っていますけれども、ただそれは、大きな改革の中ではささいなことかもしれません。やはり、メリットとデメリットの位置を変えることだというふうに認識しておいたほうがいいのかという気がします。ただ、デメリットは決して減らないです。位置が変わるだけです。

○A 今のことに関連してよろしいでしょうか。デメリットが減らないかどうかというのは、ちょっとどうなのかなという気はしているんです。

それと、そのもう一つは、理念とかそういうそれぞれの大学の中でのこともあると思うのですが、やはり社会全体の考え方の変化や流れがあると思うのです。

先ほどおっしゃった面でも、私も昔は高校で就職とかをやっていたんですけど、就職した生徒が職場に行ってみたら条件が違うというのですね。9時始まりだというのは、8時半から社長の訓話があったり掃除があったりすると。だから、それはそうい

う社風だというふうに捉えるのではなく、勤務労働違反じゃないかと捉えるのかというようになってきた場合に、これは難しい問題があるかなと思うんですね。だから、今の時代の流れとしては、やっぱりそれはやむを得ないんじゃないかなという気はします。

その中で、今どういうふうなシステムが一番それぞれの大学のニーズに合うのか、どのメリットをとるのかという意味合いで考えてみることも必要でしょう。そういう意味では、デメリットは減らないといえ減らないのかもしれませんが、ここを少し減らしながら、今はどこを重点にすべきなのかということを考えていくということが大事なのかなと、先生の話をお聞きして、感想をもちました。

大学入学後の附属出身生と一般入試生

○A もう一つお聞きしておきたいのは、大学のほうなんです。幾つかの入試の制度をとっておられると思うのです。私どものほうではAO入試はなくて、指定校推薦と、それから推薦入試は2回ありまして、一般入試がA、B、それからセンター入試があって、次の日曜日にはC入試といったように、何回も行っているわけです。昭和女子大学も同様かと思います。

昭和女子大学でも、附属から入学して来る学生がおられるわけですが、一般入試で入ってくる学生と附属からの学生の間で、やはり一定の学力差とか、意欲差、そういういったものがあるのでしょうか。あるとすれば、大学のほうではその辺の問題点を解消するための方策として、何かお考えになっておられるのかということを伺いたい。特に附属との連携を含めてなんですけれども、いかがでしょうか。

鈴木 学力をどう捉えるかという問題になってくると思うんですけれども、本学の場合は、例えば、入試成績、入試形態による学力差、これは眩かれてはおります。やはりAOはどうもいま一つであるとか、ちゃんと受験勉強してくるべきじゃないとか、そういうことは眩かれてはいますが、大きな議論の俎上には載っていないです。

やはり、1つには、入学させた者はもう大学の責任だということになりますので、その学力差を云々すること自体がそんなにフェアなことじゃないので、大学で育てるのが義務であるというような捉え方です。

それから、附属生の学力ということ考えた場合に、附属の生徒の学力が低いというようなことは、あからさまには言われたいですね。

押谷 ないですね。特に感じたこともありません。

鈴木 意欲とか授業態度、こういうものについて、附属の生徒が悪いということは、恐らくないです。中高の授業では、私語等の態度に関しては、一貫して厳しく指導しています。大学での授業態度については、他から来た学生よりもよいのではないでしょう

か。大学教員から不満が出るようなことはないように思います。附属同士で固まることもなく、むしろ、積極的に交友範囲を広げようと、他校からきた学生に話しかけているようです。

押谷 ないですね。むしろ、いいにもかかわらず中くらいの成績が多く、もっと頑張ってもらいたいと思います、僕らの感覚では。

鈴木 それは、全人教育というのを標榜しているからでもありますけれども、いわゆる学業成績というのを、重要視しないという言い方は悪いのですが、世間的な意味ではあまり重視していないんです。というのは、個々の持っている能力が違うという前提になっていまして、そこからどう伸ばすかが大事だという考え方をとっていますので、例えば、点数で言えば、80点の子が90点になったのよりは、60点の子が80点になったほうを褒めているんです。つまり、進歩というのは自分との闘いでしかないというような価値づけをしていまして、その伸びた子に学習進歩賞をあげています。だから、実はうちの中高自体に世間一般でいうような優等生という考え方があんまりないんです。

○A その賞というのは、中高で賞をあげておられるのですか。

鈴木 中高で出しています。だから、附属の教育の中では、「自分のいる位置からさらに伸ばしたということがいいんだ」という考えが、みんなに染みついています。「成績自体いいのがいいわけじゃない」というのが、従来からの本校の価値観で、それがずっと続いていると思います。ただ、他大学受験をどんどんやっていけば、そうではなくなってくるのではないのでしょうか。

そういった意味で、ちょっと過渡期にはあるかもしれませんが、もともとそういうことなので、とにかく真面目にしっかりやっていくということが大事だということは、みんな思っていると思います。大学のほうでも、恐らく附属の卒業生もいっぱい行っていますから、いわゆる学業成績がいいということのことをことさら重要視していないかもしれません。その辺はちょっと、普通のところとは違うのかもしれないですけど。

押谷 今、AO入試を、武庫川さんはされていない。だから、私どもの大学とはそれだけの違いですね。今は3月入試もありますので、全部同じだと思うんです。じゃあAO入試でどうなのかというと、要するにAOでたくさん採ってしまっただけで、あと試験がA日程、B日程と3月入試がありますけれども、その倍率がどんどん高くなりますよね。だから、対外的にはえらく倍率の高い大学だなというイメージを持たせる意味もあるかわかりませんが、初等教育学科では、AO入試はものすごく志願者が多いんです。6倍くらいになるんですかね。

ただ、AOでどういう人を選ぶかはなかなか難しいです。確かに、特色を求めます

が、みんな特色をアピールしているかというのと、そうじゃないんです。ただその中で合格者を決めはするんですけども。しかし、その AO で入ってきて、意欲的にいろいろやってくれます。さっきも鈴木先生のお話にあったように、学力面でいろいろと分析はありまして、傾向としては一般入試のほうが学力面で頑張っているかなといったことはありますが、実際、就職とかを考えれば、AO で入学した学生も、それなりに頑張っているような気がいたします。

それと、さっき言いましたように、入学前オリエンテーションを、ついこの前（2 カ月くらい前）行いましたが、一応課題を与えておりまして、それについてはみんなそれぞれ熱心にやってくるんです。それ以外に、入学した 1 年生に対して、基礎講座みたいなものを学科ではやっているんです。鈴木先生もそれをされています。

ただ、例えば、社会科がちょっと苦手な子が先生の講座を受けてくれるかというと、なかなかそういうわけでもない。基礎講座というのは、やはり余り人気がないんでしょうか。もう大学生になっているのに、別に基礎講座なんかというような意識があるんでしょうか。だから、特に教職に就く人とかであれば、まさに全人的にというか、学力的にも平均的な力をもってほしいと思ったりしますけれども、その指導というのはなかなか、ちょっと強制的にやらないと難しいのかもしれないですね。

司会 武庫川の場合、入学したら最初に基礎学力テストを行いまして、その成績が悪い学生はもう強制的に、数学とか英語とか、そういう基礎学力の補充の講義を受けなさいという感じなんです。

押谷 うちもそのテストはあるんですよ。テストはあるんだけど、その結果も本人に行きますけれども、そこから自分で判断しなさいという形で、結局、強制はしないという感じになります。難しいですよ、そのあたり。

附属高校から大学への受け入れ方針

司会 ちょっとそこのお聞きしたいのですけれども、それまで、附属高校から大学に進むときに、一応学力試験はされていたようですね。

鈴木 はい、そうです。

司会 中高大の一貫教育なんだけれども、そこでは附属高校から大学に上がるときには学力試験をして、えり分けをしておった。そこらの経緯といいますか、どういう形でやられておられたのですか。

鈴木 中高大一貫とはいっても、みんなを入れるわけじゃないというのがもともとの考え方で、サボる者はだめだというのが強くありました。うちの学校の教育を受けて学力が伸びないというのはサボっているんだと、ものすごく単純化して考えているんです。学力が伸びないのは、能力がないか、サボりだと。しかし、能力のない者は、中

学校入試を課しているわけだから、入学させていない。だから、中に入ってできないというのは、サボっているだけだと。サボっている者は許さない。そういう昔風のものすごく単純な理屈です。だから学力試験をやっても大多数は入れるけれども、ここだけはもうだめだろうというのは不合格にします。

マクロで見ますと、不合格にしている、そういう者を出すことによる学校側のメリットというのは確かにあります。緊張感を保つということです。落ちた子はかわいそうだと思うられるかもしれないけれども、かわいそうではない。なぜならば、その生徒がサボったからだという、そういう論理構成にもう昔からなっているので、全員を入れるという考え方はとっていないです。ただ、私立学校によっては、やはり全員入れるという考え方のところと、両方あると思います。

押谷 保護者の方では、入れてもらえることを前提として入学させたにもかかわらず、何で入れないのだというようなことで、裁判にまでは行かないけれど、その一步手前まで来るということはあったりします。早稲田実業に初等部ができて、あそこでもう6年たって、中高に行くというとき、結構いろいろもめたようです。

やはり、受験を前提として指導をしていませんから、さっき先生がおっしゃいましたような受験校にしようと思ったら、その受験指導にたけた先生がいないと、なかなか実績は上がらない。だから試験をしたときに、やはり一般から来る受験生と非常に格差というか、差がある。それで公正にやったら半分も入らないくらいになるのかもしれないんだけど、そういうわけにはいかない。でも全員入学というわけにはいかないということで、やっぱり落とすということになる。どこの附属を持つ大学でも悩んでいるというようなことはお聞きしています。

鈴木 今の保護者だと、多分、入れないと怒ります。それはなぜかという、私立学校に入れるというのは投資だからです。お金を払ったのに、なぜ入れないということ。それはものすごく言われますので、入学時に、成績が悪ければ落とすということ、それを前提として入ってくれということは、絶対に言っておかなきゃいけない。

何といいますか、受験者が減ってくると、ウェルカムな体制にすぐなるんです。「どうぞ、うちはいいい学校ですから入ってください」と。そうすると、そういう条件をきちんと言わなくなってくる。しかしそれは逆に、入学してからのトラブルのもとになります。「この条件をのめないなら入れませんよ」と言っていたときのほうが、トラブルは少ないです。その辺は、非常にバランスが難しいところになります。

○B 先ほどの進学のことなんですけれども、昭和女子大学のほうに入学を保証するという話で、最終的には50%くらいが入学するということなんですけれども、実際、附属高校から大学への推薦希望というか、大体それは何パーセントぐらいですか。そのうち、どれぐらいの生徒たちが合格者でしょうか。もう最初から他大学を受けるのは、

どういうふうに出ていくのか、そこら辺のところを、だいたい結構ですので教えてくださいいただけたらと思います。

鈴木 実は、そのシステムになってから、今はどうなっているかといいますと、もう自然にフィルターがかかってしまっていて、昭和女子大学を高校3年生でエントリーした生徒は、ほとんど合格しているというのが実情のようです。つまり、条件は明示されていますので、自分の評定平均はわかっているし、推薦条件もわかっているので、成績が足りない者は、もう最初から受けないようです。

ですから、生徒の側で「私は昭和女子大学には行けない」という表現は使わないです。「行かない」ということで、「私は他を目指すんだ」というふうになって、自然にフィルターがかかっていっているということです。その条件をクリアしてないのに、「私はどうしても昭和女子大に行くんだ」というような強い意思表示というのは、だんだんなくなっているということです。

この制度が始まったころは、そういうのは（どうしても昭和女子大学に行くんだという生徒）ありましたけれども、今では自分のほうで進路選択をしてしまう。逆に、他大学へ行くことが非常に困難な時代ではないので、どこかに合格すると言ったら失礼ですけども、そこそこ、昭和女子大学よりもレベルの高いところに受かったりしますから、そういう意味では逆に、そこで問題は余り発生しなくなっているんです。自分の側でフィルターをかけてしまっています。

○B ということは、先ほど約1割ぐらいが学力的に昭和女子大学に推薦されないということですから、大体9割ぐらいが大学のほうへ推薦を希望して、そのうち4割ぐらいが他の大学へ行って、5割が昭和女子大学へ行くというふうな感じでしょうか。

鈴木 昭和女子大学を高校3年生で希望するのが約半分です。もともと他大学へ行くんだと決めている生徒というのもあります。要するに、昭和女子大学を保険にして他を受けるといふ生徒と、もう昭和女子大学は完全に受けないで、他へ行くという生徒がいます。

実は、昭和女子大学を保険にする場合には条件がありまして、他大学を不合格になった場合には昭和女子大学に入る、これが条件になっています。それすら嫌な生徒、「私はもう他大一本で行くんだ」という生徒が結構いるんです。それが約4割ぐらい。まとめますと、在籍者のうち、五修生として進学する者が約1割、高校3年生で内部選考で昭和女子大学への進学の権利を得る者が約5割、その5割のうち、3割が昭和女子大学へ進学し、2割は最終的に他大学等に合格してそちらに進学しています。ですから、最終的な進学先として、昭和女子大学以外の進路となるのは、最初から外部進学希望の4割とあわせて、約6割となります。ですから、昭和女子大学にエントリーする生徒自体が減っているということになります。

○B それともう一つ、五修生のほうですが、先ほど、できるだけ進路選択を高校生でできるようにということですが、例えば2年生の段階で五修生になると決め、実際に昭和女子大学へ行った。行ったけれども、やっぱり自分は他大学へ行くという生徒はおりますか。

鈴木 認めないです。五修生を選択した段階で、昭和女子大学への入学が条件です。

押谷 高校のパンフレットには進学状況があり、どの4年制大学に何人、昭和女子大学に何人とです。武庫川さんもオープンにされた場合、気がかりなのは、どこの大学に何人行ったかというのが公表されることだと思うんです。今の昭和女子大学の附属で言いますと、いわゆる昭和女子大学に行けない1割の子も、どこかへ行っているわけですね。

それで、昭和女子大学以外の大学で、ちょっとレベルの高い大学へ行ったりする。逆に低い大学にも行きます。それが包括的に全部ここに出てくるんだと思うんです。これによって、昭和女子大学の附属が大体どのレベルなのかというようなことを、受験生とか保護者は評価するんでしょうね。そしてこれが生徒募集に影響するのではないのでしょうか。

鈴木 このパンフレットにある進学先の表は、受験生や保護者の評価に非常に影響します。出口ですから、これを見てくるだろうと思います。例えば東京の場合は、早稲田、慶應にどのくらい入っているか。その次の、MARCH（明治、青山、立数、中央、法政）とか、日東駒専とかいろんなことを言いますが、そのあたりにどのくらい入っているか。あるいは、国公立にどのくらい入れるのかというようなことは、このデータから全部読み取って受験生は判断してくると思います。

序列化が進んでいる今の私学の現状では、この表のつくり方自体も非常に問題になっていて、私は、最初オープンにしたときには、「あいうえお」順に並べていたんです。そしたら、「それはいけない」と学習塾からの助言があり、やはり東京大学を1番にせよと、そういうわけですよ。それで、有名どころと言うと失礼な言い方ですが、そういう順に並べるべきだということを助言されています。

ただ、その考え方にはちょっと抵抗している感じはありますけれども、この表のつくり方自体も問題にはなるわけです。ここは昭和女子大学に合格した人間が、2012年は160、2013年は129と書いてありますが、この中には昭和女子大学単願であった者も他大学志望だが保険として内部選考を受けた者も含まれています。その区別はしていません。最終的な進学人数は2013年度の場合、84名です。この合格状況の表は、合格者の延べ人数で示しています。

司会 先ほど先生がおっしゃられたように、その制度を大きく変えたのは、どれぐらい前になりますか。10年ぐらいになりますか。

鈴木 制度を変えてから10年ぐらいです。その間、徐々に昭和女子大学への進学者は減ってきました。

附属・大学の接続改革の成果はさまざま

司会 東京のほうで、附属と大学の関係でこれはいい改革というか、いいほうへ伸びたというふうな事例を先生がもし御存じならば、ちょっとお聞かせいただきたいのですが。つまり、高校を進学校化という形にして独立させていくのか、あるいは大学と附属の連携をもっと強くするのか、どちらもあるとは思いますが。

鈴木 余り事例を持っていないんです。というのは、あんまり大成功の事例というのはないんです。要するに、一時的に増やしたということは改革効果であるんですけども、それは永続的にすごくよかったかという、なかなかそういう話を聞かないので。やはり時代によって変わるんです。大学を持っているところのほうに人気がある時代と、持っているほうが足かせになっている時代とがありますけれども、正直言って今は多分持っているほうが足かせになっている時代だと思います、。

附属中高と大学との関係をどうするかということで、多分うちのやっているやり方はかなりラジカルな方法というか、正直言って要は昭和女子大学自体を下に見ていいということです。そこまで認めたというのは、かなり極端なやり方なのかなという気はしますが、一定レベルの効果は、うちの場合なんかは上がっているだろうと思います。他校さんはもうそれぞれの考え方で、その接続というのを考えているので、そこが要するに、入学志願者の数を増やしたかどうかというのは、ちょっとわかりません。いろんな改革を同時にやっていますので。

司会 他に質問はよろしいでしょうか。

それでは、押谷先生、鈴木先生、ありがとうございました。

これといった絶対的解決策はないので、モグラたたきではないですけども、1つ動けば別の1つが引っ込むという形で、なかなか難しい問題ですね。それには様々な要因が絡んでおり、その大学の理念や規模もあれば、大学のランク、地域の状況などもありましょう。いろんな要因が絡んでいるとは思いますが、でもやはり危機意識を持って、どうやって附属と大学と一緒に取り組んでいくのかということが一番基本にあるのではないかと思います。

今日は遠い中、また足元の悪い中お越しいただきました。押谷先生と鈴木先生に拍手でもって終わりたいと思います。ありがとうございました。

注

※1 議論における小見出しおよび下線は、編集者がつけた。

- ※ 2 読んで分かりにくいと思われる部分には、()をつけ、言葉を補足した。
- ※ 3 ここに掲載した文章は、押谷、鈴木両先生に内容を確認していただいた上で掲載した。

アメリカにおける女子大学のプロフィールと現状

Profiles and the Current Situation of Women's Colleges & Universities in the Unites States

安 東 由 則

ANDO, Yoshinori *

目次
序
はじめに
1. アメリカにおける女子大学のプロフィール
(1) いくつかの属性
(2) 学生規模、学位、プログラム
(3) 学費、寮費、寄付基金
2. 他大学との比較からみた女子大学の特徴
(1) カーネギー分類 1：基礎分類
(2) カーネギー分類 2：授業プログラム
(3) カーネギー分類 3：大学規模と寮生活
(4) 大学入学難易度
(5) 女性教員比率
(6) 学長の女性比率
3. 日本との比較
4. まとめ
おわりに
注
引用文献

* 武庫川女子大学教育研究所・研究員、文学部教育学科・教授

序

筆者は2010年4月から1年間、アメリカ合衆国のThe George Washington University, Graduate School of Education and Human Developmentが提供するAdvanced Studies Program for Visiting Scholarに参加し、William K. Cummings教授のもとで行った調査研究を行う機会を得た。そのプログラムの中で、日本の女子大学との比較を念頭に置きながら、アメリカの女子大学に関する数量的データの検索・入力、女子大学の教員、スタッフと学生への聞き取り調査を行った。その調査結果を基礎に、以降の新たなデータを加えて、現在のアメリカの女子大学の現状とその特徴、経営戦略などを分析、検討し、その成果を『研究レポート』にて発表していく。本稿はその第一弾である。

はじめに

アメリカでは、近年においても女子大学の数は減少を続けている。坂本は、1998年時点における4年制女子大学を私立のみの64校と数え、具体的な校名を示している(1999, 68-9頁)¹⁾。筆者が2009年5月時点で調べたところ、その数は47校であったので、11年間で17校が合併や共学化などによって女子大学ではなくなった。さらに2014年1月時点の調べでは、女子大学は44校で、この5年間で4校が共学化している。アメリカの2012-13年度における4年制大学数は、公立・私立合計で3,026校(私立2,337校)であり、この10年では毎年40～50校が増えている(NCES Digest of Education Statistics 2013, table.317)。学校比率でも、学生比率でも、女子大学の比率は下がり続けていることになる。

本稿では、アメリカにおける女子大学の現状を、量的データから一覧表を作成して大学ごとに示すとともに、いくつかの項目については大学全体と女子大学との比較を通して、女子大学の特徴を把握していく。データは、大学紹介雑誌であるBarron's Profiles of American Colleges、カーネギー(Carnegie Foundation)の大学分類、およびNCES(National Center for Education Statistics)の提供する統計データを主として使用した。今後、さらなる量的なデータ分析や歴史的観点からの分析、インタビューなどを通しての質的分析を行っていく予定であり、そのための基礎作業と位置付けている。

1. アメリカにおける女子大学のプロフィール

(1) いくつかの属性：地域・設立年・創設者

まず表1は、2013-4年時点での、女子大学のプロフィールを掲載した。地域ごと、州ごとに分類し、創立年、創設者、学長、所在地と所在地規模などが示されている。

表 1. 2013-2014 年におけるアメリカの女子大学とその基礎プロフィール

No.	大学名	地域	州	創設年	創設者	学長 (2014 Feb. 現在)
1	Saint Mary-of-the-Woods College	MW	IN	1840	Catholic	Dottie L. King
2	Saint Mary's College	MW	IN	1844	Catholic	Carol Ann Mooney
3	College of Saint Benedict	MW	MN	1913	Catholic	MaryAnn Baenninger
4	St. Catherine University	MW	MN	1905	Catholic	Andrea Jane Lee
5	Stephens College	MW	MO	1833	Richard Gentry & leading 14 citizens	Dianne M.Lynch
6	College of Saint Mary	MW	NE	1923	Catholic	Maryanne Stevens
7	Ursuline College	MW	OH	1871	Catholic	Diana Stano, O.S.U
8	Alverno College	MW	WI	1887	Catholic	Mary J. Meehan
9	Mount Mary College	MW	WI	1913	Catholic	Eileen Schwalbach
10	University of Saint Joseph	NE	CT	1932	Catholic	Pamela Trotman Reid
11	Bay Path College	NE	MA	1897	?	Carol A. Leary.
12	Mount Holyoke College	NE	MA	1837	Mary Lyon	Lynn Pasquerella
13	Pine Manor College	NE	MA	1911	Helen Temple Cooke	Joseph Lee
14	Simmons College	NE	MA	1899	John Simmon	Helen G.Drinan
15	Smith College	NE	MA	1871	Sophia Smith	Kathleen McCartney
16	Wellesley College	NE	MA	1870	Henry & Pauline Durant	H. Kim Bottomly
17	College of Saint Elizabeth	NE	NJ	1899	Catholic	Helen J. Streubert
18	Barnard College	NE	NY	1889	Annie Nathan Meyer & others	Debora L. Spar
19	The College of New Rochelle for Women	NE	NY	1904	Catholic	Judith Huntington
20	Russell Sage College	NE	NY	1916	Margaret Olivia Slocum Sage	Susan Scrimshaw
21	Bryn Mawr College	NE	PA	1885	Joseph W. Taylor (Quakers)	Kim Cassidy
22	Carlow University	NE	PA	1929	Catholic	Suzanne Mellon
23	Cedar Crest College	NE	PA	1867	United Church of Christ	Carmen Twillie Ambar
24	Chatham University	NE	PA	1869	William T. Beatty (Pastor of Presbyterian)	Esther L. Barazzone
25	Moore College of Art and Design	NE	PA	1848	Sarah Worthington Peter	Cecelia Fitzgibbon
26	Judson College	S	AL	1838	Baptist	David E. Potts
27	Trinity Washington University	S	DC	1897	Catholic	Patricia A.MacGuire
28	Agnes Scott College	S	GA	1889	Frank H. Gaines (Presbyterian)	Elizabeth Kiss
29	Brenau University	S	GA	1878	Baptist	Ed L. Schrader
30	Spelman College	S	GA	1881	Baptist	Beverly Daniel Tatum
31	Wesleyan College	S	GA	1836	Methodist Episcopal	Ruth Austin Knox
32	Midway College	S	KY	1847	Disciples of Christ	John P. Marsden
33	Notre Dame of Maryland University	S	MD	1895	Catholic	Joan Develin Coley
34	Bennett College (for Women)	S	NC	1873	Methodist Episcopal	Rosalind Fuse-Hall
35	Meredith College	S	NC	1899	Baptist	Jo Allen
36	Salem College	S	NC	1772	Moravian	Susan E.Pauly
37	Columbia College	S	SC	1854	Methodist	Elizabeth A. Dinndorf
38	Converse College	S	SC	1889	Dexter Edgar Converse	Elizabeth A. Fleming
39	Hollins University	S	VA	1842	Joshua Bradley/Charles Lewis Cocke	Nancy Oliver Gray
40	Mary Baldwin College	S	VA	1842	Rufus W. Bailey	Pamela Fox
41	Sweet Briar College	S	VA	1901	Indiana Fletcher Williams	Jo Ellen Parker
42	Mills College	W	CA	1852	Nine citizens & Mary Atkins	Alecia A. DeCoudreaux
43	Mount St. Mary's College	W	CA	1925	Catholic	Ann McElaney-Johnson
44	Scripps College/Claremont College	W	CA	1926	Ellen Browning Scripps	Lori Bettison-Varga

※ 大学名の網掛け： Five Sisters (旧 "Seven Sisters")

地域：
MW：中西部、NE：北西部
S：南部、W：西部

創設者：
宗教関連も多いが、現在
もその影響が強い大学と
そうでない大学がある

学長：
：男性学長

出典：大学 HP (右端に記載)

Barron's Educational Series (2012), Barron's Profiles of American Colleges 2013.

所在地のカテゴリについては、Peterson's Publishing (2011). Four-Year Colleges 2012, Peterson's Publishing.colleges/) 及び U.S.News HP (<http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges>) を参照

環境 (setting)	住所	HP のアドレス
Rural	Saint Mary-of-the-Woods, IN 47876	http://www.smwc.edu/
Suburban	Notre Dame, IN 46556	https://www.saintmarys.edu/
Small-town	37 South College Avenue, St. Joseph, MN 56374	http://www.csbsju.edu/
Urban	2004 Randolph Avenue, St. Paul, MN 55105	http://www.stkate.edu/
Urban	1200 E. Broadway, Columbia, MO 65215	http://www.stephens.edu/
Urban	1901 South 72nd Street, Omaha, NE 68124	http://www.csm.edu/
Suburban	2550 Lander Road Pepper Pike, OH 44124	https://www.ursuline.edu/
Urban	3400 S. 43rd Street, Milwaukee, WI 53219	http://www.alverno.edu/
Urban	2900 North Menomonee River Parkway, Milwaukee, WI 53222-4597	http://www.mtmary.edu/
Suburban	1678 Asylum Avenue, West Hartford, CT 06117	http://www.usj.edu/
Suburban	588 Longmeadow Street, Longmeadow, MA 01106	http://www.baypath.edu/
Small-town	50 College Street, South Hadley, MA 01075	https://www.mtholyoke.edu/
Urban	400 Heath Street, Chestnut Hill, MA 02467	http://www.pmc.edu/
Urban	300 The Fenway, Boston, MA 02115-5898	http://www.simmons.edu/
Small-town	College Hall, Northampton, MA 01063	http://www.smith.edu/
Suburban	106 Central Street, Wellesley, MA 02481	http://www.wellesley.edu/
Suburban	2 Convent Road, Morristown, NJ 07960	https://www.cse.edu/
Urban	3009 Broadway, New York, NY 10027-6598	http://barnard.edu/
Suburban	29 Castle Place, New Rochelle, NY 10805	http://www.cnr.edu/
Urban	45 Ferry Street, Troy, NY 12180	http://www.sage.edu/rsc/
Suburban	101 North Merion Avenue, Bryn Mawr, PA 19010-2899	http://www.brynmawr.edu/
Urban	3333 Fifth Avenue, Pittsburgh, PA 15213	http://www.carlow.edu/
Suburban	100 College Drive, Allentown, PA 18104-6196	http://www.cedarcrest.edu/
Urban	Woodland Road, Pittsburgh, PA 15232	http://www.chatham.edu/
Urban	20th Street and The Parkway, Philadelphia, PA 19103-1179	http://moore.edu/
Rural	Marion, AL 36756	http://www.judson.edu/
Urban	125 Michigan Avenue, N.E., Washington, DC 20017-1094	http://www.trinitydc.edu/
Small-town	141 East College Avenue, Decatur, GA 30030	http://www.agnesscott.edu/
Urban	One Centennial Circle, Gainesville, GA 30501	http://www.brenau.edu/
Urban	350 Spelman Lane, Atlanta, GA 30314	http://www.spelman.edu/
Suburban	4760 Forsyth Road, Macon, GA 31210-4462	http://www.wesleyancollege.edu/
Small-town	512 East Stephens Street, Midway, KY	http://www.midway.edu/
Suburban	4701 North Charles Street, Baltimore, MD 21210	http://www.ndm.edu/
Urban	900 East Washington Street, Greensboro, NC 27401-3239	http://www.bennett.edu/
Urban	3800 Hillsborough Street, Raleigh, NC 27607-5298	http://www.meredith.edu/
Urban	601 South Church Street, Winston-Salem, NC 27101-5376	http://www.salem.edu/
Suburban	1301 Columbia College Drive, Columbia, SC 29203	https://www.columbiasc.edu/
Urban	580 East Main Street, Spartanburg, SC 29302-0006	http://www.converse.edu/
Suburban	P.O. Box 9707, Roanoke, VA 24020-1707	http://www.hollins.edu/
Small-town	Staunton, VA 24401	http://www.mbc.edu/
Rural	P.O. Box B, Sweet Briar, VA 24595	http://sbc.edu/
Urban	5000 MacArthur Boulevard, Oakland, CA 94613	http://www.mills.edu/
Urban	12001 Chalon Road, Los Angeles, CA 90049	http://www.msmc.la.edu/index.asp
Suburban	1030 Columbia Avenue, Claremont, CA 91711-3948	http://www.scrippscollege.edu/

環境：

Urban：都市

Suburban：都市近郊

Small-town：小都市

Rural：田舎（非都市部）

HP アドレス：

大学の HP アドレスは論文末の文献に掲載せず。これを参照のこと。

1) 地域

Irene Harwarth ら (1997) の分析にならい、中西部、北東部、南部、西部の 4 つに分け、地区・州ごとに大学名を掲載した²⁾。全 44 女子大学のうち、中西部—9 校、北東部—16 校、南部—16 校、西部—3 校となっている。大学の歴史が古く、私立大学が多い北東部と、男女別学の伝統と宗教の影響が強かった南部に多く、この二つの地域で全体の 72.8% を占める。これに対して、歴史が浅く、共学の州立を中心として大学が発達した西部では 2 校しかない。中西部の女子大学では、カソリックの女子大学が目立つ。

2) 設立年

古い順に、Salem (NC…州名、以下同様) —1772 年、Stephens (MO) —1833 年、Wesleyan (GA) —1836 年、Mount Holyoke (MA) —1837 年となる。19 世紀半ばまでに創設された学校は 11 校あるが、大学として創設されたものは少なく、Female Seminary (それ以前には Academy) などという形で、女性用の中等教育機関、教員養成学校、「共和国の母」となる準備教育などとして設けられた³⁾。その他は 19 世紀半ば以降の設立であり、北東部の Wellesley (MA) —1870 年や Smith (MA) —1871 年など、19 世紀後半に創設されたのは 20 校と最も多くなっている。ちなみに、大学としての許可状 (Charter) を最初に受けた女子大学は Wesleyan で、創設時の 1836 年であるが⁴⁾、一般に女子の学校が大学として認可されるようになるのは、19 世紀半ば以降であり、Smith などは設立時から大学であった。20 世紀以降の設立は 13 校であるが、最も歴史の浅い Saint Joseph (CT) でも 1932 年であり、WWII 後に創設された大学は、現在の女子大学の中には存在せず、どの学校も 80 年以上の歴史をもっている。

3) 創設者

個人名が分かるものは書き入れ、教会関係の場合はその宗派を記述している。とはいえ、複数が共同して設立したもの、窮地に立たされたところを大きな寄付者に援助してもらい方向転換をしたもの、個人名が表に出ているが教会の影響が強いものなどさまざまある。また、教会が設立したからといって、今でもその教会が運営しているとは限らないことに注意する必要がある⁵⁾。ただここで特徴的なことは、中西部においては Stephens (MO) を除いてカソリック教会により創設されたものである。バイブル・ベルト (Bible Belt) などとも呼ばれ、プロテスタント系の強い南部では、ワシントン DC やメリーランドといった北部地域でカソリックが見られるものの、バプティスト、メソジストなどプロテスタント系の大学が多くある。北東部では、“Five Sisters”⁶⁾ をはじめ宗教色の強弱はあるものの個人による創設が多い。今日、カソリックで宗教色を強く打ち出す大学はあるものの、相対的には抑えられている。

4) 学長

これは属性とは言えないが、大学の特性を表わす指標として挙げた。ここには、2014年1月時点での学長名を記している。注目したいのは、学長の性別である。表1には、男性学長を網掛けで示している。44大学中4校の学長が男性、残り40校の学長は女性であった。男性学長の4校とは、北東部ではPine Manor (MA)のみ、南部ではJudson (AL)、Brenau (GA)、Midway (KY)の3校で、いずれも女子大学の多い地域にあるが、南部に3校が集中している。いずれの入学難易度は高くはない(表2、3参照)。大学における女性学長比率については後に別項にて詳しく検討する。

(2) 大学規模と学位、プログラム

表2には学生規模、フルタイムとパートタイムの別、大学院の有無と規模、社会人用プログラムの有無、参考として入学難易度などの項目が掲載されている。

1) 学部学生規模

アメリカの大学では、パートタイムはもちろん、フルタイムの学部学生においても男性が含まれる場合がある。表から、半数近い21校にフルタイムの男子学生が在籍していることが分かる(Mount Mary 含)。学生規模は異なるが、人数が多いのは85名のMidway (KY)で、男子比率は9.7%と最も高い。次に男子が多い大学は70名のCarlow (PA)であるが、その比率は6.3%となる。男子学生がいる大学でも、その比率はほとんど5%未満である。GI Billが施行された際に受け入れた大学もあり、私立大学においては、基本的に自大学を女子大学、女性のための大学と自己規定するかどうかによるところが大きい。

男子学生を含めたフルタイム学生数を見ると、最大が2,571名のSmith (MA)で、2,000名以上の大学は7校。最小は276名のJudson (AL)、さらに380名のWesleyan (GA)、455名のPine Manor (MA)とMoore College of Art and Design (PA)が続き、500名以下はこの4校。平均1,110名で、1,000名以下は27校(Mount Mary 除)と過半数となる。

“Five Sisters”を含めて全ての女子大学でパート学生をもつ。パート学生の平均は約271名で、フルタイムとパートとの合計平均では1,383名となる。大学によってはパート学生の方が多い大学もあり、Saint Mary-of-Woods (IN)、Notre Dame of Maryland (MD)の2校はパートタイム比率が50%以上、パートタイム学生が学部学生の3分の1(33%以上)を超える大学は、先の2校を含めて9校となる。これらの大学はいずれも入学難易度が低く、学生集めにおいて厳しい状況にある。これに対して、“Five Sisters”やScripps (CA)、Agnes Scott (GA)、Saint Mary's (IN)といった威信と入学難易度の高い大学においては、パート学生の割合は非常に少ない。

2010 年における全米の 4 年制私立大学のフルタイム学生の平均在籍者数は 1,782 名、パートタイムを含めると 2,457 名であった (NCES 2012, table.229 & 306)。女子大学の規模は、私立全体の平均学生数の 63%、パートを含めた場合、56%となる。ちなみに、公立 4 年制フルタイム学生の平均は 8,571 名、パートを含むと 11,936 名と規模が大きくなる。

2) 大学院の有無と学生規模

大学院のない大学は 10 大学で、他の 34 大学は修士以上の大学院をもつ。その中で博士課程まで有しているのは 12 大学である。“Five Sisters”のうちでは、大学院をもたないのが Wellesley と、“コロンビア大学”の一員である Barnard の 2 大学、Mount Holyoke と Smith は修士までの大学院、Bryn Mawr は唯一、博士課程までの大学院を有する。学士、修士、博士の学位の他、短期大学卒業学位である準学士を授与する大学も 9 大学ある。こうした大学は、短期大学から 4 年制になって短期大学のプログラムも併せもつ、あるいは社会人向けの通信等の教育プログラムを提供している大学である。

大学院を有する 34 大学中、大学院の学生数が最大の大学はボストンにある Simmons (MA) で 3,050 名、さらに U. of Saint Joseph (CT) の 1,565 名、Notre Dame of Maryland (MD) の 1,515 名などが続き、1,000 名を超えるのは 5 大学となる。フルタイムの学生数よりも大学院生が多い大学が 5 大学あり (上記 3 大学の他、Chatham (PA)、C. of New Rochelle for Women (NY) ; 「大学院合計」欄に網掛け)、パートタイム学生を含む合計より多いのは、そこから Notre Dame of Maryland を除いた 4 大学となる。大学院においては、ほとんどの大学で男女共学制 (Bryn Mawr も共学) を取るとともに、社会人向けの職業関連プログラムを用意し、パートタイムを含めて社会人を主たるターゲットにしている大学も多い。例えば、Chatham では 20 を超えるマスター用のプログラムが用意されている⁷⁾

3) その他プログラム

一般のフルタイムでキャンパスに通う学生のみでなく、社会人を中心としたパートタイム学生を取り込むため、あるいは生涯に亘って女性に学ぶ機会を提供するということで、“Weekend Program” “Evening Program” “On-line Program” などのプログラムを提供している大学も 20 校以上ある⁸⁾。プログラムによって異なるが、共学のものが多い。但し、表 2 に掲載しているものは、大学 HP や Barron's Profiles で筆者が確認できたもののみであり、実際にはもっと多くの大学で行われているものと思われる。

この他、“Post-baccalaureate Pre-medical Program” などと称されるプログラムを用意し、医学部 (Medical School) を目指す学生への便宜を図っている大学もある。アメリカの場合、医師免許の取得は学士学位取得後、Medical School に入らなければならない、女子大学で医学部をもつ大学はない。Medical School に何人送り込んだかが大学の評価につな

がることにもなっており、医学部を目指す意欲ある、能力の高い学生を支援するために、このようなプログラムを設けている大学もある。“Five Sisters”をはじめ、威信の高い大学のほとんどはそうしたプログラムを提供している。ただ、その他の多くの Pre-professional curriculum の中の一つとして、他分野と共通で行われている Midway (KY) などの例もあり⁹⁾、大学によりプログラム内容の差は少なからずあるようだ。ここに挙げた大学も筆者が確認した範囲であり、これ以外にも存在すると考えられる。

(3) 学費、寮費と寄付基金

表3には、大学別に女性教員比率、授業料等の年間費用と、アメリカの大学の大きな特徴の一つで財務の豊かさを示す Endowment (寄付基金) の額、さらに Barron's に掲載されている7段階の大学ランクをまとめている。女性教員比率と大学ランクについては、後に大学全体との比較において詳しく検討することとする。

1) 授業料等の費用

ここに挙げている女子大学の授業料は、最高が Scripps (CA) の 41,950 ドル、続いて Mount Holyoke (MA) 41,456 ドル、Bryn Mawr (PA) 40,824 ドル、Wellesley (MA) 40,410 ドルなどと続く。4万ドルは、日本円にして約400万円 (\$1 = 100 換算、以下同様) に相当する。これらの大学名からもわかるように、威信の高い大学においては高額な授業料設定となっている。逆に最も低い授業料は Judson (AL) の 14,210 ドル、続いて Bennett (NC) 16,794 ドル、Brenau (GA) 17,700 ドル、Midway (KY) 18,300 ドル、Wesleyan (GA) 18,500 ドルとなり、これら5大学が1万ドル台である。先に見た高額な大学の半分以下であるが、日本では私立の工学部や看護学部の初年度納入金(入学金、諸費含)に相当する。ここに挙げた5大学はいずれも南部に位置する大学である。授業料平均は 28,079 ドル(約280万円)となり、南部においてこれを上回る大学は16校中2校しかなく、授業料は相対的に低い。授業料は大学ランクや地域によって規定されており、南部よりは北東部や西部で高く、大学ランクが高くなるほど授業料も高くなる。

もう一つの費用が寮生活費用(Room & Board)である。アメリカの伝統的な大学生活では、学習、課外活動と並んで大学で寮生活を送ることが三本柱として重視されてきたため、入寮者の比率やその金額(Cost of Room and Board)などの情報が、大学紹介の雑誌(Peterson's College Guide、Princeton Review、The College Board など)や検索サイト(U.S. NewsやU-CAN network など)などには、必ずと言ってよいくらい掲載されている。自宅や個人賃貸のアパートから通う学生が多い大学よりも、大学が寮を提供し、この利用者比率が高い大学の方が、伝統的で威信の高いアメリカの大学とも言える。その費用は、最も高いU. of Saint Joseph (CT) の14,130ドルからC. of Saint Mary (NE) の

表 2. アメリカ女子大学の学生数、授与学位と教育プログラム (2011-12 年現在)

No.	大学名	学部						学部合計 C (a+b)	パート比率 (b/c) %	大学院 ※ 4)		大学院 合計	学部・ 院合計
		フル女	フル男	フル計 a	パート女	パート男	パート計 b			女	男		
1	Saint Mary-of-the-Woods College	493	12	505	793	69	862	1,367	63.1	197	31	228	1,595
2	Saint Mary's College	1,496	3	1,499	10	1	11	1,510	0.7	none	none	none	1,510
3	College of Saint Benedict	2,060		2,060	50		50	2,110	2.4	none	none	none	2,110
4	St. Catherine University	2,550	23	2,573	1,176	81	1,257	3,830	32.8	1,370	128	1,498	5,328
5	Stephens College	560	15	575	170	15	185	760	24.3	60	10	70	830
6	College of Saint Mary	659		659	156	5	161	820	19.6	229	14	243	1,063
7	Ursuline College	539	46	585	325	43	368	953	38.6	466	69	535	1,488
8	Alverno College	1,665		1,665	656	3	659	2,324	28.4	389	46	435	2,759
9	Mount Mary College	1,450 (フル男性とパート男女含)						1,450	—	490 (男性含)		490	1,940
10	Univ. of Saint Joseph	810	10	820	225	15	240	1,060	22.6	1,350	215	1,565	2,625
11	Bay Path College	1,105		1,105	240		240	1,345	17.8	100	30	130	1,475
12	Mount Holyoke College	2,315	1	2,316	34	2	36	2,352	1.5	10		10	2,362
13	Pine Manor College	455		455	10		10	465	2.2	※ 2) (参考 34 名 2012 秋)			465
14	Simmons College	1,750		1,750	225		225	1,975	11.4	2,640	410	3,050	5,025
15	Smith College	2,570	1	2,571	17		17	2,588	0.7	453	72	525	3,113
16	Wellesley College	2,200		2,200	85		85	2,285	3.7	none	none	none	2,285
17	College of Saint Elizabeth	663	15	678	485	118	603	1,281	47.1	733	143	876	2,157
18	Barnard College	2,300		2,300	55		55	2,355	2.3	none	none	none	2,355
19	The College of New Rochelle for Women	605	25	630	335	60	395	1,025	38.5	930	105	1,035	2,060
20	Russell Sage College	805		805	55		55	860	6.4	no answer (Master 有)			860
21	Bryn Mawr College	1,280		1,280	20		20	1,300	1.5	370	100	470	1,770
22	Carlow University	1,040	70	1,110	580	120	700	1,810	38.7	700	80	780	2,590
23	Cedar Crest College	800	18	818	604	50	654	1,472	44.4	174	20	194	1,666
24	Chatham University	590	1	591	230	50	280	871	32.1	810	180	990	1,861
25	Moore College of Art and Design	455		455	105		105	560	18.8	105		105	665
26	Judson College	272	4	276	72	5	77	353	21.8	none	none	none	353
27	Trinity Washington University	841	17	858	488	45	533	1,391	38.3	515	107	622	2,013
28	Agnes Scott College	850	5	855	12	4	16	871	1.8	none	none	none	871
29	Brenau University	798		798	69		69	867	8.0	49		49	916
30	Spelman College	2,100		2,100	100		100	2,200	4.5	none	none	none	2,200
31	Wesleyan College	380		380	220	10	230	610	37.7	90	20	110	720
32	Midway College	790	85	875	316	87	403	1,278	31.5	none	none	none	1,278
33	Notre Dame of Maryland University	670		670	905	105	1,010	1,680	60.1	1,210	305	1,515	3,195
34	Bennett College (for Women)	710		710	60		60	770	7.8	none	none	none	770
35	Meredith College	1,770		1,770	195	10	205	1,975	10.4	265	35	300	2,275
36	Salem College	700	15	715	160	125	285	1,000	28.5	230	20	250	1,250
37	Columbia College	980	5	985	230	30	260	1,245	20.9	250	10	260	1,505
38	Converse College	600		600	120		120	720	16.7	380	70	450	1,170
39	Hollins University	695		695	21		21	716	2.9	159	45	204	920
40	Mary Baldwin College	1,061	30	1,091	393	44	437	1,528	28.6	216	45	261	1,789
41	Sweet Briar College	722		722	25		25	747	3.3	13		13	760
42	Mills College	880		880	55		55	935	5.9	480	120	600	1,535
43	Mount St. Mary's College	1,712	91	1,803	402	83	485	2,288	21.2	448	126	574	2,862
44	Scripps College/Claremont College	961		961	5		5	966	0.5	※ 3) 7	10	—	983
※ 1) 平均		1,099		1,110	244		271	1,383	19.6				1,803

* パート比率：■ 50%以上、■ 33～50%。

** 院合計：■ 院の学生がフルタイム学部生より多い

※ 1) フル女、フル計、パート計の平均は、Mount Mary を除いたもの。

※ 2) Pine Manor には修士課程があり、2012 年 fall 時点で、34 名の大学院在学者がある (HP.March./1/2014)。出典が異なるので、これは平均や合計に参入していない。

※ 3) Scripps には大学院はないが、Claremont Colleges の構成員であり、大学院で学ぶこともできるようである。

※ 4) 大学院の学生数に網掛けの大学は、大学院生の方が学部学生 (パートを含む) より多いもの。

出典：Barron's Educational Series (2012), Barron's Profiles of American Colleges 2013, Barron's Educational Series.

			プログラム※ 5)				※ 6)		
学位 (Bachelor 除く)			Week-	Online/	Life-	学士後／	Barron's		
Master's	Doctoral	Associate	end	Evening	Distance	long 他	pre-med	大学ランク	大学名
1		1			1			4	Saint Mary-of-the-Woods College
							1	3	Saint Mary's College
							1	3	College of Saint Benedict
1	1	1	1			1		4	St. Catherine University
1		1			1		1	3	Stephens College
1	1	1	1		1			5	College of Saint Mary
1	1		1	1	1		1	4	Ursuline College
1		1	1			1		4	Alverno College
1				1		1	1	4	Mount Mary College
1			1	1	1	1		5	Univ. of Saint Joseph
1		1	1		1			4	Bay Path College
1							1	2	Mount Holyoke College
1		1						5	Pine Manor College
1	1					1	1	3	Simmons College
1	1						1	1	Smith College
						1	1	1	Wellesley College
1	1		1	1	1			5	College of Saint Elizabeth
							1	1	Barnard College
1				1	?			3	The College of New Rochelle for Women
			1	1	1			4	Russell Sage College
1	1						1	1	Bryn Mawr College
1	1		1	1	1			4	Carlow University
1				1		1	1	4	Cedar Crest College
1	1				1	1		4	Chatham University
1			1	1		1		7	Moore College of Art and Design
					1			4	Judson College
1			1	1		1	?	4	Trinity Washington University
							1	2	Agnes Scott College
1			1	1	1	1		4	Brenau University
							1	3	Spelman College
1			1	1		1	1	4	Wesleyan College
		1	1	1	1		1	4	Midway College
1	1		1				1	4	Notre Dame of Maryland University
								5	Bennett College (for Women)
1				1		1	1	4	Meredith College
1				1				3	Salem College
1				1	1			4	Columbia College
1							1	3	Converse College
1							1	4	Hollins University
1				1	1	1		3	Mary Baldwin College
1							1	4	Sweet Briar College
1	1						1	3	Mills College
1	1	1	1					4	Mount St. Mary's College
							1	1	Scripps College/Claremont College

※ 5) Weekend、Evening、On-line (distance)、その他の主として成人向けプログラムを提供している大学には、学部、大学院を問わず「1」をつけた。十分にチェックできておらず、これ以外で行っているものもある。

※ 6) 1 : Most Competitive (最難関)、2 : Highly Competitive、3 : Very Competitive、4 : Competitive、5 : Less Competitive、6 : Non Competitive、7 : Special

6,700 ドルまで大きな開きがある。平均は 10,013 ドルで、日本円にすると約 100 万円となる。授業料の約 3 分の 1 程度の料金が多く、授業料金額と比例する傾向にある。つまりは、一般的に大学ランクが高いほど、寮費も高額になる。

この二つの金額を足した平均は 38,092 ドル、日本円で 380 万である。最高金額は Bryn Mawr (PA) の 53,714 ドルで、“Five Sisters” の平均は 51,154 ドルとなり、500 万円を上回る。最も年間経費が安い大学は Judson (AL) の 22,760 ドルで、比較的経費の安い 3 万ドル未満の大学は 7 校、そのうち 5 校は南部に位置する。

ここで注意しなければならないのは、全ての学生がこれだけの費用を支払っているわけではないということである。アメリカでは政府や大学が独自に支給する奨学金、助成金などが充実しており、家庭の状況や収入、高校や SAT の成績などによって支払う授業料等の支出が大きく異なってくる。例えば優秀な学生を入学させたい場合、高校や SAT の成績などに応じて大学が独自に補助する金額を決定し、授業料などを安く設定した入学条件を提示し、入学を促すなどということを行う。大学独自の財源を多くもつことが優秀な学生獲得に有利な条件となるのである。

2) 寄付基金 (Endowment)

上述のように、大学独自の財源である寄付基金が、大学の学生獲得や経営において重要性をもつ。承知の通り、アメリカは寄付文化をもつ国であり、篤志家や卒業生などの寄付により資金を得て、それを運用することで独自の財政基盤を築き、大学の発展を図ってきた。優秀な教員や学生の獲得、施設や設備の整備・向上等にその資金を活用するのである。よって、この基金をどれだけ大きくし、活用していくかは、各大学にとって重大な課題となっている。

表 4 から明らかなように、大学によってその金額に大きな差がある。データが掲載されていない大学もあるが、この中で最も少ない C. of Saint Mary (NE) で 700 万ドル、日本円に換算すれば 7 億円になる。最も高額なのは Wellesley (MA) の 13 億ドル、次いで Smith (MA) の 12 億ドルとなっている。Wellesley の金額を日本円に換算すると、約 1,300 億円にも及ぶ。ちなみに、2012 (平成 24) 年度において、日本一大きな女子大学である武庫川女子大学の母体・武庫川学院 (中学・高校を含) の「資金収入」(授業料、雑収入などあらゆる収入を含) は約 320 億円であるから¹⁰⁾、Wellesley の「基金」のみで 4 倍強の額となり、その規模の大きさがわかる。「基金」が 10 億ドルを超える大学は先の 2 校、それ以下で 1 億ドル (100 億円) 以上の大学は 10 校あり、これらはいずれも威信とランキングの高い大学である。これが保持できるからこそ、よい学生を集められ、その地位を保持できているともいえよう¹¹⁾。

表3. アメリカ女子大学の学生経費、寄付基金など

No. 大学名	授業料 (\$)	Room & Board (\$)	年間 費用計 \$	※ 1)	※ 2)	教員の 女性比率
				寄付基金 mill. \$	Barron's 大学ランク	
1 Saint Mary-of-the-Woods College	24,500	8,890	33,390	10	4	75
2 Saint Mary's College	32,000	9,800	41,800	109	3	70
3 College of Saint Benedict	35,000	10,000	45,000	37	3	47
4 St. Catherine University	29,780	8,002	37,782	45	4	79
5 Stephens College	26,620	9,000	35,620	25	3	60
6 College of Saint Mary	24,100	6,700	30,800	7	5	79
7 Ursuline College	24,910	8,288	33,198	28	4	78
8 Alverno College	21,063	6,966	28,029	17	4	79
9 Mount Mary College	22,540	7,600	30,140	9	4	81
10 University of Saint Joseph	31,500	14,130	45,630	15	5	—
11 Bay Path College	24,530	13,330	37,860	19	4	60
12 Mount Holyoke College	41,456	12,140	53,596	529	2	53
13 Pine Manor College	35,000	12,000	47,000	—	5	74
14 Simmons College	32,376	12,906	45,282	* 159	3	75
15 Smith College	40,070	13,390	53,460	1,200	1	54
16 Wellesley College	40,410	12,590	53,000	1,300	1	63
17 College of Saint Elizabeth	25,058	10,904	35,962	18	5	69
18 Barnard College	29,500	12,500	42,000	184	1	65
19 The College of New Rochelle for Women	25,000	9,300	34,300	—	3	75
20 Russell Sage College	21,000	8,300	29,300	27	4	62
21 Bryn Mawr College	40,824	12,890	53,714	574	1	※ 3) 57
22 Carlow University	23,504	9,256	32,760	12	4	76
23 Cedar Crest College	30,560	9,804	40,364	16	4	68
24 Chatham University	30,312	9,318	39,630	49	4	68
25 Moore College of Art and Design	31,478	11,823	43,301	8	7	62
26 Judson College	14,210	8,550	22,760	13	4	56
27 Trinity Washington University	21,040	9,210	30,250	—	4	65
28 Agnes Scott College	32,195	10,150	42,345	231	2	60
29 Brenau University	17,700	8,950	26,650	26	4	61
30 Spelman College	22,000	10,500	32,500	* 309	3	64
31 Wesleyan College	18,500	8,200	26,700	47	4	58
32 Midway College	18,300	8,300	26,600	—	4	63
33 Notre Dame of Maryland University	28,750	9,900	38,650	26	4	70
34 Bennett College (for Women)	16,794	7,428	24,222	9	5	29
35 Meredith College	27,720	7,950	35,670	82	4	69
36 Salem College	22,360	11,764	34,124	—	3	53
37 Columbia College	25,050	6,638	31,688	19	4	64
38 Converse College	27,320	8,554	35,874	71	3	54
39 Hollins University	30,775	10,670	41,445	129	4	53
40 Mary Baldwin College	26,960	7,790	34,750	29	3	58
41 Sweet Briar College	31,095	11,100	42,195	82	4	56
42 Mills College	38,036	12,000	50,036	165	3	62
43 Mount St. Mary's College	31,626	10,125	41,751	80	4	73
44 Scripps College/Claremont College	41,950	12,950	54,900	231	1	59
平均	28,079	10,013	38,092			64.1

※ 1) 寄付の数字は、Peterson's Publishing (2011), Four-Year Colleges 2012 による。明確な説明はないが、2010 年頃の数字だと思われる。空欄は記載がなかったもの。「*」をつけた二大学は、2012-3 年のもので、National Association of College and University Business Officers and Commonfund Institute (2013), U.S. & Canada Institutions Listed by Fiscal Year 2012 Endowment Market Value and Change in Endowment Market Value from FY 2011 to FY2012 による。

※ 2) 1: Most Competitive (最難関)、2: Highly Competitive、3: Very Competitive、4: Competitive、5: Less Competitive、6: Non Competitive、7: Special

※ 3) Bryn Marw に関しては、Barron's (2013) に女性教員比率がなかったため、HP より採取 (Feb./10/2014)

出典: Barron's (2013) 前出

寄付基金 (endowment) については、Peterson's (2011), Four-Year Colleges 2012

2. 他大学との比較からみた女子大学の特徴

本節では全米の4年制大学とのデータ比較を通して、女子大学の特性を明らかにしていく。まず、アメリカの大学分類において最も精緻で、用いられることが多いカーネギー教育振興財団（Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching）による大学分類を通じて、女子大学がどのような特性をもった大学として位置づくのかを確認する。その後、これとは別の観点から、すなわち大学入学難易度、学長と教員における女性比率などから、大学全体との比較を行い、女子大学の特性を検討する。

(1) カーネギー分類1：基礎分類

表4は、女子大学にカーネギー分類を適用したもので、財団のHPが提供する各大学データを掲載した。本項で検討する基礎分類の他、以下で使用する分類項目での位置づけも示している。学生数については、調査年度が異なるので、先に表2の数字とは異なる。

カーネギーの大学分類には、学部のみ分類、大学院のみ分類、学部と大学院の割合、在学生規模、居住形態と規模など様々にある。ここでは最も一般的な基礎分類を用い、他大学との比較を通じて、女子大学の位置づけを探る。

基礎分類は、次のように大きく4つに分けられる（詳細はHP参照）。

- ① 「研究大学（Doctorate Granting Institutes）」：大学院博士課程を持ち、毎年ある一定領域以上から、一定数の博士学位を授与している。これはさらに、研究科の多さや学位授与の多さなどから3つに細分される。
- ② 「修士大学（Master's Institutes）」：博士課程はあってもその学位授与数が小さく、修士学位については一定数を授与している。
- ③ 「学部大学（Baccalaureate Institutes）」：大学院はあってもその在籍者や学位授与は少数で、学士学位の授与を主とする大学。これも Arts & Sciences、いわゆる教養学位のみを授与する大学から職業関連の学士を授与する、あるいは準学士を授与する割合に応じてさらに3つの下位分類がなされる。
- ④ 「その他」：職業関連（宗教含む）学位に特化した大学（Special Focus Institutes）や少数民族のための大学（Tribal Institutes）など。

表5には、上に挙げた4つの大学分類の比率を、2年制を除いた大学全体と女子大学に分けてそれぞれ示している。大学全体での分類ごとの割合は、「学部大学」が29.8%で約3割、次に「修士大学」が26.7%で4分の1強、この二つで合計56%、過半数となる。「研究大学」は約1割である。しかしながら、「学部大学」では大学の学生規模が小さな大学も多く、「研究大学」の中には大規模校が少なくないので、在学生数の割合でみていく。すると、「研究大学」が46.1%と半数近くを占め、最も多くなっており、その次には「修

士大学」が37.1%で続く。「学部大学」は学校数では多いものの、学生数割合は11.3%を占めるに過ぎない。職業志向・資格獲得を中心とする「その他」は、学校数割合では32.5%と最も多いものの、小規模の大学が多いため、学生比率では5.4%と最も小さい。

女子大学の場合、どの大学も規模はそれほど大きくないので、学生数での比率は出しておらず、学校数の比率のみを検討していく。「研究大学」はなく、ほとんどが「学部大学」と「修士大学」に分類される。前者の「学部大学」が52.3%と過半数、後者の「修士大学」が45.5%と二分される。「学部大学」の中でも、教養学士学位と言われる Arts & Sciences を主に授与する大学が40.9%ととび抜けて多いのが女子大学の大きな特徴であり、伝統と威信のある“Five Sisters”は、博士課程をもっている Bryn Mawr を含めて全てがこのカテゴリーに分類される（表4）。修士大学は20校、45.5%と大きな割合を占め、そのうち規模が大きい“Large”に分類されているのが、ボストンの Simmons (MA) やピッツバーグの Chatham (PA) など10校である（表4のno.19の Rochelle と no.20の Russell Sage を含む…※1、2を参照）。女子大学で「その他」に分類されるのは、ニューヨーク州にある Moore College of Art and Design のみで、ここではデザインやファッションなど、職業関連の学士が授与される特殊大学である。

(2) カーネギー分類2：授業プログラム

学部カリキュラムでの授業プログラム内容から大学を分類したのが表6である。まず、教養 (Arts & Sciences [以下、A&S] Focus) プログラム中心か、職業中心のプログラム (Professions [以下、Prof.] Focus) か、その程度によって大きく5分類され、それに「その他」が加わり合計6分類となっている。さらに、大学院の有無と規模によって、それぞれが3分類され、最終的には18のカテゴリーに分けられている。

まず、大学全体を学校数単位から見ると、「職業優位 (Prof.+A&S)」と「双方とも (Balanced)」に分類される大学がいずれも20%弱あり、「教養中心 (A&S Focus)」は5.9%と少ない。学生数比率から見ると、「双方とも」が最も多く40%弱ある。先に見た大きな研究大学の中には、州立大学を中心に、教養だけではなく、職業プログラムを準備している大学が多い影響と思われる。これに続き「職業優位」が約30%を占め、この2つで7割を占める。「教養中心」は5%弱、「教養優位 (A&S+Prof.)」は11%でしかない。

女子大学では、「教養中心」プログラムが圧倒的に多く、学校数では34%と3分の1強を占め、この分類の比率が学校数、学生数ともに少なかった4年制全体の傾向とは大きく異なる。次に「双方とも」が25%と多く、さらに「教養優位」と「職業優位」がそれぞれ15%と続く。「教養中心」と「教養優位」を合わせると約半分となり、教養に重きを置いて大学が入学難易度の高い大学を中心に多い（表3、4参照）。教養と職業の双方を重視という大学も少なからずあり、これらは入学難易度が低くなる傾向にある。

表 4. カーネギーの大学分類からみたアメリカ女子大学の特徴

No.	大学名	カーネギー 基礎分類	学部教育 プログラム	大学院 規模※ 3) (院・パート含)	学生数 パート含)	大学 規模	居住 形態※ 3)
1	Saint Mary-of-the-Woods College	Bac/Diverse	Prof.+A&S	SGC	1,677	VS	NR
2	Saint Mary's College	Bac/A&S	A&S+Prof.	NGC	1,664	S	HR
3	College of Saint Benedict	Bac/A&S	A&S+Prof.	NGC	2,105	S	HR
4	St. Catherine University	Master's L	Balanced	SGC	5,277	M	R
5	Stephens College	Bac/Diverse	Prof.+A&S	NGC	1,231	S	HR
6	College of Saint Mary	Master's S	Prof.+A&S	SGC	1,120	VS	NR
7	Ursuline College	Master's S	Prof. focus	SGC	1,515	S	NR
8	Alverno College	Master's S	Prof.+A&S	SGC	2,815	S	NR
9	Mount Mary College	Master's S	Prof.+A&S	SGC	1,925	S	NR
10	Univ. of Saint Joseph	Master's L	Balanced	SGC	1,935	S	R
11	Bay Path College	Bac/A&S	Balanced	SGC	2,034	S	HR
12	Mount Holyoke College	Bac/A&S	A & S focus	SGC	2,304	S	HR
13	Pine Manor College	Bac/A&S	A & S focus	SGC	484	VS	HR
14	Simmons College	Master's L	Balanced	SGC	5,003	M	R
15	Smith College	Bac/A&S	A & S focus	SGC	3,121	M	HR
16	Wellesley College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	2,324	S	HR
17	College of Saint Elizabeth	Master's L	Balanced	SGC	2,157	S	R
18	Barnard College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	2,357	S	HR
19	The College of New Rochelle for Women ※ 1)	Master's L	A & S focus	SGC	4,859	M	R
20	Russell Sage College ※ 2)	Master's L	Balanced	SGC	2,805	S	R
21	Bryn Mawr College	Bac/A&S	A & S focus	SGC	1,771	S	HR
22	Carlow University	Master's M	Prof.+A&S	SGC	2,533	S	NR
23	Cedar Crest College	Bac/Diverse	Balanced	NGC	1,887	S	R
24	Chatham University	Master's L	Balanced	SGC	2,219	S	HR
25	Moore College of Art and Design	Special/Arts	Special	(Special focus) 582			
26	Judson College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	313	VS	R
27	Trinity Washington University	Master's L	A&S+Prof.	SGC	2,024	S	NR
28	Agnes Scott College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	868	VS	HR
29	Brenau University	Master's L	Prof. focus	SGC	2,760	S	R
30	Spelman College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	2,229	S	HR
31	Wesleyan College	Bac/A&S	A&S+Prof.	SGC	685	VS	R
32	Midway College	Bac/Diverse	Prof. focus	NGC	1,392	S	NR
33	Notre Dame of Maryland University	Master's L	Prof.+A&S	SGC	2,971	S	NR
34	Bennett College for Women	Bac/A&S	A&S+Prof.	NGC	766	VS	HR
35	Meredith College	Bac/Diverse	Balanced	SGC	2,262	S	HR
36	Salem College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	985	VS	HR
37	Columbia College	Master's M	Balanced	NGC	1,444	S	R
38	Converse College	Master's M	A&S+Prof.	SGC	1,720	S	HR
39	Hollins University	Bac/A&S	A & S focus	SGC	1,052	VS	HR
40	Mary Baldwin College	Master's S	A&S+Prof.	SGC	1,782	S	R
41	Sweet Briar College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	756	VS	HR
42	Mills College	Master's M	A & S focus	SGC	1,501	S	HR
43	Mount St. Mary's College	Master's S	Balanced	SGC	2,482	S	R
44	Scripps College/Claremont College	Bac/A&S	A & S focus	NGC	921	VS	HR

※ 1) : The College of New Rochelle は 4 schools から構成され、女子大はその一つ。分類では 4 校を一つとして扱う

※ 2) : Russell Sage College は、Sage College of Albany、Russell Sage College と大学院からなる The Sage Colleges の一員であり、カーネギーの分類では、Russell Sage 単独ではなく、The Sage Colleges を対象としている。

※ 3) : 分類やプログラム等の記号の説明は、本論文中で説明しているが、大学院規模と居住形態のみ説明する。

大学規模 SGC : Some Graduate Coexistence, NGC : No Graduate Coexistence

居住形態 HR : primarily Highly Residential, R : primarily Residential, NR : Non Residential

表 5. カーネギーの大学基礎分類による 4 年制大学と女子大学の比率比較

		4 年制 全体での カテゴリ			全体での カテゴリ			女子 全体での カテゴリ		
		大学数	割合 (%)	小計 (%)	在学生数	割合 (%)	小計 (%)	大学数	割合 (%)	の小計
研究大学	Research U./VH	108	4.0		2,809,581	22.4		0	—	
	Research U./H	99	3.6		1,746,651	13.9		0	—	
	D. Research U	90	3.3	10.9	1,228,846	9.8	46.1	0	—	0.0
修士大学	Master's/Large	413	15.2		3,503,396	27.9		10	22.7	
	Master's/Medium	185	6.8		785,985	6.3		4	9.1	
	Master's/Small	126	4.6	26.7	367,219	2.9	37.1	6	13.6	45.5
学士大学	Bac/A&S	271	10.0		460,036	3.7		18	40.9	
	Bac/Diverse	392	14.4		664,939	5.3		5	11.4	
	Bac/Assoc.	147	5.4	29.8	298,300	2.4	11.3	0	—	52.3
その他	Special	851	31.4		657,296	5.2		1	2.3	
	Tribal	32	1.2	32.5	19,686	0.2	5.4	0	—	2.3
合計		2714	100.0	100.0	12,541,935	100.0		44	100.0	100.0

※ VH : Very High

H : High

Bac : Bachelor

A&S : Arts & Sciences

Assoc : Associate

出典 : Carnegie Foundation HP、< <http://classification.carnegiefoundation.org/summary/basic.php> > (Jan./2014)

表 6. カーネギーの大学教授プログラム分類による 4 年制大学と女子大学の比率比較

学部※ 1) / 院※ 2)		4 年制 全体での カテゴリ			全体での カテゴリ			女子 全体での カテゴリ		
		大学数	割合 (%)	小計 (%)	在学生数	割合 (%)	小計 (%)	大学数	割合 (%)	小計
教養中心	A&S-F/NGC	98	3.66		153,886	1.3		8	18.18	
	A&S-F/SGC	33	1.23		95,174	0.8		7	15.91	
	A&S-F/FGC	27	1.01	5.90	318,187	2.7	4.83	0	—	34.09
教養優位	A&S+Prof/NGC	65	2.43		102,776	0.9		3	6.82	
	A&S+Prof/SGC	92	3.43		458,657	3.9		4	9.09	
	A&S+Prof/HGC	41	1.53	7.39	809,492	6.9	11.66	0	—	15.91
双方とも	Balanced/NGC	99	3.69		182,641	1.6		2	4.55	
	Balanced/SGC	291	10.86		2,005,154	17.1		9	20.45	
	Balanced/HGC	96	3.58	18.13	2,409,303	20.5	39.10	0	—	25.00
職業優位	Prof.+A&S/NGC	100	3.73		174,586	1.5		1	2.27	
	Prof.+A&S/SGC	358	13.36		2,114,533	18.0		6	13.64	
	Prof.+A&S/HGC	73	2.72	19.81	1,305,321	11.1	30.57	0	—	15.91
職業中心	Prof.-F/NGC	92	3.43		111,710	1.0		1	2.27	
	Prof.-F/SGC	159	5.93		630,735	5.4		2	4.55	
	Prof.-F/HGC	25	0.93	10.30	127,363	1.1	7.40	0	—	6.82
その他	Special	850	31.72		652,589	5.6		1	2.27	
	(not applicable)	20	0.75		19,046	0.2		0	—	
	(not classified)	161	6.01	38.47	85,148	0.7	6.44	0	—	2.27
合計		2680	100.0	100.0	11,756,301	100.0		44	100.0	100.0

※ 1) A&S-F : Arts and Sciences Focus

A&S+Prof. : Arts and Sciences + Professions . . . A&S が優位

Balanced : Balanced Arts & Sciences/Professions

Prof. + A&S : Professions + Arts and Sciences . . . Professions が優位

Prof.-F : Professions Focus

※ 2) NGC : No Graduate Coexistence. SGC : Some Graduate Coexistence.

HGC : High Graduate Coexistence

出典 : Carnegie Foundation HP、< <http://classification.carnegiefoundation.org/summary/basic.php> > (Jan./2014)

(3) カーネギー分類 3：大学規模と寮生活

取り上げた3つめのカーネギー分類は、大学の規模に基づいたものである。「大規模 (Large)：10,000 名以上」、「中規模 (Medium)：3,000 ～ 9,999 名」「小規模 (Small)：1,000 ～ 2,999 名未満」「非常に小規模 (Very Small)：999 名未満」の4分類と、「その他」を入れての5つのカテゴリーからなる。さらに「その他」を除く4カテゴリーは、学生が大学の寮に住む率によって、3つ (“Highly Residential”、“Residential”、“Non Residential”) に分類されている。

このカテゴリーについては学校数の割合のみを表7に示した。大学全体では、「小規模」校が24.6%で約4分の1を占めており、「非常に小規模」と「中規模」がそれぞれ17%強、「大規模」は1割となった。これに対し、女子大学では「小規模」が6割を超えて圧倒的に多く、これに「非常に小規模」25.0%を合わせると9割近くになり、女子大学の規模は概して小さいことが確認できる。さらに、下位分類の寮生活割合を見ると、“Highly Residential”の割合が47.7%、“Residential”の29.5%を加えると77%となり、伝統的な寮生活を重視している大学が、全体と比べてかなり多いことも女子大学の特徴といえる。

表7. カーネギーの大学規模・居住スタイル分類からみた4年制大学と女子大学の比率比較

規模／寮*		4年制 大学数	全体での 割合 (%)	カテゴリー 小計 (%)	女子 大学数	全体での 割合 (%)	カテゴリー 小計 (%)
大規模	Large/NR	134	4.8		0	—	
	Large/R	103	3.7		0	—	
	Large/HR	41	1.5	10.0	0	—	0.0
中規模	Medium/NR	175	6.3		0	—	
	Medium/R	172	6.2		3	6.8	
	Medium/HR	132	4.7	17.2	1	2.3	9.1
小規模	Small/NR	200	7.2		7	15.9	
	Small/R	164	5.9		8	18.2	
	Small/HR	321	11.5	24.6	13	29.5	63.6
非常に 小規模	Very Small/NR	272	9.7		2	4.5	
	Very Small/R	70	2.5		2	4.5	
	Very Small/HR	140	5.0	17.3	7	15.9	25.0
その他	Special focus	850	30.5		1	2.3	
	(not classified)	16	0.6	31.0	0	—	2.3
総数		2,790	100.0	100.0	44	100.0	100.0

※ HR：Highly Residential R：Residential NR：Non Residential

出典：Carnegie Foundation HP、< <http://classification.carnegiefoundation.org/summary/basic.php> > (Jan./2014)

以上、カーネギー分類から全体との比較で女子大学を見ると、小規模で、教養教育と寮生活も重視している傾向が強いと言えるが、教養教育と職業プログラムの双方を重視している大学もかなりの割合に上る。入学難易度の高い大学は、教養中心である。学部を中心とした大学ばかりでなく、「修士大学」に分類される大学も 45.5%と半数近くある。坂本が 1994 年のカーネギー分類をもとに行った女子大学の分類では、女子大学のうち 28% が修士大学に分類されているので (1999、79-80 頁)、この間に修士大学の割合は増えたことになる。厳密にいうと、この間に女子大学ではなくなった大学が 20 校以上あるので、詳細な検討が必要であるが、筆者が知る範囲では、入学難易度の高い大学を除き、職業に結びつく修士学位を共学制の大学院で授与する大学は増えている。これにより、学部での学生の減少を補い、学生の獲得を目指している女子大学もあるようだ。

(4) 大学入学難易度

4 年制大学の入学難易度において、女子大学は大学全体の中でどのような位置にあるのか。アメリカでは様々な「大学ランキング」が提供されているが、全ての女子大学を比較するには困難な点もあるので¹²⁾、ここでは、Barron 社が提供する Profiles of American Colleges 2013 に掲載されている “Admissions Selector Rating” を指標として使用する。これは入学者の SAT や ACT、高校 3 年での成績やクラス成績順位比率などを参考に作られるもので、① Most Competitive、② Highly Competitive、③ Very Competitive、④ Competitive、⑤ Less Competitive、⑥ Non Competitive の 6 段階と、それ以外の ⑦ Special の 7 カテゴリーからなり、入学難易度に相当する (①が最も難易度が高い)。2013 年度版に掲載されている大学数は約 1700 校あり、主要な大学、全ての女子大学が網羅されている。

各ランクの学校数比率を、掲載大学全体と女子大学それぞれに集計し、表 8 に掲載した。まず全体の分布を見ると、上から 4 番目の④ Competitive に割り振られている大学が最も多く 46.3%、次に③ Very Competitive が 17.9%であり、この 2 つで 6 割を超える。最も難易度の高い① Most Competitive は 5.8%に過ぎない。しかしこのカテゴリーの大学には University of California などの大規模校も含まれるので、学生数の比率では大きくなる。

女子大学の比率も、全体と同様の傾向にある。すなわち、④ Competitive と③ Very Competitive の比率がそれぞれ 45.5%、22.7%と大きく、双方で 3 分の 2 を占める。数字上で大きく異なるのは、① Most Competitive が 5 校あり、女子大学ではその比率が 11.4%となって、全体の数字より 2 倍も高くなっていることである。このランクには “Five Sisters” のうち Mount Holyoke (MA) を除く 4 校と、カリフォルニアの Scripps (5 大学からなる Claremont Colleges の一員) が入っている。しかしながら、学校数の比

率では女子大学が高いものの、学生数でみるならば全体の① Most Competitive の比率は上がるので、全体と女子大学の差はこれよりは縮小されると考えてよい。なお、個々の女子大学のランクは表 2 と 3 に掲載している。

表 8. Barron's Profiles による大学ランク比率

ランク	全体	女子大学	
Most Competitive	89 5.8	5 11.4	上段：大学数 下段：%
Highly Competitive	109 7.2	2 4.5	
Very Competitive	273 17.9	10 22.7	
Competitive	706 46.3	20 45.5	
Less Competitive	191 12.5	6 13.6	
Non Competitive	76 5.0	0 0.0	
Special	80 5.2	1 2.3	
合計	1,524 100.0	44 100.0	

出典：Barron's(2012). Profiles of American Colleges 2013.

(5) 女性教員比率

各大学の教員に占める女性教員の割合を取り上げる。女性教員の多さ（比率の高さ）は、女子学生に対してロールモデルを示すものであるとともに、女性にとっての教育・研究環境のよさを示す一つの指標とみることができる¹³⁾。表 9 は、女性教員が占める割合を、フルタイムの教員のみと、フルタイムとパートタイムを合算した教員に分け、設置者と 4 年制・2 年制ごとにその割合を示している。まず 4 年制大学のフルタイムの教員のみでは、公立 41.5%、私立では 42.1%といずれも約 4 割強であり、パートタイムを加えると、ともに 4%ほど増加するものの半分には満たない。4 年制に比べ、2 年制大学では女性比率が上昇する。フルタイム教員での比率は、4 年制よりも 10%以上増加し、公立 54.2%、私立 59.3%となり、特に私立では 6 割近くに達する。

女子大学のフルタイムのみの女性比率は 64.1%である。この数字は実数から計算されたものではなく、表 3 の中に掲載した個々の女子大学の女性比率の平均である。よって、この数字は上で見てきた数値と単純には比べることはできないことを断っておく。しかしながら、飛び抜けて大規模な大学はないので、実数においても大きな差異はないものと考ええる。そうした点を考慮に入れても、女子大学における女性教員（フルタイム）の占める割合は 4 年制大学より 20 ポイント以上、2 年制大学よりも 10 ポイント弱も高く、女性教員が高い教育・研究環境であると言える。表 4 には各女子大学の女性比率が示してあ

るが、50%未満は伝統的に黒人を主とする Bennett (NC) 1 校のみで、その比率は 29% と大幅に低くなっている。他の大学全ては 50%以上で、50%台が 11 校、60%台 17 校、70%台 12 校、80%以上はウィスコンシン (WI) にあり、カソリックの伝統をもつ Mount Mary (WI) の 1 校だけである。このように、全米の大学との比較でみると、女子大学においては、フルタイム教員に占める女性の割合は 20 ポイント以上高くなっている¹⁴⁾。

表 9. 教員 (faculty) に占める女性の割合

	full-time ファカルティ	full+part 合計の教員	(%)
女子大学(4年)	※ 64.1	—	
全大学(短大含)	43.9	48.2	
公立 4 年制大学	41.5	45.0	
私立 4 年制大学	42.1	46.8	
公立 2 年制大学	54.7	54.2	
私立 2 年制大学	57.6	59.3	

※ Barron's (2013) に掲載の女性教員割合 (2011-12 年)。但し、この数字はそれぞれの大学の女性比率の平均であり、女子大全体の教員数に占める女性教員の割合ではない。極端に人数の多い女子大学はないので、この数字で、女子大学の傾向はつかめると考える。

出典：National Center for Education Statistics (2012) Digest of Education Statistics. Table 286. Fall 2011
http://nces.ed.gov/programs/digest/d12/tables/dt12_286.asp?referrer=report
 前掲 Barron's (2013)。

(6) 学長の女性比率

学長の性別を女子大学と他大学で比較してみよう。表 1 より、44 女子大学の学長の性別を地区ごとに集計して示したものが表 10 である。全体で 40 校、90.9%の学長が女性で、男性は 4 名に過ぎない。先に述べたように、男性学長の大学は、北東部では Pine Manor の 1 大学、南部では Judson、Brenau、Midway の 3 大学で、これらはいずれも入学難易度としては低く (Barron's のランクでは 4 か 5)、学部学生規模 276 ～ 875 と、とても小規模な大学である (表 2 参照)。

では、全米の大学学長に占める女性割合はどうだろうか。NCES にそれを示すデータはないが、ACE (the American Council of Education) が 1986 年以来、5 年毎に調査を行っており、その数字を利用できる。表 11 には、2006 年と 2011 年の比率を掲載した。全体の数字は、短期大学を含めた数字で、4 年制大学のための割合を出すことはできない。そこで、女子大学のほとんどが属し、大学数としては最も多い学部中心大学 (Bachelor's College) の数字をみると、2006 年で 23.2%であったものが、2011 年には 22.9%となり、他の種類の大学では全て上昇している中で、唯一下がっている。特殊大学 20.5%、

博士大学 22.3%に次いで低い数字となっており、女子大学での女性比率 90.9%と比較すると、その約 4 分の 1 という低さである。女子大学の学長には、強く意図的に女性が登用されていることは明らかである¹⁵⁾。

表 10. アメリカの女子大学学長の性別（地域ごと）

	全体	男性	女性	上段：大学数 下段：%
中西部	9 20.5	0 0.0	9 100.0	
北東部	16 36.4	1 6.3	15 93.8	
南部	16 36.4	3 18.8	13 81.3	
西部	3 6.8	0 0.0	3 100.0	
合計	44 100.0	4 9.1	40 90.9	

※性別の%は、地域ごとの大学数を分母とした比率
出典：女子大学 HP より（アドレスは略・・・表 1 参照）

表 11. 大学の属性別にみた女性学長割合（アメリカ）

大学種別 \ 年	2006 年	2011 年	
博士大学	13.8	22.3	(%)
修士大学	21.5	22.8	
学部大学	23.2	22.9	
短期大学	28.8	33.0	
特殊目的大学	16.6	20.5	
公立（全種類）	26.6	29.4	
私立（全種類）	18.7	21.9	
全体	23.0	26.4	

出典：Cook, Sarah G. (2012) "Women Presidents: Now 26.4% but Still Underrepresented." *Women in Higher Education*, 21 (5), 1-3.
及 び Colorado Women's College 2013. *Benchmarking Women's Leadership in the United States*.

（原典は ACE (the American council of Education) (2012) *the American College President 2012*）

しかしながら女子大学の学長が女性というのは、創設当時から続く傾向ではない。確かに、Wellesley は 13 代、Barnard では 11 代にわたり、学長（Barnard は初期の代表者を含む）は全て女性である。Barnard の場合、Columbia 大学に附設された女子用の教育機関といった事情もあるだろう。女性教育家 Mary Lyon が創設した Mount Holyoke でさえ、第 2 次世界大戦前の 1937 年から 1978 年まで、3 代にわたって男性の学長が続いた¹⁶⁾。Vassar でも、1970 年に共学化するまでの 7 代の学長のうち、女性は Sarah Gibson Blanding (1946-1964) の一人だけであった¹⁷⁾。Bryn Mawr では、6 代学長 Mary

Patterson McPherson (1978-1997) 以降 (現在、8 代目) は女性学長が続くが、それまでは男性、女性が交互に学長となっている¹⁸⁾。Agnes Scott に至っては、Ruth Schmidt (1982 ~ 1994) が 1982 年に学長となるまで、二番目に歴史の古い Stephens (MO) でも 1983 年に Patsy Sampson が就任するまで、女性の学長はいなかった¹⁹⁾。

このような歴史があり、威信の高い女子大学でさえ、男性の学長はよくあることであった。上に示した例も考え合わせると、女性学長が増えていったのは、1970 年代後半くらいからではないかと思われる。1960 年代から 70 年代にはフェミニズム運動、そして 60 年代終わりから 70 年初めには共学化の大きな波があり、女子大学を含む single-sex 大学は大きな転換点に立たされた。1972 年には教育修正法 (Title IX) が出されて、適用除外項目はあるものの性差別禁止が規定されている²⁰⁾。さらに大きな動きは、同年に女子大学連合 (Women's College Coalition) が結成されたことである。この頃から、女子大学は「女子大学としての存在意義」を問い直し、目指す方向性、メリット、アピールポイントといったものを真剣に探り始めた、あるいはそうせざるをえなくなった。その成果の一つとして 1981 年には A Study of Learning Environment at Women's Colleges が出版されており (坂本 1999、51 頁)、女子大学の存続意義を巡る切迫した議論の中で、女性学長を置く傾向が強まっていったのではないか。この経緯に関しては、さらに資料を収集し、詳細に経緯を検討してみる必要がある。

3. 日本との比較：女性教員と女性学長比率

日本の女子大学との対比からアメリカの女子大学の現状を捉えてみる。大学分類や大学ランクにおいては基準が異なるため比較は困難であるが、学長と教授の女性割合については日本とのデータ比較が可能なので、本稿ではこれに絞って検討していく²¹⁾

学長と教授の性別比率を設置者ごとに示したものが表 12 である (4 年制のみ)。まず教授の女性比率を見ると、日本の全体では 14.0% で、アメリカの 4 年制大学フルタイムの 3 分の 1 ほどにすぎない (表 9 参照)。設置者別では、公立大学で最も高く 19.0%、5 人に 1 人が女性である。看護系の単科大学の比率が多いことが、1 つの要因であると思われる。これに対して私立大学は 16.2%、理工系の教員割合の高くなる国立大学では 8.4% に過ぎない。学長の女性割合は、全体で 8.4% に過ぎず、教授職での割合 14.0% よりも大きく下がる。設置者別では、先ほども述べた単科の看護大学が少なくない公立で 13.4% と最も高く、続いて私立の 8.5%、国立では 3.5% となる。国立と私立の女性学長比率は、教授女性比率の半分以下となる。様々な種類の大学で 20% 以上あったアメリカに比べると、非常に低い数字である。

女子大学に限って見た場合はどうか。設置者別と地域別に男女比率を示したものが表

表 12. 日本における大学学長および教授の男女比率（設置者別）

	学長 合計	男性	女性	教授 合計	男性	女性	
国立大学	86 100.0	83 96.5	3 3.5	21,597 100.0	19,775 91.6	1,822 8.4	上段：人数 下段：%
公立大学	82 100.0	71 86.6	11 13.4	4,373 100.0	3,541 81.0	832 19.0	
私立大学	578 100.0	529 91.5	49 8.5	42,788 100.0	35,847 83.8	6,941 16.2	
全体	746 100.0	683 91.6	63 8.4	68,758 100.0	59,163 86.0	9,595 14.0	

出典：文部科学省 2013、『平成 25 年度 学校基本調査』

< <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001051733&cycode=0> >

(Jan./18/2014)

13 である。国公立を含めた全 77 女子大学のうち、女性学長は 16 名、20.8%であり、全大学の 8.4%よりは 2.5 倍ほど高いが、アメリカの女子大学（90.7%）と比べると 4 分の 1 にも満たない。設置者別で見ると、国公立大学においてはお茶の水大学の 1 校のみが女性学長で、他の女性学長は全て私立大学である。お茶の水女子大学は 2001 年に初めて女性学長が就任し、それ以降、今日（2014 年 3 月）まで女性学長が 3 代続いている。奈良女子大学では 1997 年に国立で初めての女性学長が誕生したものの、その一人だけで、以降は男性学長が就任している（2014 年 3 月現在）。私立大学だけでみると、73 校中 15 校、20.5%の大学で女性が学長となっており、5 校に 1 校の割合である。さらに関東、近畿、その他の 3 つの地域に分けて比較すると、関東は 33 校中 9 校、27.3%であるのに対し、関西では 11.0%、その他では 15.4%と低い数字となっている。関東以外の女

表 13. 日本の女子大学学長の性別（設置者別・地域別）

(2013 年 4 月 1 日現在)

	総計	男性	女性	女性学長のうち			
				宗教系	(カソリック)	(プロテスタント) ※2)	
設置者 私立	73 100.0	58 79.5	15 20.5 ※1)	9 60.0	5 33.3	4 26.7	上段：大学数 下段：%
国公立	4 100.0	3 75.0	1 25.0	—	—	—	
地域 関東地方	33 100.0	23 69.7	9 27.3	3 33.3	2 22.2	1 11.1	
近畿地方	18 100.0	15 83.3	2 11.1	2 100.0	1 50.0	1 50.0	
その他	26 100.0	21 80.8	4 15.4	4 100.0	2 50.0	2 50.0	
全女子大学	77 100.0	61 79.2	16 20.8	9 56.3	5 31.3	4 25.0	

※ 1) 宗教系大学の%は、それぞれのカテゴリの女子大学数を分母とした比率

※ 2) カソリックとプロテスタントは、宗教系大学の内数

出典：文教協会（2013）『全国大学一覧 平成 25 年度』

性学長は、全てクリスチャンの女子大学であるのに対し、関東では9大学中6大学は非宗教系の女子大学である。私立といえども女性学長が受け継がれる大学は非常に少数であり、ノートルダム清心女子大学では、戦後全てシスターが学長を務めており、他のカソリック系女子大学でも比較的女性の学長が多い（例えば、聖心女子大学：8名中6名が女性）。津田塾は明治期の創立以来、1970年代の一人を除き、全て女性学長であり、1961年創設の女子栄養大学は、2代目であるが、いずれも女性である。近年、女性学長を置くようになった大学もいくつかあるが、いずれにせよ、女性学長のいる大学はカソリックを中心とするクリスチャン系と特定の限られた大学のみであり、男性学長が圧倒的に多いのが日本の現状である²²⁾。

4. まとめ

ここでは、今日のアメリカにおける女子大学の現状、特徴について、統計的データを中心に整理し、概観してきたわけである。その結果を簡単にまとめると以下ようになる。

歴史的経緯や社会・文化的な側面から女子大学の所在地には地域的な偏りがあり、北東部と南部に多く、西部では少ない。女子大学の創設者については、南部ではプロテスタント系、中西部ではカソリック系が多く、北東部は個人創設のものが比較的多く残っている。大学規模では、女子大学のフルタイム学部生数平均はおおよそ1,100名、最大でも2,500名くらいで、規模の小さい大学が多い。博士課程をもつ大学は少ないものの大学院をもつ大学は34校と全体の8割近くある。大学の入試難易度のランクは、学校数の比率では最も高いランクが全体よりも多いが、学生数からみれば、大学全体の割合とさほど大きな差異はないとみてよいだろう。

カーネギーの大学分類からみると、博士課程までの大学院をもち、ある程度以上の博士号を出す研究大学はなく、学部中心大学が52%と過半数、修士大学が45%とこれに続き、両者でほとんどを占める。学部プログラムでは、教養中心の大学が3分の1を占め、教養と職業の双方が4分の1、教養優位と職業優位が15%ずつあるなど、教養中心ではあるが、職業教育に力を入れる大学もあり、様々である。威信が高く、入学難易度の高い大学ほど、教養優位の傾向が強い。また、そのような大学ほど学費・寮費も高額で、学寮生活をする学生の割合も高くなる。さらに、威信があり入試難易度の高い大学ほど寄付基金の額も桁違いに大きくなり、この基金によって有利な学生獲得条件を整えている。

授業カリキュラムやプログラムにおいて、女子大学では様々な試みがなされている。本稿では量的データを中心に見てきたので、女性をエンパワー（empower）する風土の醸成、リーダーシップを発揮するためのプログラムづくり、理科系の能力を伸ばし、まだ女性の進出が少ない理系分野へと誘おうとする試みなど、質的な側面については取り上げて

いない。質的な取り組みについては別稿にて述べる予定であるが、ここで取り上げた女性教員や女性学長の比率の多さなどは、そうした女性中心の教育、ロールモデルの提示といった女子大学独自の方針にかかわってくる。特に学長の女性比率は9割を超えており、かなり意図的に女性学長を据え、リーダーシップを発揮する女性のロールモデルとしている。日本の女子大学の現実とは大きなギャップがある。

おわりに

ここで概観してきたのは、女子大学を現在の一時点で切り取った際のプロフィールに過ぎない。その底流には、なかなか抗しがたい深い流れがあり、共学化や他大学との合併の動きが続いている。例えば、Pine Manor College (MA) を取り上げた、インターネットサイト Inside Higher Ed の記事 (Aug./01/2013) には、10年で10の女子大学が男性の受け入れを始めており、2013年のWilson College (PA) に続いて、2014年からPine Manorも共学化するという内容である²³⁾。これによると、Pine Manorは学生集めで困難に陥り、2011年11月のNew England Association of Schools and Colleges Commission on Institutes of Higher Education (ニューイングランド学校大学協会；アクレディテーション機関) から、在籍者数と財務の問題を指摘され、2年間の認定保留 (Probation) を言い渡された²⁴⁾。これを受けてPine Manorの理事会は、共学化を学校大学協会へ申請し、2014年1月に認可が下されたのである。学生や同窓生は反対しても、経営の観点から理事会が共学化へ舵を切るという現実には、確実に継続している。1990年、Mills College (CA) では理事会が決定した共学化を反対運動によって阻止し、そのニュースは大きく扱われたが、それは極めて例外的なものであったことが分かる。

さらなる最新のデータ収集に加え、今後は、以下のようなことを構想している。1) 19世紀から今日に至る女子大学の変遷をまとめる。量的把握を中心としながらも、歴史的・社会的要因に目を配りながら変遷を検討する。2) 共学化した元女子大学の量的データを加え、共学化した大学とsingle-sexとして継続できた女子大学の差異やその要因を検討する。3) アメリカでのインタビュー調査や各女子大学の独自のプログラムやカリキュラム、HPの分析など、質的なデータを加える。最終的には、日本の女子大学との比較、その存立意義の再検討を構想している。

注

- 1) この他、Irene Harwarthら(1997)は1976年と1993年の女子大学を比較して、1993年時点で61校の4年制大学を確認し、それらの校名を挙げている。Studer-Ellis(1996)の博士論文では、1990年時点での4年制女子大学は65校だとしているが、そ

の具体的な校名は示されていない。日本と異なり、アメリカにおける女子大学の定義は難しい。本文で述べているように、少ないながら男子学生を入学させている女子大学は多く、その大学が“女子大学”であるとの自己規定をしているかどうかが最も重要な基準となる。州立大学で Women's College (University) としているところもあるが、公立の場合男性の入学を拒むことはできず、女子大学とはカウントされない。

2) ここでの地域区分は、国勢調査局によるもので、4つに分割されている。

- ・「中西部 (MW)」：カンザス、ネブラスカ、サウスダコタ、ノースダコタ以東で、ミズーリ、イリノイ、インディアナ、オハイオ以北の 12 州
- ・「北東部 (NE)」：ペンシルバニア、ニュージャージー以北の最も古い歴史を持つ 9 州
- ・「南部 (S)」：テキサス、オクラホマ以東で、アーカンソー、ケンタッキー、ウエストバージニア、メリーランド以南の 16 州
- ・「西部 (W)」：上記以外の、ロッキー山脈以西の 13 州



図 1 地域区分

<http://www.census.gov/geo/maps-data/maps/pdfs/reference/us_regdiv.pdf>
(Feb./02/2014)

3) 例えば、坂本 1999, 10 頁、ホーン川嶋 2004, 9-10 頁、あるいは Wolf-Wendel 2002, 61-62 頁など。

4) Wesleyan College HP, <<http://www.wesleyancollege.edu/about/history.cfm>>
(Feb./02/2014)

また、1850 年代までに大学として認可された 39 女子大学のうち、30 校が南部にあったとの指摘もあり (Fox-Genovese, E. 1997)、男女別学志向が強かった南部で先に女性だけの大学が認可されていったようだ。

5) 坂本 (1999) は、宗教団体の大学運営への影響について、現在、設立時の宗派の影響

がどれだけあるかを表わすことは難しいとしながらも区分をして示している、参照としていただきたい（67-68 頁）。一般的傾向として、カソリックの大学は、その傾向が強いようである。

- 6) 北東部の伝統があり、男子並の高いレベルの教育を行ったとされる 7 つの女子大学が “Seven Sisters” と称されていた。即ち、Barnard (NY)、Bryn Mawr (PA)、Mount Holyoke (MA)、Smith (MA)、Radcliffe (MA)、Vassar (NY)、Wellesley (MA) の 7 大学である。このうち、Vassar は共学化し、Radcliffe は Harvard に吸収合併されたので、5 校が女子大学として残っており、本稿では、これらの威信ある 5 大学を便宜上 “Five Sisters” と呼ぶ。しかし、この言葉は他の意味で使用されることもあり、アメリカでこの 5 校がこのように呼ばれることは極めて稀なようである。
- 7) 例えば Brenau では、“…in the late 1960s, Brenau began offering evening and weekend classes to both men and women through what was known as The Evening And Weekend College.” とあり、共学化が急速に進んだ 1960 年代から終わりごろから、男女を対象とした、夜間や週末のプログラムを展開し始めている <<http://www.brenau.edu/about/facts/>> (Feb./05/2014)。
- 8) Chatham University HP<<http://www.chatham.edu/academics/programs/graduate/>> (Mar./01/2014)
- 9) Midway College HP<<http://www.midway.edu/academic-programs/pre-professional>> (Mar./01/2014)
- 10) 武庫川女子大学 HP「財務書類等の公開」 <<http://www.mukogawa-u.ac.jp/gakuin/intro/pdf/2013shuushi-a.pdf>> (Feb./24/2014)
- 11) 2011-12 年の寄付基金のランキングでは、Harvard や U. of California など、研究大学を含むあらゆるアメリカとカナダの大学が掲載されている。1 位は Harvard が他を引き離し、\$ 30billion でトップ、Yale が \$ 19billion で、研究大学が続く。リベラルアーツ大学では、Williams が \$ 1.9bil. で 35 位、Amherst が 42 位となっている。女子大学では、Wellesley は \$ 1.44bil. で 49 位、Smith は \$ 1.41bil. で 50 位となり、他を大きく引き離してトップ 2。この 2 校は、UCLA Foundation や Georgetown といった総合研究大学よりも多い基金をもつ。さらに、Bryn Mawr—115 位、Mount Holyoke—132 位などが続き、威信が高く、伝統のある大学が多く寄付を集め、豊かな基金をもっている。
- 12) 例えば、U.S. News 社が提供する大学ランキング (Best College) はその一つであるが、それは入学難易度に限定されず、経済援助やカリキュラム、卒業率、ピア・アセスメントなどを含んだスコアが用いられる。さらに、“National Universities”、“National Liberal Arts Colleges”、“Regional Universities”、“Regional Colleges” などに細分され

ており、それぞれの分野で取り上げられる大学も 200 校以下で、ランキングに載らない女子大学もあって、全体での比較が困難になる。

この U. S. News 社が提供する” National Liberal & Arts College Rankings 2014” は、全国規模のリベラルアーツカレッジを対象とするもので（よって、Harvard や Yale は含まれていない）、これにランク付けられている 180 校の中で、女子大学の位置づけを確認してみると、14 校がランクインしており、それぞれ以下のような順位となる。

Wellesley—7 位、Smith—20 位、Scripps—25 位、Barnard—32 位、
Bryn Mawr—30 位、Mount Holyoke—38 位、Spelman—65 位、St. Mary’s—76 位、
Agnes Scott—89 位、St. Benedict—94 位、Hollins—110 位、Sweet Briar—110 位、
Salem—156 位、Wesleyan—161 位。

このように、50 位以内 6 校、100 位以内に 10 校がランクインしている（1 位は Williams College、共学化した Vassar は 13 位）。この他、“Regional Colleges” のカテゴリーもあり、そこにランキングされている女子大学も多い。

出典<<http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges/rankings/national-liberal-arts-colleges>> (Mar./01/2014)

13) 坂本は、1970 年代に出された女子大学の自己点検報告書を分析した Eileen M. Murphy (1977) の研究を引用し、そこで語られた女子大学として存続意義として、①教育環境、②役割モデル、③人材の生産性、の三点を挙げている (1999、26 頁)。Tidball, M.E. の諸業績、あるいは Miller-Bernal (2000、221-224 頁) など、多くの文献において、役割モデルとして、あるいは学びやすい支持的な環境として、女子大学における女性教員の役割は重視されている。

14) 女性のための学校、女性として身につけるべきことを学ぶ学校 (Seminary) から出発した女子大学では、女性教員の比率は高かった。坂本によれば、4 年制女子大学における女性教員比率は、1900 年—71.4%、1910 年—75.2%、1920 年—74.5%、1930 年—72.4% であった (2008、93 頁)。それが、WWⅡ 後には変化も見られ、1960 年以前において、多くの女子大学はステイタスを上げるために男性教授を意識的に採用するなどしており、この頃は様々な面で男性の世界との指摘もある (ホーン川嶋 2004、215 頁)。

15) この他、女性が大学においてリーダーシップを執っている指標として、NCES (National Center for Educational Statistics) には “Executive, administrative, and managerial (経営管理部門)” スタッフ (2 年制を含む全大学) の項目がある。2011 年 Fall の統計からフルタイムをみると、男性 10.7 万、女性 12.4 万であり、女性が 53.6% で過半数となっている (NCES 2012, Table 286)。

女子大学連合 (Women’s College Coalition) が 1981 年に出した報告書によると、

1980 年頃の女子大学におけるテニユア女性教員が 51%、学長 71%、理事会メンバー 48%が女性である（坂本 1999、55 頁）。30 年前と比べて、教員、学長ともに女性比率は増加した。

16) Mount Holyoke College HP <<https://www.mtholyoke.edu/archives/history/principals>> (Mar./01/2014)

17) Vassar College HP <<http://vcencyclopedia.vassar.edu/presidents/index.html>> (Mar./03/2014)

18) Bryn Mawr HP <<http://www.brynmawr.edu/president/past/>> (Mar./01/2014)

19) Agnes Scott College HP <http://asccomnet.agnesscott.edu/news/mainevents/storyDetails.aspxChannel=%2FChannels%2FAdmissions%2FAdmissions+Content&WorkflowItemID445778be-6c00-4efc-8fd9-cd17d0262873&e=d3f06e27-d35f-427b-a7bc-ea870a5191cd>;

Stephens College HP <<https://www.stephens.edu/about-stephens/mission-and-values/timeline/>> (Mar./01/2014)

20) 大島（1988, 80 頁）より関連箇所を引用する。

901 条 (a) 合衆国におけるいかなる人も、以下の場合を除いては、その性を理由に、連邦の財務援助を受けている教育プログラムあるいは教育活動への参加を妨げられ、その便益を否定されもしくは差別されてはならない。（その適用除外を、(1)から(9)まで列挙）

(1) 教育機関への入学に関して、本条は職業教育機関、専門教育機関および大学院並びに公立の大学院にのみ適用する。

(5) 入学に関して、本条は、創立以来伝統的継続的に一方の性の学生にのみ入学を認めてきた公立大学教育機関に対して適用しない。…

21) この項で取り上げた日本の女子大学については、各大学 HP (Mar./3/2014) …アドレスは紙面の都合上省略する

22) 日本の女子大学の学生数や大学院の有無などの基礎データについては、データ集を作成した（安東 2005）。2005 年時点で、日本の女子大学の平均学部学生数は、約 2160 名であった。日本の女子大学はパート学生が少ない、大学院の割合が少ない、学費が学部によってかなり異なるなど、カーネギー分類の適用に困難な点があるなど、同一の基準で比較できる項目はあまり多くない。

23) Jaschik, Scott 2013. Another Former Women's College <<http://www.insidehighered.com/news/2013/08/01/pine-manor-college-will-admit-men-all-programs>> (Mar./2/2014)

24) New England Association of Schools and Colleges Commission on Institutes of High-

er Education HP <http://cihe.neasc.org/downloads/Public_Statement_Pine_Manor_College.pdf> (Mar./02/2014)

引用・参考文献

安東由則・藤村真理子・大竹綾子 2005、「女子大学および女子学生に関するデータと解説」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）34号、39-110頁。

Barron's Educational Series. 2012. Barron's Profiles of American Colleges 2013. New York: Barron's Educational Publishing.

Barron's Educational Series. 2010. Barron's Profiles of American Colleges 2011. New York: Barron's Educational Publishing.

文教教会 2013、『全国大学一覧（平成25年度）』文教教会

Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching <<http://classifications.carnegie-foundation.org/>>.Retrieved Feb.2014

Fox-Genovese, E. 1997. Education of Women in the United States South. Journal of Women's History. 9 (1) 203-211.

Harwarth, I., Maline, M. & DeBra, E. 1997, Women's Colleges in the United States: History, Issues And, Challenges U.S.. Washington D.C.: Department of Education National Institute on Postsecondary Education, Libraries, and Lifelong Learning.

ホーン川嶋瑤子 2004、『大学教育とジェンダー：ジェンダーはアメリカの大学をどう変革したか』東信堂

Jaschik, Scott. 2013. Another Former Women's College. in Inside Higher Ed. (August/1,/ 2013) <<http://www.insidehighered.com/news/2013/08/01/pine-manor-college-will-admit-men-all-programs#ixzz2yf8gSQRK>>

Miller-Bernal, Leslie. 2000. Separate by Degree: Women's Students' Experiences in Single-Sex and Coeducational Colleges. New York: Peter Lang Publishing

文部科学省 2013、『平成25年度 学校基本調査』<<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001051733&cycode=0>> (Feb./20/2014)

武庫川女子大学 HP「財務書類等の公開」<<http://www.mukogawa-u.ac.jp/gakuin/intro/pdf/2013shuushi-a.pdf>> (Mar./01/2014)

村田鈴子 2001、『アメリカ女子高等教育史：その成立と発展』春風社

National Association of College and University Business Officers and Commonfund Institute 2014, U.S. & Canada Institutions Listed by Fiscal Year 2013 Endowment Market Value and Change in Endowment Market Value from FY 2012 to FY2013 <<http://www.nacubo.org/Documents/research/2012NCSEPublicTablesEndowment>

- MarketValuesFinalJanuary232013.pdf> (Feb./05/2014)
- National Center for Education Statistics (NCES) Digest of Education Statistics 2010-2013. <[http://nces.ed.gov/programs/digest/d10 ~ d13/](http://nces.ed.gov/programs/digest/d10~d13/)> (Jan.-Feb./2014)
- New England Association of Schools and Colleges Commission on Institutes of Higher Education HP <[http://cihe.neasc.org/downloads/Public_Statement_Pine_Manor College.pdf](http://cihe.neasc.org/downloads/Public_Statement_Pine_Manor_College.pdf)> (Mar./02/2014)
- 大島佳代子 1988、「教育における性差別：アメリカ合衆国における男女別学制の合憲性」『北大法学論集』38(4)、71-175.
- Peterson's Publishing 2011. Four-Year Colleges 2012. NJ: Peterson's Publishing.
- 坂本辰朗 1999、『アメリカの女性大学：危機の構造』東進堂
- 坂本辰朗 2008、「戦間期のアメリカ合衆国における女性大学教員：1920年代における状況」『大学論集』（広島大学高等教育研究開発センター）、39、89-107 頁
- University of Denver-Colorado Women's College 2013. Benchmarking Women's Leadership in the United States. <<http://www.womenscollege.du.edu/media/documents/BenchmarkingWomensLeadershipintheUS.pdf>> (Jan./10/2014)
- US Census Bureau HP <http://www.census.gov/geo/maps-data/maps/pdfs/reference/us_regdiv.pdf> (Feb./01/2014)
- U.S. News Best College: National Liberal Arts College Rankings 2014 <<http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges/rankings/national-liberal-arts-colleges>> (Jan./10/2014)
- Vassar College HP <<http://vcencyclopedia.vassar.edu/presidents/index.html>> (Mar./03/2014)
- Wolf-Wendel, Lisa E. 2002. "Women's Colleges" Martinez-Aleman, A. M. & Renn, K.A. (eds.) Women in Higher Education, CA: ABC Clio, pp.61-67.
- "Women Presidents: Now 26.4% but Still Underrepresented." In Women in Higher Education (U. of North Carolina Wilmington). <<https://www.wihe.com/printBlog.jsp?id=36400>> (Feb./28/2014) (元データ：the American Council on Education 2012. The American College President - 2012)

その他

アメリカの女子大学の HP アドレスは、表 1 に掲載しているので、割愛する。

Trends of Women's Colleges & Universities in the U.S. over the
Last 25 Years : A Comparison with Coed Colleges & Universities

過去四半世紀におけるアメリカ女子大学の動向： 共学大学との比較

ANDO, Yoshinori

安 東 由 則*

Content
Abstract
1. Introduction
2. The Outline of Women's Colleges & Universities in the U.S.
2-1. Current Women's Colleges & Universities
2-2. A Change in the Number of Women's Colleges by Year
2-3. Enrollments of Women's Colleges
3. The Outline of Ex-Women's Colleges in the U.S.
4. A Comparative Analysis of Women's Colleges with Coed-Colleges
4-1. Changes and the rate of applied, accepted, and enrolled students
4-2. Enrollment
4-3. Tuitions and Room & Board Fees
5. Findings
Notes
References
Appendix

*Professor of Department of Education, School of Letters & Researcher of Institute
for Education at Mukogawa Women's University

Abstract

After the period when Vassar College decided to open its doors to male students in 1968, and Title IX of the Higher Education Act Amendments were enacted in 1972, the number of women's colleges started to decrease rapidly. According to Chamberlain's study (1988), the number of women's colleges including 2-year colleges dropped from 255 in 1970 to 117 in 1980. Women's colleges declined by more than half in just 10 years. Studer-Ellis (1996) indicated the number of women's colleges which changed to coed colleges was 21 in 1969, 16 in 1970, and 16 in 1971. Even in recent years, they have continued to decrease with many becoming coed or merging with a coed college.

Under such circumstances surrounding women's colleges, not a few studies including Tidball's (Tidball, 1980, 1999 etc.) have been conducted to examine the advantages of women-only colleges. These studies reported that female students attending women's colleges showed intellectual development (such as intellectual self-confidence, critical thinking, and solving and so on), gained doctorates after graduation, became high achievers, and attained successful careers. Moreover, those showed that women's colleges provided more positive experiences for students to take leadership roles and interact with faculty than did coed colleges (Astin, 1993 ; Kim, 2001, 2002 ; Kinzie, 2007 ; Miller-Bernal, 2000, 2006 ; Riordan, 1994 ; Wolf-Wendel, 1998 etc.)¹⁾. In particular, the Hardwick-Day comparative research survey, commissioned by the Women's College Coalition, was conducted recently. The survey, geared toward alumnae from 1970 through 1997, showed women's colleges had, in the long-term, a more positive impact on graduates, than did coed liberal arts colleges or flagship public universities (the Hardwick-Day, 2008). In addition, there is NSSE's nation-wide survey, which measures college-student's engagement in educational practices (level of academic challenge, active & collaborative learning, student-faculty interaction, enriching educational experiences, and supportive campus environment) at each institution. The results have often been used as comparative data to indicate the advantages or superiorities of a particular women's college (for example, see Sweet Briar College's website).

Nevertheless, despite such research results, the number of women's colleges has been decreasing. It seems there are few studies which chronologically analyzed the trend of women's colleges in the U.S. except for Chamberlain et al (1988), Studer-Ellis (1996), and Harwarth et al. (1997, 1999), although many researches, dealing with the influences

on female students through the education in women's colleges, have been accumulated. According to Chamberlain, the number of women's colleges including 2-year colleges was 233 in 1960, and 90 in 1986, and 72 4-year women's colleges were counted in 1986. Studer-Ellis showed that 4-year women's colleges decreased from 176 in 1960 to 65 in 1990 over these 30 years. Meanwhile, Harwarth, et al comparatively analyzed women's colleges in detail between 1976 and 1993, and showed there were 61 4-year women's colleges in 1993.

However, after Harwarth's study, there is no quantitative study which shows the trend or status quo of women's colleges in the U.S.. This study fills the gap.

1. Introduction

Purpose

This report aims to concisely show the current situation of women's colleges in the U.S. and the change over the last 25 years through numerical data of women's colleges. In particular, although full-time enrollment was mainly geared toward to analyze in previous studies, part-time students and graduate students are also objectives of this study's analysis. In addition, to make clear the special features of women's colleges, some data on small coeducational colleges will also be cited.

A starting point of this study is to examine the significance of women's colleges of today from a comparative viewpoint between the U.S. and Japan. For the sake of achieving this aim, not only the quantitative but also the qualitative understanding of women's colleges is required.

Data

The following statistical data are used in this study : The main data are *Barron's Profiles of American Colleges* (Barron's Educational Series, 1988, 1999, 2009, each year version), *Women's Colleges in the United States* (Harwarth, I. ed., 1997), and *Digest of Education Statistics* (U.S. Department of Education, 2009-2012).

Definition of Women's College or University

Prior to reporting the results of the analysis, a definition of women's colleges in the U.S. is provided.

First, public women's colleges (i.e. Texas Woman's University, Mississippi University

for Women etc, which are members of the Women's College Coalition) are excluded. Since 1982 when the Supreme Court ordered Mississippi University for Women to admit male students, all of public institutions that are called "women's colleges" in actual fact admit both males and females.

Secondly, 2-year colleges are also removed. In a famous report (edited by Harwarth) published in 1997, not only 4-year women's colleges, but also 2-year ones were included. But as differences between 4-year and 2-year colleges are considerable, women's colleges in this study are confined to 4-year colleges. Thus, private 4-year women's colleges only are analyzed.

These decisions lead to a definition of women's colleges as follows. A women's college is a college that identifies itself as a women's college and formally doesn't state that it is a coeducational college. Since there are quite a few women's colleges that give male students conditional permissions to enter as full-time students, it is impossible to define women's colleges only judging from whether there are full-time male students. For example, Ursuline College in Ohio is not a member of the Women's College Coalition, and is treated as a coeducational college in some college guidebooks. Moreover, male students have been accepted there since the 1970s. According to its online home page, 9% of all full-time students are male today. But Ursuline College identifies itself as a college focusing on the learning needs of women, and thus far doesn't formally identify itself as a coeducational college. Thus this college is defined as a women's college in this study.

Composition

A composition of this report is the following :

- 1) The outline of women's colleges in the U.S. : Current women's colleges, a change of number of women's colleges, and their enrollments.
- 2) The outline of ex-women's colleges which became coeducational, merged with coeducational colleges, or were closed over these last 25 years.
- 3) A comparative analysis of women's colleges with private coeducational colleges.

2. The Outline of Women's Colleges & Universities in the U.S.

2-1. Current Women's Colleges & Universities

Table 1 shows the names of women's colleges or universities (hereinafter referred to

as WCU) classified by geographic region. As of 2010, there are 47 4-year women's colleges & universities in the U.S.. Some of their features are described in Table 2.

Geographically they are unevenly distributed as follows. There are 18 colleges in the North East, 17 in the South, 9 in the Mid West, and only 3 in the West. Many of them are gathered in the East and the South. As for full-time enrollments, colleges holding over 2,000 full-time students are 6, or 13% of the whole. About 70% of WCU are small colleges with enrollments of below 1,000 students. From a viewpoint of college-ranking (5-scale ranking from "most competitive" to "less competitive" and excluding "non-competitive" which was listed in *Barron's Profiles of American Colleges 2009*), the distribution is the same as all of the ranked colleges. About half of the women's colleges are ranked in the "competitive" category, or in the fourth group.

Table 1. Women's Colleges & Universities in the U.S. in Fall 2010

district	name of college	state	year of foundation	district	name of college	state	year of foundation
NE	Saint Joseph College	CT	1932	S	Judson College	AL	1838
NE	Bay Path College	MA	1897	S	Trinity Washington University	DC	1897
NE	Mount Holyoke College	MA	1837	S	Agnes Scott College	GA	1889
NE	Pine Manor College	MA	1911	S	Brenau University the Women's College	GA	1878
NE	Simmons College	MA	1899	S	Spelman College	GA	1881
NE	Smith College	MA	1871	S	Wesleyan College	GA	1836
NE	Wellesley College	MA	1870	S	Midway College	KY	1847
NE	College of Saint Elizabeth	NJ	1899	S	College of Notre Dame of Maryland	MD	1896
NE	Georgian Court University	NJ	1908	S	Bennett College for Women	NC	1873
NE	Barnard College/Columbia College	NY	1889	S	Meredith College	NC	1899
NE	The College of New Rochelle	NY	1904	S	Peace College	NC	1857
NE	Russell Sage College of The Sage Colleges	NY	1916	S	Salem College	NC	1772
NE	Bryn Mawr College	PA	1885	S	Columbia College	SC	1854
NE	Carlow University	PA	1929	S	Converse College	SC	1889
NE	Cedar Crest College	PA	1867	S	Hollins University	VA	1842
NE	Chatham University	PA	1869	S	Mary Baldwin College	VA	1842
NE	Moore College of Art and Design	PA	1848	S	Sweet Briar College	VA	1901
NE	Wilson College	PA	1869	W	Mills College	CA	1852
MW	Saint Mary-of-the-Woods College	IN	1840	W	Mount St. Mary's College	CA	1925
MW	Saint Mary's College	IN	1844	W	Scripps College	CA	1926
MW	College of Saint Benedict	MN	1913				
MW	St. Catherine University	MN	1905				
MW	Stephens College	MO	1833				
MW	College of Saint Mary	NE	1923				
MW	Ursuline College	OH	1871				
MW	Alverno College	WI	1887				
MW	Mount Mary College	WI	1913				

5 of "Seven Sisters"

regarded as "Women's College" in this report

Table 2. Some Features of Women's Colleges & Universities

Location	NE	S	MW	W	total	
number	18	17	9	3	47	
ratio (%)	38.3	36.2	19.1	6.4	100.0	
Enrollment * 1	below 499	500-999	1000-1499	1500-1999	over 2000	total
number * 2	6	25 (26)	4	4	6 (7)	47 #
ratio (%)	12.8	57.4	8.5	8.5	14.9	100.0
Ranking	most compe	highly compe	very compe	competitive	less compe	total
number	4	3	10	21	7	41
ratio (%)	9.8	7.3	24.4	51.2	17.1	100.0
Whole (Barron's)	82	109	277	671	199	1338
ratio (%)	6.1	8.1	20.7	50.1	14.9	100.0

* 1 Enrollment=full-time enrollment

* 2 There are no descriptions about enrollments of Wellesley College and Peace College

As for Wellesley, retrieved from *Complete Book of Colleges 2010* (Princeton Review), 2009

As for Peace, adopted an approximate number from the Internet Home Page

Including Wellesley College and Peace College

2-2. A Change in the Number of Women's Colleges & Universities by Year

Figure 1 indicates the change in the number of WCU from 1985 to 2010. The number of WCU declined from 75 to 47 by 28, or about 44% over the last 26 years. In the late 1980s, the number of WCU dropped rapidly. This was supposedly related to the decline in population of late-teen children closely. Also in the 10 years from 1996 to 2005, the number of WCU gradually decreased almost every year.

In Figure 2, changes in the number of 4-year institutions, private colleges, and WCU

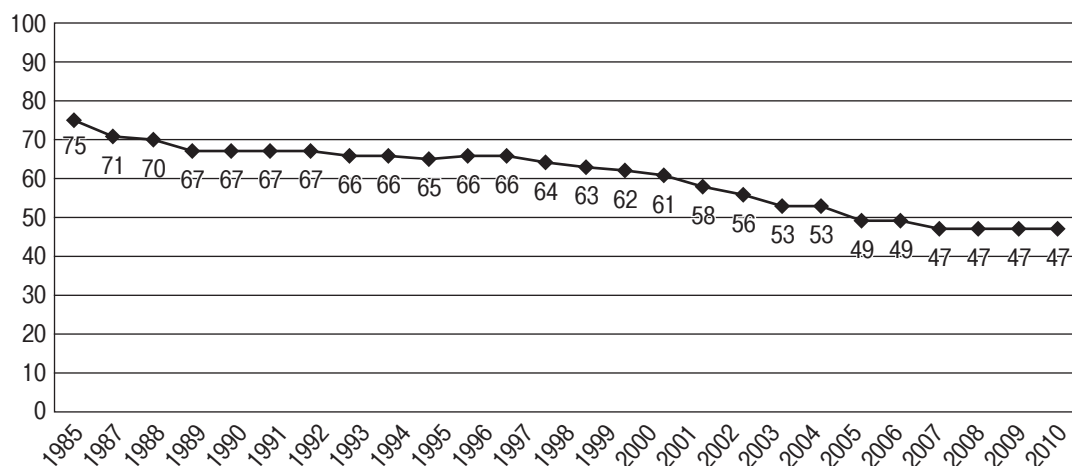


Figure 1. A Change of Women's Colleges & Universities (WCU) Number

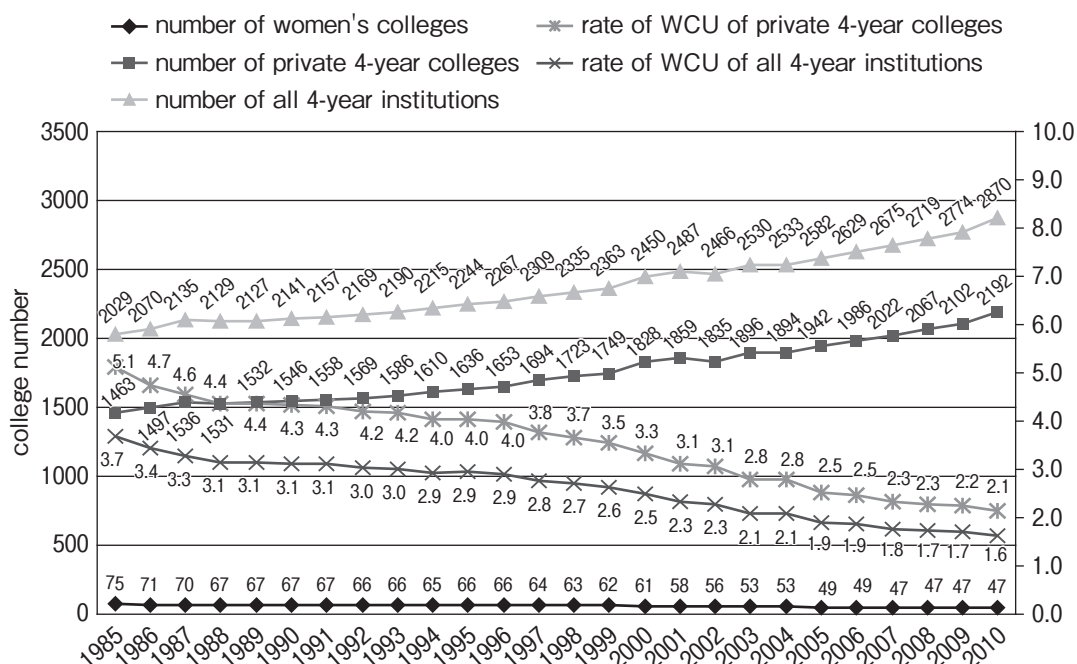


Figure 2. A Change of 4-year Colleges Number and Ratio of WCU Students in Private College Female Students

are described chronologically²⁾. Since 4-year colleges nationwide continued to increase every year, the number of 4-year institutions rose from 2,029 in 1985 to 2,870 in 2010. The increase of 841 colleges is a 41% increase since 1985. The number of private 4-year colleges also increased from 1,463 to 2,192 or by 729, a 50% increase from 1985. Meanwhile WCU continued to decrease gradually. Thus, the ratio of WCU in private colleges naturally went down from 5.1% in 1985 to 2.1% in 2010 ; the ratio of WCU became less than half of that in 1985.

2-3. Enrollments of Women's Colleges & Universities

Turning eyes to full-time female enrollments in colleges (Table 3), the ratio of full-time female students in all institutions constantly increased from 51.3% in 1993, and rose up to 55.4% in 2007. Incidentally the ratio in 1976 was 44.4%. Now, the female enrollment ratio is more than that of males. In contrast, the ratio of full-time female students of WCU to those of all institutions decreased from 1.88% in 1993 to 1.04% in 2007. It is down by nearly half in 14 years. Among female students of private colleges, the ratio of female to WCU female students dropped from 5.67% to 2.57% between

Table 3. Number and the Ratio of Female Students in 4 -year Colleges & Universities

		4-year (full+part)	4-year (full)	female rate (%) (full+part)	female rate (%) (full)
1993	No. of WCU Female Students (Private)	92,792	58,807	—	—
	No. of Female St. (Private Colleges & Univ.)	1,545,593	1,037,389	53.52	51.60
	Total No. of Male & Female (Private Colleges)	2,888,031	2,010,366	—	—
	No. of Female St. (Public+Private)	4,657,534	3,122,034	53.29	51.31
	Total No. of Male & Female (Public&Private)	8,739,791	6,084,421	—	—
2007	No. of WCU Female Students.(Private Colleges)	60,222	49,158	—	—
	No. of Female Students. (Private Colleges)	2,608,474	1,910,839	58.44	62.59
	Total No. of Male & Female (Private Colleges.)	4,463,537	3,052,899	—	—
	No. of Female Students.(Public+Private)	6,584,855	4,737,963	56.62	55.24
	Total No. of Male & Female (Public&Private)	11,630,198	8,577,299	—	—

		WCU Students. (Private)	
		full+part (%)	full (%)
1993	Ratio of WCU St. to All Priv. Col. Female St.(%)	6.00	5.67
	Ratio of WCU St. to All Priv. College. St.(%)	3.21	2.93
	Ratio of WCU St. to All Female St.(%)	1.99	1.88
	Ratio of WCU St. to All St. (%)	1.06	0.97
2007	Ratio of WCU St. to All Priv. Col. Female St.(%)	2.31	2.57
	Ratio of WCU St. to All Priv. College. St.(%)	1.35	1.61
	Ratio of WCU St. to All Female St.(%)	0.91	1.04
	Ratio of WCU St. to All St. (%)	0.52	0.57

St. : Students, Col. : College

1996 and 2007³⁾.

The average enrollment in the surviving WCU has increased slightly (Table 4). The average female enrollment which was 895 in 1976, increased to 905 in 1987, 966 in 1997, and reached 1028 in 2007. Compared with the average enrollment of 1976, that of 2007 increased by over 130. Table 5 also shows that WCU with over 2000 in enrollment increased from 2 in 1976 to 6 in 2007, and small-scale colleges with 499 or fewer in enrollment decreased from 11 to 6 during the same period. Meanwhile, colleges with between 500 and 999 in enrollment were consistently most frequent. As of 2007, colleges of this scale occupied 55% of the whole. Since the average enrollment of private 4-year colleges (including for-profit colleges) in 2007 was 2207.5 (enrollment 4,463,537 ; colleges 2,022. cited from *Digest of Education Statistics* 2009), the average enrollment of WCU is less than half of it.

Table 6 indicates each ratio of each full-time and part-time students for each year (1987, 1997, 2007) to each full-time and part-time students in 1976. Although the average ratio of full-time students in 1988 was almost even (1.009) with that of 1976, by 2007 it had risen up to 1.300. But looking at the average of the sum total, it was

below 1.0 in 1988, and only 1.132 even in 2007. The increase was small. As for part-time students, the average of each college ratio looked high within the range from 2.5 to 3.3, however, the averages of the sum total were low within the range from 1.073 to 1.265. Very high ratios of a few colleges simply elevated the average ratio.

Table 4. A Change of Average Full-time Students in Women's Colleges & Universities

	1976			1987			1997			2007		
	female	male	total	female	male	total	female	male	total	female	male	total
average	895.8	17.8	913.6	905.0	3.8	908.8	966.6	8.8	975.4	1028.2	11.2	1039.3
max	2840	286	2860	2622	35	2622	2567	111	2568	2569	85	2569
min	243	0	243	196	0	200	250	0	251	238	0	241

Table 5. Number of Women's Colleges by Enrollment Scale in Each Year

Scale of full-time enrollment	1976		1987		1997		2007	
	no. of colleges	ratio(%)	no. of colleges	ratio(%)	no. of colleges	ratio(%)	no. of colleges	ratio(%)
above 2000	2	4.3	3	6.8	3	6.8	6	13.3
1500-1999	8	17.0	6	13.6	5	11.4	4	8.9
1000-1499	4	8.5	3	6.8	8	18.2	4	8.9
500-999	22	46.8	22	50.0	21	47.7	25	55.6
below 499	11	23.4	10	22.7	7	15.9	6	13.3
total	47	100.0	44	100.0	44	100.0	45	100.0

Table 6. Rate of Full-time, Part-time, and Total Students Compared to Each Number in 1976

	Full-time Students			Part-time Students			Total		
	87/76	97/76	07/76	87/76	97/76	07/76	87/76	97/76	07/76
average of each college rate	1.009	1.126	1.300	2.561	3.284	3.300	1.169	1.275	1.402
average of sum total *	0.956	1.022	1.132	1.170	1.265	1.073	1.001	1.074	1.120
no. of colleges: rate>1.0	21	26	33	23	25	25	27	28	31
no. of colleges: rate <1.0	23	18	12	18	18	20	17	16	14

* As for this column, only data of colleges & Universities which had data of each year were used.

Sum total of each college enrollment in 1987, 1997, 2007 was divided by sum total of each college enrollment in 1976.

3. The Outline of Ex-Women's Colleges in the U.S.

As mentioned above, 36 WCU have disappeared since 1985. Table 7 shows the names of the ex-WCU and some of their features. 27 out of the 36 colleges (or 75%) became coeducational colleges by themselves. Another five merged with coeducational colleges (Fordham Univ., George Washington Univ., Hartford Univ., Loyola Univ., and Mercer

Univ.), and the remaining four closed. As for their locations, 18 WCU out of 38 (or 53%) in the North East, 8 out of 17 (47%) in the Mid West, and 8 out of 25 (32%) in the South disappeared. However, most of them survive as coed-colleges. It is remarkable that more than half of the WCU in the NE disappeared.

Table 7. Women's Colleges & Univ. which Became Coed, Merged, or Closed since 1985

district	name of college	state	year of coed,		district	name of college	state	year of coed,	
			merged,	closed				merged,	closed
NE	Albertus Magnus College	CT	1985	coed	MW	Lake Erie College	OH	1985	coed
NE	Caldwell College	NJ	1986	coed	MW	College of Mount St. Joseph	OH	1986	coed
NE	Felician College	NJ	1986	coed	MW	De Lourdes College	IL	1987	closed
NE	Wheaton College	MA	1987	coed	MW	Univ. of Saint Mary	KS	1988	coed
NE	Centenary College	NJ	1988	coed	MW	College of St.Teresa	MN	1989	closed
NE	Colby-Sawyer College	NH	1989	coed	MW	Mundelein College → Loyola Univ	IL	1991	merged
NE	Endicott College	MA	1994	coed	MW	William Woods University	MO	1997	coed
NE	Lasell College	MA	1997	coed	MW	Notre Dame College	OH	2001	coed
NE	Mount Sacred Heart College	CT	1997	closed	S	Goucher College	MD	1986	coed
NE	Elms College	MA	1998	coed	S	Marymount University	VA	1986	coed
NE	Trinity College of Vermont	VT	2000	closed	S	Tift College → Mercer Univ.	GA	1986	merged
NE	Emmanuel College	MA	2001	coed	S	Mount Vernon → GWU	DC	1999	merged
NE	Rosemont	PA	2001	coed	S	Hood College	MD	2003	coed
NE	Seton Hill College	PA	2002	coed	S	Blue Mountain College	MS	2005	coed
NE	Marymount College → Fordham	NY	2002	merged	S	Randolph-Macon Woman's College	VA	2007	coed
NE	Hartford College for Women	CT	2003	merged					
NE	Chestnut Hill College	PA	2003	coed					
NE	Lesley University	MA	2005	coed					
NE	Wells College	NY	2005	coed					
NE	Immaculata Univ. College	PA	2005	coed					
NE	Regis College	MA	2007	coed					

closed

merged

4. A Comparative Analysis of Women's Colleges with Coed-Colleges

To make clear the features of WCU, WCU were analyzed by comparing them with coeducational 4-year colleges.

Coeducational colleges used in this study were chosen according to the following standards to enable a reasonable comparison with WCU.

- 1) Only private 4-year colleges are targeted since all current women's colleges are private.
- 2) Full-time enrollment of each college is less than about 3,000 since enrollments of all WCU are under 3,000. Relatively small-scale colleges are chosen.
- 3) Mainly liberal arts colleges are chosen, but some master's colleges and profession-

oriented colleges are included. National Universities like Harvard, or Yale are removed.

- 4) Colleges are primarily selected from states where WCU are located. The ratio of WCU number in each district (NE, S, MW, W) is also considered.
- 5) Colleges are chosen considering Barron's 5-scale ranking ("Most Competitive" ; Rank 1, "Highly Competitive" ; Rank 2, "Very Competitive" ; Rank 3, "Competitive" ; Rank 4, "Less Competitive" ; Rank 5). Colleges in "Non competitive" and "Special" rankings are removed.
- 6) Colleges which have full descriptions including numbers of applied, accepted, and enrollment in each Barron's data book are selected.

Using these standards, 66 coeducational colleges were selected for the comparative study. Table 8 shows a ratio of selected coeducational colleges and WCU by locations and Barron's rankings. Samples were abstracted considering that the number in each category was more than 10. Thus the ratio in the West became higher than that of WCU. As for the ranking, colleges are sorted by the ranking of "*Barron's Profiles of American Colleges 2009*." The ratio of "Competitive" ranked colleges is fewer than that of the whole. Although the ranking of each college varied a little due to the year, thereafter the categories sorted by this ranking are used.

Table 8. Locations and Rankings of Selected Coeducational Colleges

Location	NE	S	MW	W	total	
Women's	18	17	9	3	47	upper : no. of colleges
Colleges	38.3	36.2	19.1	6.4	100.0	lower : ratio (%)
Coed	28	17	11	10	66	
Colleges	42.4	25.8	16.7	15.2	100.0	
Ranking	most competitive Rank 1	highly competitive Rank 2	very competitive Rank 3	competitive Rank 4	less competitive Rank 5	total
Women's	4	3	10	21	7	45 * 2
Colleges * 1	8.9	6.7	22.2	46.7	15.6	100.0
Coed	10	12	15	18	11	66
Colleges	15.2	18.2	22.7	27.3	16.7	100.0
Barron's Data	82	109	277	671	199	1338
	6.1	8.1	20.7	50.1	14.9	100.0

* 1 Two colleges without ranking are removed.

* 2 Although Moore College is in the category "Special", here it is classified as "Less Competitive"

Separate from the above coeducational colleges, another group was composed of former women's colleges which changed to coeducational colleges, and didn't include

merged colleges.

Finally, another group of “Top National Universities” (TNU) was formed. This group consisted of 15 private research-oriented universities including Harvard, Yale, and Stanford. All the universities are ranked in the top 50 of “Best National Universities” (published by U.S. News & World Report in 2009).

Therefore, four groups, namely WCU, ex-WCU, Coed-colleges (Coed), and Top National Universities (TNU), were prepared.

Data of 1987, 1997, and 2007 described on *Barron's Profiles of American Colleges* (ver. 1988, 1999, 2009) were analyzed. As for the WCU, data of 1976 and 1993 from *Women's Colleges in the United States* (Harwarth, 1997) were added.

4-1. Changes and the rate of applied, accepted, and enrolled students

Competitive rates of “applied/accepted” (AP/AC), “accepted/enrolled” (AC/EN), and “applied/enrolled” (AP/EN) were examined at three points in time (see Table 9-1, 2, 3).

Initially, judging from AP/EN rates, applied numbers increased gradually in all groups. The main reason why applicants increased is supposed that students increased the number of colleges to which they submitted applications. Another reason is that the population of college-age people increased between 1987 and 2007.

AP/AC rates in all groups increased between 1987 and 2007. In particular, the ratio of WCU consistently increased from 1.31 in 1988 to 1.33 in 1997, and 1.65 in 2007. In the cases of ex-WCU and total Coed-colleges, however the rates dropped a little in 1997, though the rates of 2007 exceeded those of 1987 (ex-WCU : from 1.26 to 1.50, Coed : from 1.54 to 1.99). Moreover, there is a tendency that the higher colleges were in the rank, the higher the competitive rate went. However, there were only 3 of 8 groups (including subgroups of Coed) whose AP/AC rate exceeded 2.0 in 2007, that is, “TNU” (6.66), “Rank 1” (3.77), and “Rank 2” (2.17). The fact that the rates of other groups including WCU didn't reach 2.0 means that colleges in those groups didn't have much choice from their applicant pool. In the case of WCU in 2007, about 60% of the applicant students were accepted.

As for the AC/EN rate, that of the “TNU” is a little lower than the others. Since the number of applied colleges per student increased, this rate naturally rose.

Table 9-1. Rate of Applied, Accepted, and Enrolled in 1987

		applied/ accepted	accepted/ enrolled	applied/ enrolled
Women's Colleges	average out of 42(%)	1.306 4(9%)* ¹⁾	2.103 14(33%)* ²⁾	2.809 5(12%)* ³⁾
Ex-Women's Colleges (except merger)	average out of 9(%)	1.263 0	2.064 4(44%)	2.602 0
Coed Colleges (total)	average out of 64(%)	1.547 10(16%)	2.413 14(34%)	3.797 23(36%)
Rank 1	average out of 10(%)	2.663 8(80%)	2.687 1(10%)	6.950 10(100%)
Rank 2	average out of 12(%)	1.566 2(17%)	2.813 0	4.469 7(58%)
Rank 3	average out of 15(%)	1.378 0	2.232 7(47%)	3.074 3(20%)
Rank 4	average out of 16(%)	1.248 0	2.153 3(19%)	2.725 2(13%)
Rank 5	average out of 11(%)	1.179 0	2.351 3(27%)	2.743 1(9%)
Top National Univ. (TNP)	average out of 13(%)	3.828 10(77%)	2.164 5(38%)	7.691 11(85%)

* 1 : no. of colleges : rate>2.0 * 3 : no. of colleges : rate>4.0

* 2 : no. of colleges : rate<2.0

Table 9-2. Rate of AP, AC, and EN in 1997

		applied/ accepted	accepted/ enrolled	applied/ enrolled
average		1.330	2.485	3.359
out of 36(%)		2(6%)	5(14%)	9(25%)
average		1.193	2.543	3.028
out of 15(%)		0	0	0
average		1.484	2.986	4.451
out of 65(%)		9(14%)	6(9%)	30(46%)
average		2.490	3.207	7.670
out of 10(%)		7(70%)	0	10(100%)
average		1.513	3.729	5.611
out of 12(%)		2(17%)	0	11(92%)
average		1.325	2.656	3.542
out of 15(%)		0	3(20%)	4(27%)
average		1.198	2.824	3.363
out of 18(%)		0	2(11%)	3(17%)
average		1.230	2.635	3.218
out of 11(%)		0	1(9%)	2(18%)
average		4.231	2.285	8.575
out of 14(%)		13(93%)	6(43%)	14(100%)

upper : average

lower : no. of colleges & rate (%)

Table 9-3. Rate of AP, AC, and EN in 2007

		applied/ accepted	accepted/ enrolled	applied/ enrolled
Women's Colleges	average out of 29(%)	1.646 6(21%)	3.267 1(3%)	5.447 18(62%)
Ex-Women's Colleges (except merger)	average out of 8(%)	1.502 1(13%)	3.819 2(13%)	5.666 7(88%)
Coed Colleges (total)	average out of 63(%)	1.999 20(32%)	3.270 3(5%)	6.441 42(67%)
Rank 1	average out of 10(%)	3.777 10(100%)	3.008 0	10.786 10(100%)
Rank 2	average out of 12(%)	2.171 5(42%)	3.769 0	8.057 12(100%)
Rank 3	average out of 14(%)	1.662 2(14%)	3.223 1(7%)	5.773 7(50%)
Rank 4	average out of 16(%)	1.394 1(6%)	3.376 0	4.743 9(56%)
Rank 5	average out of 11(%)	1.451 2(18%)	2.876 2(18%)	3.893 4(36%)
Tou National Univ. (TNU)	average out of 15(%)	6.666 15(100%)	1.990 9(60%)	11.86 15(100%)

cf. AP, AC, EN in Table9-2,3 title separately stand for Applied, Accepted, Enrollment

4-2. Enrollment

Table 10 indicates the ratio of full-time students to the undergraduate enrollment. It is found that the ratios of WCU and ex-WCU were lower than the other ratios, particularly lower in 1987 and 1997 when the college-age population dropped (*see Appendix Figure 1). Then the ratio of part-time students increased, and they accounted for 30% in ex-WCU.

Hitherto, full- and part-time students in undergraduate were described, however, graduate school students were not referenced. As presented in Table 11, many WCU founded graduate schools over the last 20 years. In 1987, the number of WCU which had graduate schools was 21, namely 44.7% of the 47 WCU. By 2007, graduate schools were attached in 34 out of the 47 WCU, about three-fourths of the whole.

Table 12 shows the ratio of graduate students to total enrollment. WCU increased the ratio of graduate students gradually, and the ratio to the total without part-time students rose from 0.229 in 1987 to 0.290 in 2007. Confined to the WCU which had data at every point, the ratio in 2007 jumped up to 0.350. This means some WCU expanded their graduate school student enrollment rather than their undergraduate student enrollment.

Table 10. Ratio of Full-time Students in Total (Full-time & Part-time)

		1976	1987	1997	2007
Women's	average	0.822	0.760	0.780	0.796
Colleges	no. of Colleges *	2/47	9/44	5/44	4/45
Ex-Women's	average	0.775	0.727	0.679	0.767
Colleges	no. of Colleges	2/16	1/13	4/16	2/16
Coed Colleges	average	—	0.906	0.914	0.937
(Total)	no. of Colleges	—	1/66	1/66	0/66
Rank 1	average	—	0.966	0.974	0.994
	no. of Colleges	—	0/10	0/10	0/10
Rank 2	average	—	0.982	0.959	0.969
	no. of Colleges	—	0/12	0/12	0/12
Rank 3	average	—	0.891	0.936	0.917
	no. of Colleges	—	0/15	0/15	0/15
Rank 4	average	—	0.876	0.904	0.928
	no. of Colleges	—	1/18	0/18	0/18
Rank 5	average	—	0.838	0.797	0.893
	no. of Colleges	—	0/11	1/11	0/11
Top National	average	—	0.971	0.976	0.988
Universities	no. of Colleges	—	0/14	0/15	0/15

* numerator : no. of colleges of which ratio is under 0.50
denominator: total no. of colleges in each column

Table 11. Graduate Schools in Women's Colleges

	Master	Doctoral	(%)
1987	21 (44.7)	unknown	
1997	30 (63.8)	3 (6.4)	
2007	34 (72.3)	9 (19.1)	Total: 47 colleges

Table 12. Ratio of Graduate School Students in Total Students

		1987	1997	2007 * 1)	1987	1997	2007 * 2)
		grad/full+grad	grad/full+grad	grad/full+grad	grad/all * 4)	grad/all	grad/all
Women's Colleges	average (all)	0.229	0.256	0.290	0.184	0.200	0.237
	average (confined) * 3)	0.229	0.294	0.350	0.184	0.229	0.287
Ex-Women's College (removed merged)	average (all)	0.401	0.329	0.303	0.324	0.246	0.237
	average (confined)	0.250	0.337	0.280	0.173	0.229	0.211
Coed Liberal Arts College (total)	average (all)	0.169	0.151	0.140	0.151	0.135	0.130
	average (confined)	0.161	0.181	0.170	0.147	0.160	0.157
Rank 1	average (all)	0.103	0.121	0.095	0.124	0.134	0.104
	average (confined)	0.103	0.139	0.113	0.124	0.155	0.123
Rank 2	average (all)	0.079	0.105	0.108	0.078	0.103	0.103
	average (confined)	0.079	0.097	0.105	0.078	0.096	0.100
Rank 3	average (all)	0.198	0.177	0.159	0.165	0.160	0.145
	average (confined)	0.166	0.228	0.233	0.146	0.205	0.216
Rank 4	average (all)	0.182	0.121	0.129	0.160	0.108	0.117
	average (confined)	0.182	0.150	0.166	0.160	0.133	0.150
Rank 5	average (all)	0.275	0.215	0.167	0.217	0.181	0.173
	average (confined)	0.275	0.343	0.236	0.217	0.227	0.193
Top National Universities	average (all)	0.431	0.465	0.449	0.423	0.459	0.445
	average (confined)	0.448	0.484	0.480	0.439	0.477	0.477

* 1 denominator is a sum of graduate students, full-time students

* 2 denominator is a sum of graduate students, full-time students, and part-time students

* 3 confined to colleges which had data in every year * 4 all: fulltime+ parttime+graduate

However, except for TNU which kept a high ratio, coed-colleges didn't increase the ratio of graduate students more than the WCU. Even "Rank 5" coed, of which the ratio in 1987 was higher than that of WCU, decreased the ratio from 0.275 in 1987 to 0.167 in 2007 as contrast with WCU. Of course, it must be considered that these colleges were chosen mainly from liberal arts colleges, and the numbers in the sample were not enough to allow conclusions to be made.

4-3. Tuitions and Room & Board Fees

Not only tuitions but also room & board fees (R&B) vary according to college rankings. The higher colleges are in rank, the higher the tuition or R&B goes. For example, an average tuition of "Rank 5" in 2007 is about half of that of "Rank 1" or

TNU. Regarding to WCU, although the average tuition (\$7,567) of WCU in 1987 was located between “Rank 2” (\$9,720) and “Rank 3” (\$6,923), in 2007 it (\$23,496) was between “Rank 3” (\$25,106) and “Rank 4” (\$22,181). The ratio of WCU’s tuition to that of “Rank 2” was 0.81 in 1987 and 0.63 in 2007. While the R&B in WCU was relatively high even now, the tuition of WCU seemed to decline as a whole. The total fee for WCU, which was 76% of “Rank 1” and 85% of “Rank 2” in 1987, is 69% of “Rank 1” and 80% of “Rank 2” in 2007.

Table 13-1. Comparison of Average Tuition

	unit : \$		
	1987	1997	2007
Women's Colleges	7,567	14,159	23,496
Ex-women's Colleges	7,204	14,172	23,278
Coed (total)	7,710	15,366	25,915
Rank 1	10,989	21,204	36,097
Rank 2	9,720	18,993	31,869
Rank 3	6,923	14,703	25,107
Rank 4	6,567	13,510	22,182
Rank 5	5,604	10,044	17,375
Top National U.	12,187	22,033	35,660

Table 13-2. Comparison of Average R & B

	unit : \$		
	1987	1997	2007
Women's Colleges	3,583	5,732	8,570
Ex-women's Colleges	3,581	6,124	9,205
Coed (total)	3,090	5,083	7,863
Rank 1	3,676	5,670	9,118
Rank 2	3,420	5,446	8,343
Rank 3	3,000	4,987	7,748
Rank 4	2,750	4,784	7,335
Rank 5	2,819	4,739	7,220
Top National U.	4,425	6,926	10,278

5. Findings

As mentioned first, this study is in the development stage. With this understanding, some findings are discussed below.

#1 The number of WCU decreased from 85 to 47 by 38, that is, by 45% over the last 26 years. In particular, more than half of the WCU in the North East lost their WCU status.

#2 The average of full-time enrollment of WCU increased little by little. Some WCU steadily increased their enrollment.

#3 Some WCU largely increased part-time students. Compared with the part-time student ratio of all undergraduate students in 1976, the ratio of part-time students increased in 1987 and 1997, however, the ratio tended to decrease in 2007. The ratio of part-time students is higher than those of other groups.

#4 The number of students who applied to WCU increased. It is considered that students increased the number of colleges to apply. As a result, the AP/AC rate rose a little, however, the AC/EN rate increased more than the AP/AC. The average rate of WCU was only 1.64, below 2.0 even in 2007. Below 2.0 in competitive rate, it is hard

for a college to screen or choose students. Meanwhile, the AC/EN rate was 3.26, about double of the AP/AC rate.

#5 Many WCU founded graduate schools in the past 25 years, and now 34 of 47 WCU (three-fourths) have attached graduate schools. In addition, the ratio of graduate students to total students increased gradually. Among groups presented in this study, the ratio of graduate students to the total students in WCU was the second highest behind TNU.

#6 Overall, tuition fees rose threefold over the last 20 years. Average tuition of WCU jumped up from \$7,567 in 1987 to \$23,496 in 2007. Compared with those of coed college groups, the average tuition of WCU was placed between Coed “Rank 2” and “Rank 3” in 1987. However, in 2007 that of WCU is placed between “Rank 3” and “Rank 4”. The ratio of WCU’s tuition to that of Coed “Rank 2” dropped from 0.811 in 1987 to 0.628 in 2007. In comparison with coed colleges, the tuition of WCU relatively fell down over the last 20 years.

Notes

- 1) As showed in Purcell et al (2005, pp.280-285), there are many dissertations written about women’s colleges. Although the foci of those are diverse, qualitative and historical studies predominate. Even in these last several years, several dissertations dealing with women’s colleges have been submitted. For example, Domes (2009) compared two catholic colleges located in the South, which changed from women’s colleges to coed colleges, using internal data. The interest in women’s colleges in the U.S. is not so small. Among many women’s-college-related dissertations, Studer-Ellis’s dissertation written in 1996, “The social transformation of four-year U.S. women’s colleges, 1960-1990”, is one of a few quantitative studies on women’s colleges. According to Studer-Ellis, the number of 4-year women’s colleges decreased from 176 to 65 between 1960 and 1990..
- 2) According to Studer-Ellis (1996), the number of 4-year WCU was 81, 79, 74, 71, 69, 66, 65 every year from 1984 through 1990. Meanwhile, this study shows the number of WCU during the same period is 84, 82, 75, 71, 69, 67, 68 in chronological order. Since the names of WCU weren’t listed in his study, it is impossible to compare WCU in Studer’-Ellis’s study with those in this study. But the difference in numbers of both studies is small. Incidentally, Studer-Ellis’s study counted one public college as WCU.
- 3) In this report, differences between women’s colleges in the U.S. and in Japan are not

discussed closely. However, below Table 14 is put on as a simple indicator to understand the current situation of women's colleges in the U.S.. Table 14 shows the number and rate of Japanese women's colleges and their enrollments in all universities & colleges, and their students. The number of WCU in Japan peaked at 98 in 1998, and today (in 2009) the number has declined to 79 (private 74, national 2, public 3). The rate of WCU in all universities & colleges is 10.2%, the rate in the private sector is 12.4%. As for the rate of enrollment, female students are 40.8% in all students. The rate of WCU students to all female students is 15.7%, and restricted to the private sector, the rate rises up to 19.9%, or one-fifth of all female students in the private sector. Compared with the U.S. rate (1.04%) of WCU full-time students to all female students, and the U.S. rate (2.57%) in private sector (see Table 3), the rates in Japan are significantly high.

Table 14 No. and Rate of Undergraduate Female Students by Institution Types in Japan
As of May 2009

Types of Univ. & Coll.	No. of Univ. Colleges	Total of Students	Total of Female	Total of WCU Female	Rate of Female in Total	Rate of WCU Female in Total	Rate of WCU Female in All Female
National	86(2)	621,800	211,706	4,357	34.05	0.70	2.06
Public	92(3)	136,913	69,190	2,683	50.54	1.96	3.88
Private	595(74)	2,078,195	877,494	175,103	42.22	8.43	19.95
Total	773(79)	2,836,908	1,158,390	182,143	40.83	6.42	15.72
() : No. of W.C.U.					%	%	%

Data : Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, *Statistical Abstract 2009*
Asahi Shimbun, 2010. *Daigaku Rankingu 2011 (College Ranking 2011 in English)*.

References

- Asahi Shimbun, 2010. *Daigaku Rankingu (College Ranking) 2011*. Tokyo : Asahi Shimbun.
- Astin, A.W. 1993. *What matters in colleges : Four critical years revisited*. San Francisco : Jossey-Bass.
- Chamberlain, M.K. (ed.), 1988. *Women in academe : Progress and prospects*, New York : Russell Sage.
- The College Division of Barron's Educational Series. 1988. *Barron's profiles of american colleges 1988, (16th edition)*, New York : Barron's Educational Series.

- The College Division of Barron's Educational Series. 1998. *Barron's Profiles of American Colleges 1999*, (23rd edition), New York : Barron's Educational Series.
- The College Division of Barron's Educational Series. 2008. *Barron's Profiles of American Colleges 2009* (28th edition), New York : Barron's Educational Series.
- Domes, C.E. 2009. *Understanding Change from Women-only to Coeducation : A case study of two former catholic women's colleges*. Ed. D. dissertation, George Washington University.
- The Hardwick ~ Day Comparative Alumnae Research Study Prepared for the Women's College Coalition. 2008. *What matters in college after college : A comparative alumnae research study*. (as of Sept. 2010, retrieved from Women's College Coalition website ; http://www.womenscolleges.org/files/pdfs/WCC-What_Matters_March08.pdf)
- Harwarth, I. B. (ed.), 1997. *Women's Colleges in the United State : History, issues, and challenge*. Washington, DC : National Institute on Postsecondary Education, Libraries, and Lifelong Learning, Office of Educational Research and Improvement, U. S. Department of Education.
- Harwarth, I. B. (ed.), 1999. *A Closer Look at Women's Colleges*. Washington, DC : National Institute on Postsecondary Education, Libraries, and Lifelong Learning, Office of Educational Research and Improvement, U.S. Department of Education. (Retreived as of May, 2010, from <http://www2.ed.gov/PDFDocs/womenscolleges.pdf>)
- Kim, M. M. 2001. Institutional effectiveness of women-only colleges : Cultivating student's desire to influence social conditions. *The Journal of Higher Education*. 72(3). 287-321.
- Kim, M. M. 2002. Cultivating intellectual development : Comparing women-only college and coeducational colleges for educational effectiveness. *Research in Higher Education*. 43(4), 447-481.
- Kinzie, J., Thomas, D. A., Palmer, M. M., Umbach, D. P. & Kuh, D. G., 2007. Women students at coeducational and women's colleges : How do their experiences compare?. *Journal of College Student Development*, 48(2), 145-165.
- Miller-Bernal, L. 2000. *Separate by degree : Women students' experiences in single-sex and coeducational colleges*, New York : Peter Lang.
- Miller-Bernal, L. & Poulson, L. S. 2006. *Challenged by coeducation : Women's colleges since the 1960s*, Nashville : Vanderbilt University Press.

- Pascarella, E. T. & Terenzini, P. T. 1991. *How college affects students : Findings and insights from 20 years of research*. San Francisco : Jossey-Bass.
- The Princeton Review. 2009, *Complete Book of Colleges* (2010 Edition). New York : Random House.
- Purcell, F. B., Helms, R. M. & Rumbley, L. 2005. *Women's Universities and Colleges : An international handbook*, Rotterdam : Sense Publishers. (co-published with the center for international higher education at Boston College)
- Riordan, C. 1994. The value of attending a women's college : Education, occupation, and benefits. *The Journal of Higher Education*. 65(4), 486-510.
- Studer-Ellis, E. 1996. *The social transformation of four-year U. S. women's colleges, 1960-1990*. Ph. D. dissertation, Duke University.
- Tidball, M. E. 1980. Women's colleges and achievers revisited. *Signs : Journal of Women in Culture and Society*. 5, 504-517.
- Tidball, M. E. et al. 1999. *Taking Women Seriously : Lessons and legacies for educating the majority*. Phoenix, AZ : Orxy Press.
- Tomoda, Y., & Ando, Y. (eds.), 2007. *Report of "Research Study on the Significance of Women's Universities and Colleges in Japan."* Nishinomiya, Japan : Mukogawa Women's University Institute for Education.
- U. S. News & World Report, 2009. *America's Best Colleges* (2010 edition), Washington, DC : U. S. News & World Report.
- Wolf-Wendel, L. E. 1998. Models of excellence : The baccalaureate origins of successful European American women, African American women, and Latinas. *The Journal of Higher Education*. 69(2), 141-186.

#Statistical Data :

- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, *Statistical Abstract 2010*, (http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/main_b8.htm/)
- National Survey of Students Engagement (N. S. S. E.), *The College Student Report*, (<http://www.nsse.iub.edu/>)
- U. S. Department of Education, National Center for Education Statistics, *Digest of Education Statistics 2009-2012*, (<http://nces.ed.gov/quicktables/>)

#Website Materials :

- The Women's College Coalition Website (<http://www.womenscolleges.org/>)

The Websites of Each Women's College and Ex-Women's College. (For example, Sweet Briar College's "NSSE 2010 Benchmark Comparisons" is listed on following address ; http://www.sbc.edu/sites/default/files/Presidents_Office/NSSE.pdf.)

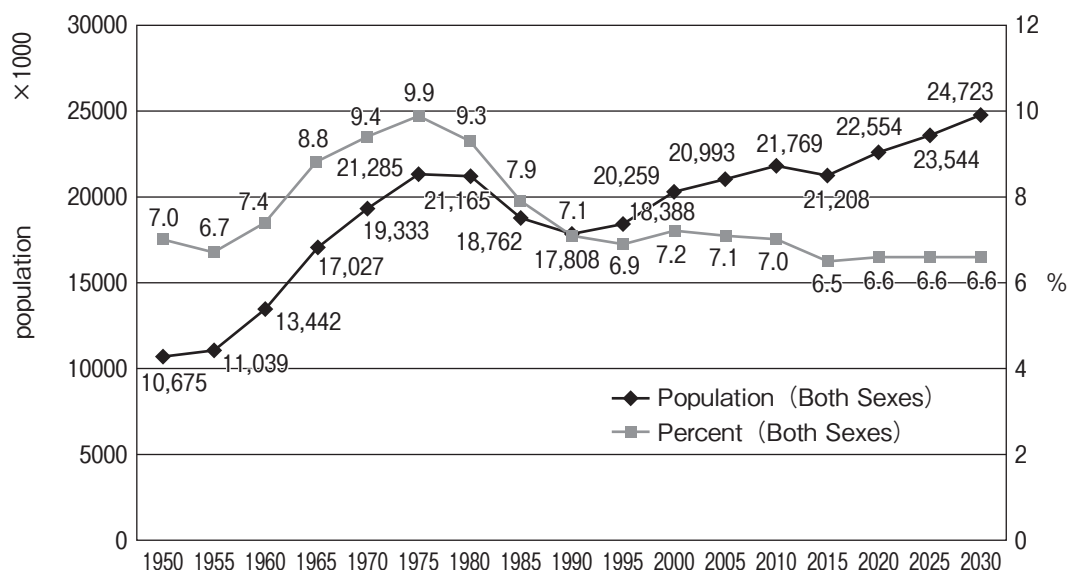
Acknowledgement

This article is a fruit of my research as a visiting scholar of the Graduate School of Education and Human Development, the George Washington University from April 2010 to March 2011. I will give my special thanks to Dr. William K. Cummings of the George Washington University.

※This paper was revised for the final report of the Advanced Studies Program for Visiting Scholar which the author had submitted to the Graduate School of Education and Human Development at the George Washington University.

Appendix :

Appendix Figure 1. Changes of 15-18 age population and it's rate in total population of thd U.S.



Appendix Table 1. Predicted Population of 15-19-year from 1950 to 2030

Year	Population (Both Sexes)	Percent (Both Sexes)	Male Population	Female Population	Percent Male	Percent Female	Age
1950	10,675,000	7.0	5,381,000	5,294,000	7.1	6.9	15-19
1955	11,039,000	6.7	5,558,000	5,482,000	6.7	6.6	15-19
1960	13,442,000	7.4	6,803,000	6,640,000	7.6	7.3	15-19
1965	17,027,000	8.8	8,640,000	8,386,000	9.0	8.5	15-19
1970	19,333,000	9.4	9,816,000	9,517,000	9.8	9.1	15-19
1975	21,285,000	9.9	10,817,000	10,468,000	10.3	9.5	15-19
1980	21,165,372	9.3	10,779,171	10,386,201	9.7	8.9	15-19
1985	18,762,678	7.9	9,585,293	9,177,385	8.2	7.5	15-19
1990	17,808,884	7.1	9,148,333	8,660,551	7.5	6.8	15-19
1995	18,388,275	6.9	9,454,662	8,933,613	7.2	6.6	15-19
2000	20,259,270	7.2	10,417,633	9,841,637	7.5	6.8	15-19
2005	20,993,786	7.1	10,764,907	10,228,879	7.4	6.8	15-19
2010	21,769,824	7.0	11,159,229	10,610,595	7.3	6.7	15-19
2015	21,208,512	6.5	10,843,880	10,364,632	6.8	6.3	15-19
2020	22,554,418	6.6	11,512,926	11,041,492	6.8	6.4	15-19
2025	23,544,857	6.6	12,015,656	11,529,201	6.8	6.4	15-19
2030	24,723,265	6.6	12,611,672	12,111,593	6.9	6.4	15-19

<http://www.census.gov/ipc/www/idb/groups.php> (retrieved Nov./20/2010)

武庫川女子大学教育研究所／ 子ども発達科学研究センター 2013 年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for the Study of Child Development 2013

河 合 優 年* ・ 難 波 久美子** ・ 佐々木 恵**
石 川 道 子* ・ 玉 井 日出夫***

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SASAKI, Megumi,
ISHIKAWA, Michiko & TAMAI, Hideo

目次

I. はじめに

II. 2013 年度の子ども発達科学研究センターについて

III. 2013 年度活動概要

1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ
2. 西宮市研究協力・受託事業
3. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための
「子どもの発達」を学ぶ会

IV. 研究業績

*武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員、文学部心理・福祉学科・教授、**武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手、***武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員

I. はじめに

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター（以下子どもセンター）は設立から10年を迎え、2013年には国外向けのホームページ（<http://childstudy.jp>）が立ち上がった。これによって子どもセンターの追跡研究の成果が世界に向けて発信されることとなった。研究部門もコホート研究に加えて、これまでの研究で得られたノウハウを使った小学生と中学生の学校適応についての追跡研究が始まっている。これらについては後述される。

科学研究費基盤研究（A）は2013年度をもって終了したが、これまでの成果発信が2014年度の課題となっている。これらの一部は、9月にオランダで開催される The British Psychological Society, Developmental Section Annual Conference において発表される予定である。

II. 2013年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2013年度は以下のような研究活動と成果の地域還元を行った。

- (1) JST 研究の継続研究として進められている「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」（科学研究費補助金基盤研究（A））

本取り組みは2013年度が最終年度であり、研究目的であった児童期の WISC 検査（ウィスク知能検査）の実施と学校での社会的適応についての調査を行った。これによって、乳幼児期のエクスポージャー要因との関係解明が進められることとなった。これらの一部は、日本心理学会、日本発達心理学会等において報告されている。

- (2) 西宮市からの「10 か月児アンケート健康診査及びフォロー事業に関する委託」に関わる業務と研究

本取り組みは、西宮市保健所との共同研究として進められてきた。2013年度からは、西宮市の10 か月児乳幼児健診に移行し、事業そのものは終了したが、分析と一部の追跡が、西宮市との委託事業として子どもセンターで継続している。2014年度に一部データ受取が残るが、追跡アンケート実施は2013年度に終了している。これらの結果については、西宮市医師会において報告されている。

- (3) 西宮市内の1小学校と1中学校を対象とした小中学校の学級適応についての追跡研究

この取り組みは、西宮市教育委員会との連携の中で展開されている。小学生の学校適応は、いじめや不登校を予見するために重要であるが、学校の児童生徒全数を対象にした調査はこれまで見られない。2年間の追跡調査において、小学校から中学校への移行過程における学級内の居心地のよさが検討されている。これらの結果は、スポケーン市のゴンザガ大学との共同研究として、2013年6月にシアトルで開催された JUSTEC2013 において報告された。

- (4) 子どもセンターの設置目的である、研究成果の学内学生への教育的提示については、昨年同様に学部生の研究会活動などの活動を通じて、研究への動機づけを行っている。
- (5) 研究成果の地域への還元としては、2013年度も、専門職者に対しての毎月1回の勉強会を継続した。

2. 外部資金の獲得について

子どもセンターは教育研究所のディビジョンとして設置されている。このことから、私立大学経常費補助金特別補助によって、西宮市のコホート研究が進められているが、外部資金として科学研究費補助金（基盤研究（A）：課題番号 21243039）、メディカ出版からの究助成費を受けて研究が進められた。

3. 次年度に向けて

2014年度は、成果発信の年として、児童期の社会性と知能をアウトカムとした、乳幼児期のエクスポージャー変数との関係解明を進める。また、大阪大学、浜松医科大学との子ども研究についての連携研究活動を進める。競争的資金の獲得については、次年度以降の事業展開を見越して、準備段階に入る。このため、先に述べた研究成果発信を確実に進める。具体的には以下の各点について事業を進める。

- (1) コホート研究
データセットの完成と論文化を進める。
- (2) 西宮市における乳児健診
14年度も西宮市との契約を継続し、これまでのデータ解析を進める。また、保健所への最終データの譲渡を完了する。
- (3) 児童生徒の学校適応
本研究はゴンザガ大学との共同研究であるが、14年度も継続してデータの収集を進める。西宮市教育委員会との連携を強める。
- (4) 学院教育への還元および地域連携
臨床教育学研究科の大学院生の中で、学校適応、発達心理学の研究ベースとして

子どもセンターを活用するケースが増えてきている。また、地域連携に関しては、前年度と同様に石川、河合が西宮市のわかば園、砂子療育園、教育委員会などとの連携を保ちながら、さまざまな形でのアドバイス活動に参画してゆく。

Ⅲ. 2013 年度活動概要

1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

コホート研究に関する計画は問題なく進行している。

(1) 2013 年度の進捗

すくすくコホート三重では、小学 2 年生の WISC 知能検査を含む観察調査を終えた。また、小学 3 年生の協力者には、2 月に郵送調査を実施した。NICU コホートは、6 歳の観察及び、小学校 1 年生の郵送調査（春・秋）を実施した。

母子の生理的ストレス解明チームは、引き続き解析を行っている。

武庫川チャイルドスタディでは、6 歳の観察及び、小学校 1 年生の郵送調査（春・秋）を実施した。また、個別の発達相談にもその都度対応している。

すくすくコホート三重と武庫川チャイルドスタディの協力者向けのニューズレターは、今年度も順調に発刊できた。5 年目の節目にあたり、グループリーダー同士の対談を行うなど、これまでとは違った側面の情報を掲載した。

2014 年 2 月 28 日に全体会議が行われた。

(2) 今後の展望

2014 年度は、データ整理とその論文化を中心に行う。武庫川チャイルドスタディでは、小学 2 年生夏の WISC 知能検査を含む観察が実施される予定である。

2. 西宮市研究協力・受託事業

(1) 2013 年度の進捗

西宮市地域保健グループとの研究協力は、「乳幼児の追跡調査に関する委託研究契約書」を締結し、最終の 3 歳アンケートの回収を行った。また、同時し、これまでのデータのクリーニングを行った。

(2) 今後の展望

2014 年度はこれまで実施されたすべてのアンケートのデータセットを完成させ、西宮市と共有する。また、それに基づき基礎解析結果を報告する。

3. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会

(1) 2013 年度の取り組み

2012 年度の前半は、保育の現場でどのように、何を、いつ教えているのか、子どもたちが好む遊び、といったことを出していただき、子どもたちの現状を把握した。これを踏まえて、後半は単に経験がなくてできない子どもと、手をかけないと学習がうまくいかない子どもを、どのように、いつ区別することができるのか議論した。

2013 年度は、多くの子どもたちが専門職者の前に現れる 3 歳ごろまでを対象に、乳児期にどのような発達の道筋をたどっているのかを押さえたい。特に運動領域の発達を中心に上げる。運動発達を捉えるにあたり、姿勢保持の系列と移動の系列に分けて考える。また、一つの行動の完成までをいくつかの段階に分け、それぞれの段階でどのような補助をすることで次の段階につながっていくのかも含めて整理する。同時に、その行動の前段階でどのようなパーツが揃っていなければいけないのか、また、次の段階への移行や、他の系列、領域との相互作用も含めて検討していきたい。これにより、幼児期の身体の使い方が不器用な子どもを早期に発見し、適切な支援を考えられる基礎となることが期待される。

(2) 実施記録

学ぶ会は、武庫川女子大学学術交流館 1 階会議室（初回のみ教育研究所 3 階 304 教室）を利用して、おおむね月 1 回、土曜日に開催された。講演・検討時間は、10:00～11:30 である。開催日程と実施内容を表に示した。

表 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会
2013 開催報告

回	日 程	テーマ	タイトル	担当者	参加者数	院生参加
1	5 月 11 日	概論	子どもの発達概論と今年度の方針	河合優年、石川道子	27 名	1 名
2	7 月 6 日	乳児の運動発達 1	座位	石川道子	18 名	1 名
3	8 月 3 日	乳児の運動発達 2	ハイハイ	石川道子	18 名	1 名
4	9 月 14 日	乳児の運動発達 3	立位	石川道子	16 名	1 名
5	10 月 5 日	整理	運動を捉える視点	石川道子	7 名	1 名
6	12 月 14 日	乳児の運動発達 4	歩行	石川道子	9 名	1 名
7	2 月 1 日	骨・筋・感覚などの準備	身体発達を支える骨格について	舟橋吉美 (名古屋市北部地域療育センター)	11 名	0 名
8	3 月 8 日	まとめと展望		石川道子・難波久美子	10 名	1 名

(3) 各回の講演内容抄録

1) 第1回

これまでのこの会での成果を含め、『保育の心理学』として発刊した。今日は、これをテキストに、発達を概観していきたい。

今年は運動を中心に、ということであるが、次のような点について考えていきたい。まず、発達のコースについてであるが、身体、運動の発達の基準表というものが様々に示されている。しかし、発達の仕組み、つまりどういう風にして発達が作られて行くのか、という変化の仕組みが分かっていないと支援に結びつかない。基準表をもっと現場で生かせるようにするにはどうすればよいのだろうか。基準表には、こういう風になる、ということは書いてあるが、そこからの逸脱については書いていない。だが外れ方も含めて仕組みを理解しておかないと、支援しようとするときに理屈で説得はできるけれども、納得してもらえないように話すことができない。例えば、養育施設を紹介しようとしても、母親を説得できても納得していなければ動いてもらえない。現場で使えるようにするには、どうすればよいのだろうか。また、現場にいる人が、その子どもが月齢・年齢相応かどうかというのを直感的に分かるようになって欲しいが、そのために使えるものにもしたい。

発達のパスという考え方でいくと、最初同じところでも発達とともに色々な要因でどんどんパス（道筋）が分岐していく。この地図を使っても、現在地のところで、できていたりできていなかったりすることを確認することはできる。だが、できない、ということについて、その行動だけに注目して、できない、という見方をするのではなくて、その行動を形作っている部品一つ一つを他の物を組み合わせるという捉え方が必要となる。また組み合わせるためにはどの様な働きがうまく働いていないのかという視点も重要である。感覚統合という言葉があるが、これは部品を統合することによって注目した考え方である。それぞれの部品を見分ける、そして、何が足りていないのかを発見できると支援につながっていく。（以上、河合）

今年、運動について取り上げることにした理由は、最もシンプルに問題が分かりやすいだろうということである。年齢が上がると要因が複雑になってくる。乳児の最初のとことで、最も基本のパーツを見ていきたい。運動を取り上げる利点は、見ればわかる、というところがある。今回は、具体的に VTR を見ながら進めていきたい。そして、どのようなパーツが足りていないのか、というのを発見する目を養っていかれたらと思っている。

まずお座りというのを取り上げる。どんなことができれば座れるのか、どんな練習をしていくのか。そして、次の段階に移っていくための何かが出てくるのではないのか。パーツが揃っていないと、次の練習のときに何かが起こってくるのではないのか。

一見できているようでも、パーツが揃っていないやり方だと次の段階で躓いてしまう。これまで接してきた発達障害を持つ成人の成育歴を聞いていると、乳児期や幼児期に得た身体運動、適応の仕方がずっと変わらずにきて、苦労しているというのがある。

発達障害の子どもであっても、ある時期まではうまくやっているように見え、特に問題視されないこともある。しかし、ある時期に、急に適応が難しくなり、不登校など社会的な問題が発生する。これは、“とにかく生きる”から“うまく生きる”というように、同じ行動でも質が変わっていくのだが、発達障害を持つ子どもは、この“うまく”というところで躓いていくことがあるようだ。この質的な変化に対応できるよう支援していくためには、その行動を構成しているパーツが何か、そして、そのパーツが揃っているのか、うまく次の行動に統合され組み込まれているか、というところを見ていくことが必要だろう。

今年度は、このような視点で、非常に細かなところになるかもしれないが、乳児期の運動発達について詳細に取り上げていきたいと考えている。(以上、石川)

2) 第2回 ～ 第4回、第6回

乳児の運動発達について取り上げる。これを取り上げるのは、発達に影響を与える要因が比較的絞しやすい時期・領域であるためである。特に、姿勢が完成していく様子に重点を置き、VTRを交えて細かく見ていきたい。うまくなっていく過程を見ていくことができると、新しい発見がある。できる、できない、というだけでなく、細かな点、足の位置だとか、ベビーベッドなどの環境をどのように使っているか、などを見ていくことができる。

まず、姿勢を捉えるにあたり、2系列を考える。それは、姿勢保持の系列と移動の系列である。姿勢保持の系列として、座る、立つの二つを、移動の系列としてハイハイ、歩行を取り上げる。一般的に、何か月に何ができる、ということは書かれている。しかし、それぞれがどのように相互に関係しているのか、ということは書かれていない。そこで、この2系列がどのように絡んでくるのかについても検討していきたい。

お座り

まず、お座りから始める。お座りにも、初心者状態から、上級者の状態がある。初期では、ラックやバンボ（乳児用の補助椅子）に座らせる。まずある程度首が座っていないといけないうと、姿勢がずれてきたときに、修正できないといけないう。杵を使って反発で動くことで修正できるだろう。重力に逆らって手足を動かすことや、垂直方向が分かっていることも必要だろう。これは、姿勢反射（体の動きという刺激が入ったときに、どのようにするかという脳の反射回路ができてくる）としての立ち直

り反射（首を戻す（概ね3ヶ月ごろ）、体全体、背中から戻す（5、6ヶ月ごろ））、パラシュート反射（横の傾きに手が出る（6、7ヶ月）、前の傾きに手が出る方が後から出てくる（10ヶ月ごろ））、固有覚の発達も関係してくる。これらを支える筋力の発達も必要である。ちなみに、最近、小学校の保健室では、顔面の怪我がよくみられるという。雑巾がけなどの運動が苦手なようだ。これは、前のパラシュートが出ていないと考えられる。ハイハイをしていない子どもが増えていることと関係があるのだろうか。また、叩いたりする力は強くても、うまくハイハイできない子ども見られる。筋肉そのものを収縮して力を出すというやり方と、腕の曲げ伸ばしや腕全体を緊張させて突っ張るような力の出し方がある。通常、一連の動作をするときに関連している複数の筋肉と関節がセットになっており、なおかつ左右の連携も重要となってくる。しかし、セットになっている左右両方の筋肉に一度に力を入れるとまっすぐになるので、それで突っ張って反発で力を生むこともできる。

次に、脊椎に注目してみると、初期のころは、前屈気味に背中が丸まっているが、後期になると胸を張っているようになっていた。また、足指が初期にはよく動かしていたが、後期にはその動きが見られなかった。さらに、股関節の使い方では、初期は足を投げ出すような感じであまり足を広げていなかったが、後期には、足を広げて安定していた。通常は、安定することを追及していくと考えられるが、VTRの児は、不安定な状態でも、手を挙げるなど、さらに不安定な状態にチャレンジしようとしていた。じっくりと物を掴むなどしたい場合は、うつぶせの状態になっているようなので、その児にとっては、座るということが遊びなのかもしれない。一方で、最近では早くから座りなれているように見える子どもを見かける。本来なら、ズリバイなど水平の刺激の状態のはずが、それよりも早くラックやバンボに座らせてしまい、垂直の刺激を入れていることが多いようだ。そうすると、垂直に対して懸命に体を支えることになり、本来使うのではない機能を使ってカバーしていると考えられる。そして、垂直の刺激に慣れてしまうと、ズリバイなど水平の運動を嫌がってしまう、という流れがあるようだ。お座りからハイハイというように一般的に書かれていることが多いが、しかし、そのように簡単な図式ではなさそうである。

ところで、お座りの完成というのは、座れる、ということではなく、座った状態から、自分で姿勢変換をし、次の行動に移れる、そしてまたお座りに戻せる、ということである。お座りをするとなんがよいかというと、視点が変わるということである。視点が高くなる。そして、うまくなってくると、両手が自由になる、ということである。そうすると、自由になった手で物の操作ができる。また、物を操作したり、手を伸ばしたりすることで、バランスが崩れる。そうすると、そのバランスの崩れを修正するために体幹が鍛えられてくる。循環器系も、上方に血液を送らなければならない

ために心臓の働きが強くならなければいけない。脊柱の回転が可能になり、後ろの物が取れるようになる。物を取る、操作するというのは、探索への意欲とも関係してくるだろう。

最近、うつ伏せが推奨されていないと受け取っている母親をよく見かける。しかし、最初の1ヶ月、親が見ているところで、ということであれば問題がないことや、2ヶ月以降は推奨されるということは、母親に伝わっていないように思われる。結果、4ヶ月健診のころには、うつ伏せが嫌い、というように言われることがよくある。新生児訪問などで、実際に子どもをうつ伏せにしてみせると、そんなことをしていいのかと母親がびっくりすることがある。

座れないと困る、立てないと困る、というので補助具を使うが、使い方が重要である。補助具を使うことで、子どもが静かになる、関わりが少なくて済むというので、そのまま放置してしまうパターンもあるようだ。また、抱っこの際に、上半身を支える、下半身を支える、背骨の状態に無理がないように抱くなど、いくつかのポイントがあるだろう。子どもがある程度動けるような自由度があるか、逆に子どもを十分に支えられていないために不安定になって子どもが泣くということもある。子どもの状態に合わせて横抱きから縦抱きに変えられているか、というように、母親の要因も絡んでくる。

今回は、お座りを取り上げたが、そこに至るまでの状態も重要だということが確認された。

ハイハイ

ハイハイの形をまず確認したい。交互性のあり・なし、そして、推進力をどこで得ているかに注目すると、肘、掌の使用のあり・なし、足の膝の伸展・屈曲（腿の接地）、足のつま先の状態が重要だろう。一様の発達ではなく、組み合わせがあるようだ。

掌に関して、手で押すことよりも先に背筋で上体が上がり、手で押すようになった。この場合は、背筋が必要になる。膝が屈曲すると背筋があまりいらぬ。脚を横に出せると、推進力として使えるし、重心も安定する。問題としては、片足を推進力にすると方向が定まらない。脚が伸びた状態で、つま先だけで蹴っていると、まっすぐ進む。四つ這いの手足を出すタイミングを間違えると進めない。ハイハイが続かない子どもは、手足のタイミングを間違えている、一歩出て座ってしまう。そして、お尻が上がって膝が使えるようになると、腿の筋肉が発達してくる。このように見ていくと、色々なパーツが出てきた。一般的な順番としては、交互性が先、膝がついていない状態からついてくる。肘を曲げた状態から、伸びた、手で押すことができる状態になる。

この間、練習となっている運動がある。ピボットターン、片手で支えないと方向転換できない。これは背筋の強化になるだろう。肘をついていると、これがうまくできないかもしれない。手で押すというより、脚でけて回ってしまったり、お腹を中心に回るというものもある。他に、飛行機姿勢や、ぎっこんぎっこん（四つ這い位での前後への重心移動）しながら背筋などを鍛えている。

（河合：これらの動きは、常同運動であり、のちにこのような反射の運動が前方向の運動の中に組み込まれないといけない。神経学的に問題のある子どもに常同運動が残る。同じような運動をしながら鍛えている、というのが発達の1つの道標といえる。パターンが決まって何度も繰り返す。無駄なように見えるのに、何度も繰り返す。筋肉の運動のパターンを作っている。移動の一番の基本はハイハイ。ヘビが動いていくように、左右に捻っている。人間が歩くのも一緒に、基本は捻っている。クリーピング、クロール、ハイハイ、高這いと進むが、これらはみな捻っている。前方向に移動したいけれども移動できないが、捻ると移動できる。神経系に問題がある子どもは、マウンティングのようなのがいつまでも残る。同じ動作を繰り返す子どもは、それが次の運動に組み込まれていかない。部品だけをずっとやっている。脚で蹴って前へ動くのではなく、捻って前に蹴りだして動いていくというのが基本の動き。常同運動は、最初に出てこないと困るが、いつまでもやっても困る。前にあるものを取りうとして手を伸ばすと平面上の捻りが生じる、その後、反射で脚は曲がって引き付けられる。そのような動きがすでに用意されているのではないか。

ハイハイは難しい。ハイハイをしないで立ち上がる、というパターンがある。アメリカなどでは歩行器を使ってハイハイを飛ばして歩かせ、認知発達を促す、というようなことを勧めることもある。ハイハイの垂系はたくさんある。）

ハイハイするのは、歩くより背筋が必要ということが、実際やってみるとよくわかる。4点で支持していると、動けない。3点支持にならないといけないが、手足を効率よく使わないといけない。接地している身体の箇所が少なくなった時にバランスを取ることの重要性が出てくる。このとき、これに満足しないで、バランスを崩すことにチャレンジしていかないといけなくなる。

股関節の向きが、ハイハイで変化する。最初べたっとカエル型（股関節の外転・開排）になったときに、脚は横に出ている。お尻が上がると、お腹の前に脚が出ている。お座りの時の足の位置が変わる、という話が出た。ハイハイでも股関節が変化する。前に脚が出るというのは、立った時に必要な股関節と脚の位置になる。四つ這いの姿勢は、腿の筋肉が鍛えられるということもあるが、立位に必要な股関節の準備、重力に逆らうために必要になってくる。脚を横から回してくるような歩き方をする子どもがいるが、これは、乳児のときの股関節の形のままになっているようである。ひ

どいと交差した脚になってしまう。ちょうどいい角度に変わっていけない。お座り、ハイハイをしているうちに変わっていく。色んな運動をして適正な位置に変わっていく。

お座りの時に、違う形があるように思う。胡坐をかく形、脚が斜めになるのだが、脚が平行線になる。(参加者：できる。話を聞いていて、この股関節が発達していないから、座る姿勢が維持できないのだろうか、と思った。体幹がしっかりしていないから、身体が倒れてしまうのかな、と。テーブルで書くよりも、床で書く方が楽だったりする。)

(きれいなウォーキングを考えると、例えばモデルのウォーキングだと、腰から捻って歩いている。しかし、ハイハイの捻りは平面上の捻りだけで、そこまでの捻りはないのではないか。)

さらにこの前提条件として、ハイハイ前の VTR を見てみたい。寝返りやバタバタと手足を上げたり、目の前のおもちゃを引っ張ったり、お腹で支えて上半身を上げたり、片手を上げたり、という動きをしている。このような動きができるかできないか、というのにどのような要因があるか。腹這いや寝返りの試行錯誤、また、この対象児宅ではベビーベッドを使用しているので、その枠を使つての動きが有利に働いていると言える。

上半身が上がると、脚のバタバタが減っている。腿から膝頭にかけて力が加わり、上げられなくなってしまう。上半身が上がると下肢の運動が制限されている。膝の内側が接地できるかどうかで、どのような四つ這いの姿勢になるかに影響する。

あと、肩の位置も重要である。四つ這い姿勢が崩れてしまう子どもは、位置が悪かったり、筋力が弱かったりするようだ。特に筋力が弱い子どもには、姿勢を工夫するような簡単な援助でも助けになる。

脚の位置、お尻だけ上げたり、その逆になったりしている。まっすぐ背中が上げられるには、腰のあたりの筋力もいるようだ。背中が落ちてしまう子どもは、体幹保持の筋力が足りないかもしれない。

立位

立位になって何が変わったのか。体重を支えているのは、お座りはお尻、ハイハイは手と膝というように変わっていく。立位では、足底のみで体重を支えることになる。骨盤の前傾がないと、脚にしっかり体重が乗らないので、立ち上がれない。骨盤と肩甲帯(肩甲骨と手も含む)の変化が重要になる。座位でも後傾から前傾への変化がある。

立ち上がる時、身体を引き上げないといけない。水平面では、ハイハイの時手を前に出していくというのはあっても、正面から垂直面にアプローチするような動きは

ほとんどない。立位は膝の下も使っている。片膝立ちをしている。足首がなかなか直角に曲がらなかったが、だんだんできるようになった。O脚になっているので、立ち上がると外側に力がかかる。立ち上がりだすと、内反扁平になる。立つときの力のかけ方と、動くときは微妙に違う。つまり立ちは、手で支えているので足底はそんなに重要でない。脚がまだ短いので、調整しやすい。

では、伝い歩きは、何の練習になっているのだろうか。歩行は前に移動するが、横に行っている。脚の動きだけを見ると、関係ないように見える。しかし、歩行は前後の動きだけではないので、バランスを取る意味では、前後左右適当に力をかけて練習しないとイケない。椅子を動かすような動き、手押し車などは前後の動きの練習になっている。また、伝い歩きは目的のために歩いている（歩くことが目的で伝い歩いているのではない）。この目的物に対し手が先導して動いていく。

伝い歩きでは、前後左右の荷重を学ぶというのと同時に、どういう探索活動ができるのかを学ぶ、立った状態でそこまでいく、ということを学んでいる。初期は目的物が変わると、一旦座って、新しい目的に合わせて態勢を整えているが、後期では連続的に動くことができるようになっていた。（他に、伝い歩きでも、最初お腹を壁にくっつけて歩く子どももいる。これは、体重を支持できる接地面を広げて安定していると思われるが、こうすることで、前傾した状態で姿勢を維持、安全に動ける子どももいると思われる。ちゃぶ台くらいの高さというのは、ちょうどよいのかもしれない。）

手の動きもハイハイや座位とは違う動きをしている。手の動き、手を上げる動きは、かなり早くからやっていた。しかし顎の挙上を伴う、つまり、手先の方の上の目的物を見られるようになるには、少し時間がかかった。顎の挙上は首の前弯が形成されないといけない動きで、前弯ができ、筋力が伴って細かな動きが調整できる。また、横への移動時に、首が横（後ろ）に回っていないといけない。ハイハイなら、止まって首を横に向けていることが多いのではないか。

また、足首の使い方の練習が必要である。座位、四つ這い、ハイハイと色々なパターンの動きを経験している子どもは、立ち上がりの脚の使い方もスムーズにいく。

歩行

直立歩行に必要なものは、まず、安定して立てていることである。支えなしでの立位だけでなく、支えのある立位があった。特に支えのある立位の中で、動くものを支えにしようとした場合、それにつられて動いてしまう、ということが起こっていた。前に押して足が出るというパターンと、引き付けるように引っ張ったところ物が迫ってくるので後ろに下がろうとして足が出る、というパターンがあった。どのような物があれば助けになるか。可動性、適度な重さ、高さが必要である。

こけかたも重要で、前にこける場合、手が出る（パラシュート反射）、後ろにこける場合はしりもちをつく。また、速いスピード・勢いがあるからスピードが殺されて、ゆっくりこけられるようになっていた。しっかり踏ん張れるようになってから、簡単にこけなくなり、かえってぎくしゃくしている時期もあったが、それを過ぎるとひざの屈曲とうまく連動するようになった。足底がついていて、ひざの屈曲によって吸収できるようになっている。

足首の曲げ方の習熟を考えると、後ろ向きに移動するというのは、固定されていてやりやすいのかもしれない。ハイハイだと、足首は伸びているので、高這いの姿勢は、足首の屈曲には良いのかもしれない。高這いをショートカットしてしまうと、足首の使い方がまだ上手でないまま歩行に移行するかもしれない。環境が片付き過ぎていると移動させるものがない、ごみ屋敷では移動させるスペースがない。手押し車があるが、あまり軽いものではよくない、ある程度重さが必要だろう。ただ、収納スペースの問題であまり好まれないのかもしれない。対象児は靴を履きだしてから、弱い方の足首が固定され、歩行しやすそうになった。足首がぐらぐらしている子どもには、ハイカットの靴を履かせるとよい。

足指は、広がるだけでなく、しっかり力が入ってつかんでいないといけない。援助の必要な子どもにマッサージするとき、特に小指側をしっかりマッサージするように指導される。そして、踵に体重が乗っていることが重要である。最初はふわっと足が着いているだけだったのが、足指の点々が足跡につく感じになってくる。座位や仰臥位で足指や足首でバランスを取ったり、足の指をなめたりして遊んでいた。これらの動きもパーツとして組み込まれてきているのかもしれない。座位がきちんと取れていない子どもは、足首で遊んだりする余裕はないだろう。

支えありの立位で支えにしている物が動いていると、バランスが崩れる。伝い歩きでも、横向きに自分でバランスを崩す。横向きの足首のグラグラをしっかりさせられるかもしれない。完全に上半身で支えて、脚はおまけ、という伝い歩きと、壁のように掴まるところのない場所での伝い歩きでは、使う身体の一部が異なるだろう。

足首は、足の方向性、曲げ方、足底の着き方は、小指側にも力が入り、狭いから広い、足指は広がりしっかりつかむようになる。また、膝関節、股関節も同時に曲げなければならない。最初は無駄な動きをしている。安定のためには横に脚を広げた方がよいが、前への推進力を邪魔する。伝い歩きでは横に脚が出ればよい。前に脚を出す練習をするには、何か押すものもあった方がよいのかもしれない。

昔は、パラシュート反射が出て歩く準備ができた、と判断していたが、最近パラシュート反射が出ないまま歩きだしている子どももいる。小学生になっても顔面からこけて怪我をする子どもが増えているということと関連があるのだろうか。

バランスの問題も大きい。物を押すとき、へっぴり腰から、しっかり腰の入った押し方に変わる。腰盤の前傾がしっかりしてくる。手でバランスを取っているのが、手が下がってくる。最初、身体全体がグラグラと動いていた。移動するためには、関節が動いてはいけない。必要なところを固定する必要がある。物を持って歩いている方が歩きやすそうだった。ぬいぐるみや紐を握ることで、関節が一部固定され力が入り、きっかけになるかもしれない。大人が手を握る、というのでは、大人が引っ張り上げたり子どもも預けてくるので、違った働きになる。移動を開始するには、バランスを崩す必要があるが、移動に適切なバランスを維持することが必要。手を引っ張り上げる補助から、前の方から引っ張ったり、手はつないでいるけれども乗せているだけだったり、少しずつ手の位置が下がってくる。

靴をいつ履かせればよいのか。ある程度足首が固まってからか。運動の遅い子どもに対しては、いい形の足首にするために早目に靴を履かせてしまう。立位の形を取らせるために支えに固定するが、その時には、しっかりした靴を履かせる。まっすぐの形を覚えさせる。

自分で立てた、と喜び、歩きたい、という意志が見えるようになった。筋力がアップし、こけかたが上手になっていくことで、ダメージが少なくなっていく。いきなりこけるのではなく、いったんしゃがむことで吸収できる。立ち上がりも、まずしゃがんだ姿勢を取って立ち上がる、ということが出来る。お尻が上がった状態でしゃがむ姿勢が取れる、というのは後の排泄の姿勢をとるためにもとても重要。しかし最近、小学生で和式トイレが使えない子どもがいる。

直立歩行ができるから運動機能の問題はない、というように健診などで判断されるが、動けていればよいのではなく、座位の完成など他の要素も重要である。

3) 第7回

今回は、名古屋市北部地域療育センターの舟橋吉美先生をお迎えして、これまでのビデオ画像も振り返りながら、身体発達を支える骨格のお話を伺った。

地球上で暮らしていると、重力とどう戦うか、ということが最大のテーマとなる。姿勢を保持できる、その次に移動がくる。移動は、自分の行きたい方向に、効率よく筋肉や骨格を動かしていく。いつまでにどのような経験をしていればできるようになっていくのだろうか。

身体は、安定（姿勢の保持）と不安定（移動）を繰り返して、さまざまな動作を獲得していく。姿勢の保持と運動をうまく繰り返せる、ということが重要である。そのためには、いかに骨格をうまく成長させていくか、筋肉を適切に働かせていくか、同時に、視覚情報や聴覚情報等の感覚情報を取捨選択して、それらの情報を統合し、身体のバランスをとっていく、ということが必要となる。それぞれの時期に合った行動

を積み上げていくことが重要になる。

発達の手順は、頭からお尻に向けて、中心から外側へ、両側から片側へ、粗大運動から微細運動へ発達するのが大原則である。子どもをみていくときに、このことを念頭に置いて仕事をしている。なぜなら、身体を支える筋肉があって、姿勢保持がスムーズにできているから、字を書くなど細かい作業に力を及ぼせることができると考えるからである。

まず、大人の骨格を見ると、前から見るとまっすぐ、横から見ると背骨はS状にカーブを描いている。これらの骨は、骨と骨が直接つながっているのではなく、骨と骨は靭帯や腱などでつながっている。そのため、関節が自由に動かせ、関節を筋肉や靭帯が支えている。骨と骨を支えながら身体の回旋の軸となる、いわゆるインナーマッスルが深部にあって、これを使えと、寝返りができてくる。このインナーマッスルが発達して骨を支えられるようになってくると、より外側の筋肉にも余裕が出てきて、体を起こしたり、立ったり座ったりという重力に抗する姿勢ができてくる。インナーマッスル、外側の筋肉と言ったが、筋肉は2層、3層になっている。これらの筋肉で、骨をどう支えるかが大事である。骨の中や骨にそって、神経が通っているので、滑らかに動かないと、神経が圧迫されて手がしびれるようなことがでてくる。良い姿勢とは、背骨のS字カーブがなめらかに、バランスよく動けることである。最初は姿勢反射があって、反射によって手足が動く。骨、筋肉、反射で良い姿勢ができてくる。良い姿勢というのは、姿勢の変換もできるし保持もできる状態である。

大人の背骨はS字カーブであるといったが、生まれた当初は、背骨がC字カーブになっている。うつ伏せで顔をあげたり、左右を見たりすることで、首（頸椎）の前弯が形成されていく。座位、四つ這いをしたりするようになると、股関節の臼蓋が形成され、立位を取り重力がかかることで、大腿骨頭が臼蓋におさまリ、腰部が前弯を形成するようになる。これらの姿勢・運動を順番に経験していない子どもは、きれいなS字カーブが形成されない。形成されていないと、成長に伴い、姿勢が崩れやすい、疲れやすいなどの二次障害が表面化してくることが推測される。

背骨以外の手足の骨も同様に、成長に伴って、変化していく。まず手の骨格をみると、生まれてすぐには、大人と同様の骨の状態にはなっていない。10歳までに、いろいろな遊びや運動により、刺激されることで、筋肉が働き、成長が促進され、大人と同じような働き、形態になっていく。足の骨格も手と同じように順に発達する。最近、足の指にうまく力がかからず、足の後方にかかってしまう、という子どもが増えている。

股関節は、大腿部の骨を受けるための丸み（臼蓋）があり、曲げたり、回したり、さまざまな方向への動きが可能となる。かつ、立位で股関節や骨盤、身体全体を保持

しないといけない過酷な場所である。生後3か月の頃は、骨の形成は不十分である。四つ這いをして、さまざまな動き、重心の変化を経験し、大腿骨の後方に“かさ”ができる。立位ができるようになって、さらに大腿骨の上方に“かさ”ができる。1歳頃までに立位を経験していないと、股関節周囲の骨の形成が不十分となり、股関節が外れやすいということが起きてくると言われている。

姿勢と手も、密接に関係している。身体が安定しているからこそ、目的のところにあるおもちゃを手に入れることができ、物を操作することができるようになっていく。また、姿勢が良いと、脳が疲れにくい。脳に余力があるので集中力が高まる、内臓に負担がかからない、見ている景色も安定する。さらに、手の機能が発達していく。姿勢が保てるということが、発達をバランスよく促していく。

最近、四つ這いしないで歩いたという話をよく聞く。これは、四つ這いはなくても良い、ということではないと考えている。経験できない理由は子どもの身体や環境にある。背中が痒いから寝返ってみようというように、色んな感覚器官からの刺激が脳に入って、次の運動を促していく。姿勢の保持が難しいと、経験が不足、あるいは偏ってしまう。例えば、幼児期以降、歩行の状態を観察してみると、歩いたり走ったりしているものの、細かな調節が難しい子どもがいることに気付く。これを足裏全体で体を支えられないからゆっくり歩けない、バランスが崩れた時に立ち直れないから、前に動き続けなければいけなくなり、周囲の大人からは多動と思われることもある、というように理解できると、その子どもにどのような経験が不足しているのかを考えることができる。そして、その経験不足を補償することで、筋肉やバランスを補うことができ、落ち着いた姿を見ることができるようになることが多々ある。

では、どんなことができるのか。四つ這いをしていない子どもなら、四つ這いのような行動を経験できるとよい。例えば、雑巾がけをすると、肩甲骨、股関節、足の筋肉が鍛えられる。筋肉は何歳になっても鍛えることができる。四つ這いの姿勢で、ぎっこんぎっこん遊んでいる姿（四つ這い位で、体重を前後上下に移動させていた様子）がビデオであったが、これは、この姿勢を取れるというだけではなく、加速度の経験であったり、肩関節周囲の筋肉に刺激を入れていたりしている。その時々で遊びに見える行動の中で子どもたちなりに次への成長のための準備をしているようだ。また、少し重い荷物を背負って歩くには、がんばって姿勢を保持しなければならない、ということを経験して子どもの身体に、意識してもらえ。年中さんの児に、お出かけのときに、1リットルのペットボトルを背負って歩いてもらった。これだけで、随分と姿勢が変わった。身体がしっかりし、足もしっかりしてきた。他に、ジャンプができない、という子どもがいた。ジャンプには、かがむ、ということが重要になる。四つ這いやずり這いで、どこに力を入れたらよいのかがわかるように足裏や手掌等に大人の

手を添えてあげると、子どもたちは、自分の身体の使い方を学習できる。

いわゆる自閉症スペクトラムと呼ばれている人たちは、運動に問題を抱えることが多い。これまで小脳や前庭器官等の姿勢を司る部位に問題があると言われていたが、現在は、個々の器質的問題ではなく、それぞれの神経接続の問題が原因ではないか言われている。ということは、質の良い経験を積み、動作や作業遂行がスムーズに行える可能性が考えられる。脳の可塑性を期待したい。

4) 第5回、第8回

第5回は、今年度は取り上げることができなかった定額、寝返りに関する身体運動を取り上げ、どのような前提でその姿勢・運動が起こっているのか検討した。また、第8回はこれまで取り上げてきた運動発達を図（図）にまとめていく作業を通して、全体を振り返った。

今年度は、乳児の運動発達を中心に進めた。直立二足歩行を乳児期の運動発達の一

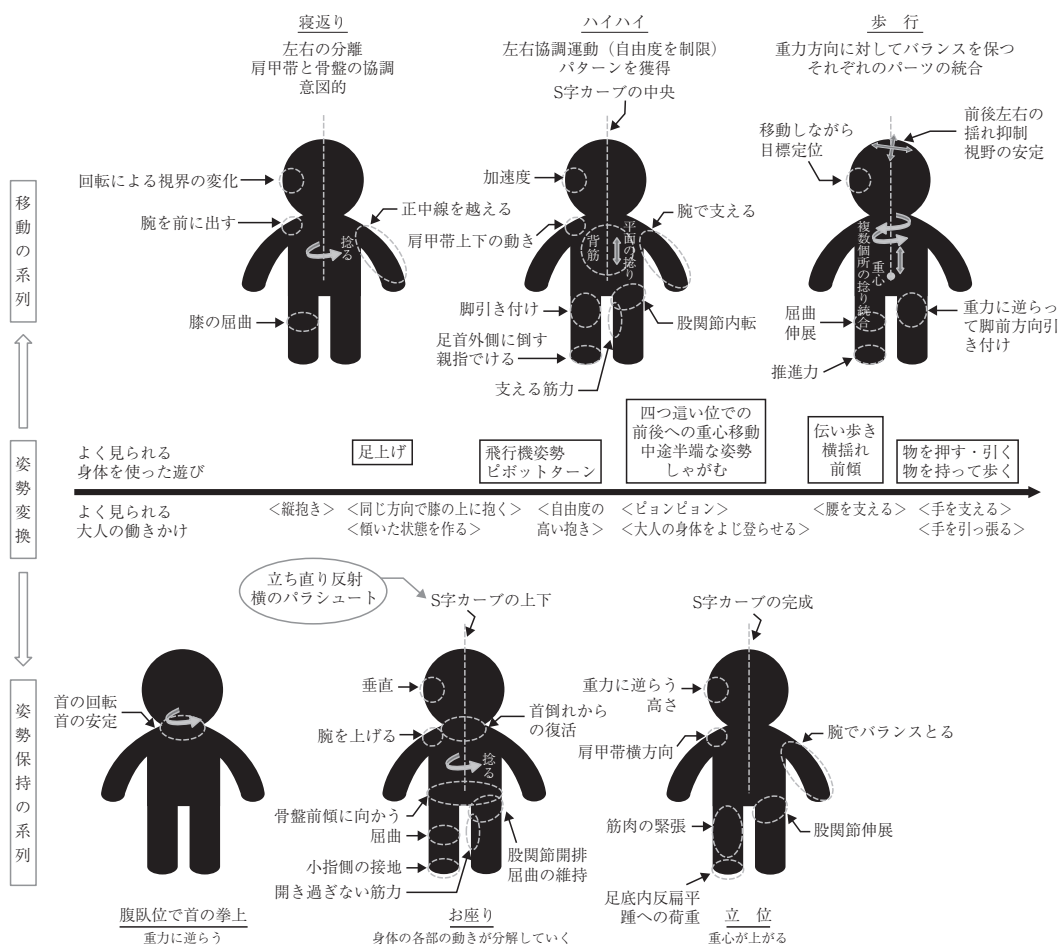


図 乳児の運動発達のもまとめ

先ずの目標と定め、姿勢保持の系列と移動運動の系列とを分けて考える、という視点で開始した。検討していく中で、重力に抗する、バランスを取る・崩す、姿勢変換、といったポイントが浮かび上がってきた。また、移動運動や姿勢保持という見かけの動きと、骨格の構造の変化、筋肉の発達、反射の有無（神経系の発達）といった児の身体の準備状態と相まっていること、そして、用意された環境（親の手助け、ベッドや玩具などの物理環境など）の中で、児の運動発達が進んでいくことを確認することができた。少ないケースではあるが、詳細に検討することで、乳児の運動発達をどのように見ていけば良いのか、また、年齢が上がったあとに見られる運動発達の躓きをどのように分解して見ていけばよいのか、ポイントを提示できたと思われる。

次年度は、今年度の成果をもとに、保育園と協力して画像を用いながら幼児の運動発達について検討していきたい。

Ⅳ. 研究業績（2013 年）

(1) 書籍

- 1) 河合優年（2013）. 児童心理学の進歩 2013 年版. 日本児童研究所. 金子書房
- 2) 河合優年（2013）. 第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章、第 5 章、第 12 章. 河合優年・中野茂（編著）, 新・プリマーズ 保育の心理学. ミネルヴァ書房.
- 3) 河合優年・佐藤安子（2013）. 発達の視点からみたストレス研究の基礎と臨床（1 章）. 津田彰・大矢幸弘・丹野義彦（編者）, 臨床ストレス心理学. Pp.25-40. 東京大学出版会.

(2) 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫（2013）. 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2012 年度活動報告書, 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, 43, 101-122.

(3) 学会発表

- 1) 河合優年・難波久美子・佐々木恵・山川紀子・山本初実（2013）. 幼児期における行動抑制の発達の变化（1）がまん時間を指標として. 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, P.499. (法政大学, 8 月)
- 2) Kawai, M., Traynor, J., Takai, H., Terai, T., & Sunderland, J. (2013). A Cross Cultural Comparison of Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors toward Academic and Social Issues. Proceeding

and Abstracts of the 25th Japan-U.S. Teacher Education Consortium (JUSTEC), Presentation10, P.21. (University of Puget Sound, United States, May)

- 3) 難波久美子・河合優年・佐々木恵・山川紀子・山本初実 (2013). 幼児期における行動抑制の発達的变化 (2) 結果の組み合わせに注目して. 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, P.500. (法政大学, 8 月)
- 4) 難波久美子・玉井航太・河合優年・山本初実 (2013). 潜在成長曲線分析を用いた発達経路の探索的検討 (1) KIDS 総合発達年齢を用いたモデルの提示. 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, P.1026. (北海道医療大学, 9 月)
- 5) Sunderland, J., Kawai, M., Traynor, J., Takai, H., & Terai, T. (2013). A comparison of Japanese and American elementary and middle school students' perceptions of academic and social issues. 37th Annual Pacific Consortium Conference: Sharing Perspective- International Conversations about Education: Recurrings Themes in PCC. (Hawaii Imin International Conference Center. University of Hawaii at Manoa, United States, June)
- 6) 玉井航太・難波久美子・河合優年・山本初実 (2013). 潜在成長曲線分析を用いた発達経路の探索的検討 (2) 成長パラメーターを予測する変数の検討. 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, P.1029. (北海道医療大学, 9 月)
- 7) 田中滋己・山本初実・河合優年 (2013). 母体のストレスが胎児に与える免疫学的影響—第 2 報—. 日本赤ちゃん学会第 13 回学術集会. (福岡, 5 月)
- 8) 田中滋己・盆野元紀・山川紀子・山本初実・井戸正流・河合優年 (2013). 母体のストレスが児に及ぼす身体的・生理学的影響の解明. 第 67 回国立病院総合医学会. (石川, 11 月)
- 9) 山川紀子・杉野典子・田中滋己・河合優年・山本初実 (2013). 5・6 歳児における同画探索 (MFF) 検査を用いた「熟慮性－衝動性」の測定と発達プロファイルによる特徴についての検討. 第 55 回日本小児神経学会学術集会. (大分, 5 月)

(4) その他

- 1) 石川道子 (2012). 言葉の遅れ, 今日の治療指針, 1198.
- 2) 石川道子 (2012). 自閉症スペクトラムのこだわり行動とその対応, アスペハート, 31, 38-41

(5) 掲載・発表予定

- 1) 難波久美子・河合優年・佐々木恵・小花和 W. 尚子・山本初実・山川紀子・田中滋己・玉井航太 (2014). システムズアプローチからみた発達過程 (1). 日本発達心

理学会第 25 回大会論文, P.594. (京都大学, 3 月)

- 2) 河合優年・難波久美子 (印刷中) マイクロアナリシス (VI 部 76 章 1 節) 田島信元・岩立志津夫・長崎勤 (編) 新・発達心理学ハンドブック 福村出版.
- 3) 石川道子・難波久美子 (投稿中) 4・9 ヶ月児の観察記録画像に基づいた非定型発達の判別視点の探索的検討 –コーディング法による行動解析と医師評価の一致およびその後の発達指標との関連について– 小児の精神と神経.

2012 年度

研究員の業績および特別研究の経過報告

(2012 年 4 月～ 2013 年 3 月)

▶学会活動

日本教育社会学会、日本社会教育学会、日本教育学会

▶研究論文

編著 2013 年 3 月 Cummings, W.K. & 安東由則「W.K.Cummings 教授による高等教育に関する二つの講演会記録：日本の大学教育への示唆」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）43 号、1-51 頁（「I. 解説」については安東著、1-9 頁）

単著 2013 年 3 月「韓国における高等教育政策の動向と大学の現況」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）43 号、53-88 頁

▶所属学会

日本教育社会学会、日本社会学会、日本高等教育学会、日本教育学会、日本子ども社会学会など

▶社会活動

芦屋市社会教育委員など

▶2012 年特別研究の経過報告

テーマ①：大学教育、大学経営に関する研究

研究経過：アメリカのワシントン DC にある The George Washington University から、高等教育および国際比較教育に関する研究で高名な William K. Cummings 教授を招き、2012 年 10 月に二つの研究会を開催した（そのうち一つは国際セミナーとして開催）。特に、「Fostering Student Engagement and Learning」と題した講演では、大学での授業や学生生活に学生を積極的に関わらせるためにどのようなことが行われ、いかなる議論がなされているのかを紹介していただき、今後の日本における取組に示唆を得た。

研究成果：1) Cummings, W. K. 「Fostering Student Engagement and Learning」『研究レポート』43 号、pp.10-28

2) Cummings, W. K. 「What Happened to Universal Education ?」『研究レポート』43 号、pp.29-51

3) 安東由則「解説：W.K.Cummings 教授のレクチャーについて」『研究レポート』43 号、pp.1-9

テーマ②：女子大学における学生用プログラムの研究

研究経過：毎年継続的に、女子大学や短期大学に関する資料を収集するとともに、文部科学省などの統計データから、女子大学に関する最新のデータの入力、更新を行っている。これは 2013 年度中に、教育研究所 HP に公開する予定である。

この年度から韓国の大学および女子大学についても、その動向に注目し、データを集めることとした。手始めとして、戦後における大学政策をまとめ、今日における4年制大学の名簿を作成し、『研究レポート』に掲載した。

研究成果：安東由則「韓国における高等教育政策の動向と大学の現況」『研究レポート』43号、53-88頁

石川 道子 (いしかわ みちこ) 教授

▶研究論文

共著 松尾久枝、二村眞秀、石川道子 2012年9月 「超低出生体重児、極低出生体重児の9歳時のWISC-R 知能検査、WISC-Ⅲ知能検査と人物画」小児の精神と神経 52 pp.183-168

▶所属学会

日本小児科学会、日本小児精神神経学会、日本小児神経学会、日本発達障害学会、日本小児心身症学会、日本児童精神学会

▶その他

講師 2012年5月「発達障害の年齢的变化について～学齢期を中心に～」安佐医師会 学校保健部会研修会（於：安佐医師会館）

講師 2012年5月「発達障害の診断と療育」日本心理臨床学会第31回春季大会 ワークショップ研修（於：ウインクあいち）

講師 2012年6月「青年期・成人期の発達障害への支援のあり方—小児科医の提案」日本臨床発達心理学会東海支部第24回資格更新研修会（於：椋山女学園大学）

講師 2012年6月「気になる子の保育」西宮市民間保育園協議会 保育士研修会（於：西宮市民会館）

講師 2012年7月「発達障害の理解と教育」兵庫県立教育研修所主催10年経験者研修（於：教育研究所）

講師 2012年7月「発達障害を持つ子どもとの向き合い方」愛知県弁護士会三河支部研修

講師 2012年8月「発達障害の不応行動に対する具体的行動」（於：長久手市役所、愛知県立大学）愛知県立大学研究センター主催研修

講師 2012年11月「子どもの育ちを考えるシンポジウム」第62次兵庫教育フェスティバル（県教育研究集会）（於：川西市川西北小学校）

講師 2012年11、12月「発達障害の世界を理解する」私学連合会 特別支援教育研修会（於：私学連会館）

講師 2012年11月「発達の気になる子への理解を深める」尾張旭市子育て支援フォーラム（於：尾張旭市文化会館）

講師 2012年12月「大学生の発達障がい基礎理解と向き合い方」名古屋市立大学FD講演

会（於：名古屋市立大学）

►社会的活動

「西宮専門家チーム」（特別支援教育サポート事業）講師、西宮市

西宮市保育所事業課保育指導チーム巡回指導

西宮市地域自立支援協議会フォーラム講師 2012年8月「子どもの発達が気になる保護者や教師の方へ～地域療育から見た望ましいかわり方～」(於：西宮市勤労会館ホール)

西宮市校園長研修会講師 2012年12月「特別支援教育6年目を迎えて」(於：西宮市総合教育センター)

河 合 優 年 (かわい まさとし) 教授

►著書

河合優年（2012年6月）ダイナミックスシステムズ・アプローチ、高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子（編者）、発達科学入門 [1] 理論と方法、pp.212-213、東京大学出版会

河合優年（2012年10月）第3章 胎児期・乳児期、二宮克美・大野木裕明・宮沢秀次（編者）、生涯発達心理学 [第2版]、pp.31-48、ナカニシヤ出版。

►研究論文

小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実（2012年5月）就学前幼児の唾液中 α アミラーゼ活性と意欲との関連、小児保健研究、71 (3)、pp.360-365

河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫（2012年3月）武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2011年度活動報告書、研究レポート（武庫川女子大学教育研究所）、42、pp.107-121

►学会活動

田中滋己・山本初実・河合優年（2012年6月）母体のストレスが胎児に与える免疫学的影響、第12回日本赤ちゃん学会発表論文集、p.54（於：東京）

山川紀子・大谷範子・西知美・森繁子・難波久美子・田中滋己・河合優年・山本初実（2012年7月）すくすくコホート三重の協力者における42か月児の行動特性と母親のレジリエンス及び自尊心との関係についての検討 第26回三重県母性衛生学会学術集会抄録、p.6

佐藤安子・河合優年（2012年9月）MBSSを用いたストレス認知の型とレジリエンス、日本心理学会 第76回大会ポスター発表（於：専修大学）

小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実（2012年9月）睡眠中 α アミラーゼの個人差 (2)、日本心理学会 第76回大会ポスター発表（於：専修大学）

大谷範子・西和美・森繁子・山川紀子・難波久美子・田中滋己・河合優年・山本初実（2012年9月）すくすくコホート三重の育児相談からみてきたのも～成長に伴う相談内容の変化と子どもの発達状況との関係～、第59回日本小児保健協会学術集会講演集、p.145（於：岡山）

山川紀子・森繁子・西和美・大谷範子・難波久美子・田中滋己・山本初実・河合優年（2012 年 9 月） 5 歳児における同画探索（MMF）テストを用いた「熟慮性－衝動性」の測定と発達の状況との関連についての検討、第 59 回日本小児保健協会学術集会講演集 p.190（於・岡山）

大谷範子・西和美・森繁子・山川紀子・田中滋己・難波久美子・河合優年・山本初実（2012 年 11 月）すくすくコホート三重の相談内容～成長に伴う相談内容の変化と子どもの発達状況との関係～、第 27 回三重県母性衛生学会学術集会抄録集、p.6（於・三重）

田中滋己・山本初実・河合優年（2012 年 11 月）母体の受けるストレスと胎児の免疫特性との関連、第 27 回三重県母性衛生学会学術集会抄録集、p.6（於・三重）

山川紀子・森繁子・西和美・大谷範子・難波久美子・田中滋己・河合優年・山本初実（2012 年 11 月） 5 歳児における「熟慮性－衝動性」の測定と発達の状況との関連についての検討、第 27 回三重県母性衛生学会学術集会抄録集、p.9（於・三重）

指定討論者 2012 年 9 月「コホート研究への招待－調査デザインと分析法－」第 76 回日本心理学会 ワークショップ 発表論文集 p.28（企画者：横山詔一・前田忠彦・中村隆 司 会者：前田忠彦 話題提供者：前田忠彦・中村隆・横山詔一（於・専修大学）

▶ 2012 年度特別研究の経過報告

テ ー マ：西宮市における発達コホート研究

研究経過： 本研究は、学童期における社会性と乳幼児期の子どもの特徴との関係を解明する、小規模の詳細なコホート研究と、市内の乳幼児健診において任意協力の形で協力いただいている大規模追跡研究の二つから成り立っている。24 年度には、小規模コホートの協力者の一部が小学校に入学し、目的であった学童期の社会性の確認に近づいている。本年度の調査では、入学に伴う環境変化への適応についての項目が加えられた。データ解析は順調に進んでおり、研究グループの成果もおおむね予定通り発信できている。

西宮市内の大規模調査に関しては、妥当性等の確認がほぼ終了し、保険所および小児科医会への説明がなされた。これに伴って、調査結果に基づいた検診時質問項目が作成された。

テ ー マ：日米の中高生の生活実態と学校支援に関する研究

研究経過： 本研究は、当初日米の中高生の生活実態と学校支援の在り方に関する基礎的データの収集を目的として計画された。学校の全生徒を対象とするということで、日本側においては高等学校でのデータ収集が困難となり、24 年度に西宮浜小学校、中学校の全数調査となった。米国側では、ゴンザガ大学によって小中高の調査が計画された。子どもたちの社会的行動における問題を学級内の仲間関係と適応感からとらえるため、QU テストが用いられた。項目は、作成者の了解のもと英語にも翻訳され、バックトランスレーションを行った後、スポケーン市においても実施された。

日本側における実施は、6月と12月であった。これらについては、西宮浜小学校、中学校において、教員研修の形で結果報告がなされた。また、結果の国際比較については、25年度以降に日米共同で国際学会で発表することとなった。大学院生の研究交流を計画したが、24年度は原案づくりの段階で終わっている。

倉石 哲也 (くらいし てつや) 教授

▶研究論文

単著 2012年 保育所の行う子育て支援センターに望むこと「子と親と地域をつなぐ子育て支援－地域における子育て支援に関する調査研究報告書」日本保育協会 127-139

単著 2012年 無縁化社会の子育て支援－孤立しがちな子育て家庭に焦点を当てて「無縁化社会の子育て支援報告書」公益財団法人 大阪府市町村振興協会 おおさか市町村職員研修センター 7-20

倉石哲也・寺井朋子・橋詰啓子 2013年3月 保育士の支援に関する実践的取り組み－保育士のための元気アップ講習会の内容と評価「臨床教育学研究」武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 第19号 43-61

単著 インクルーシブな学生相談のあり方を巡って「学生相談センター紀要」第22号 33-40

▶学会活動

倉石哲也・松本聡子 学齢期子育て支援講座の地域児童館におけるプログラム展開の効果に関する研究 日本子ども家庭福祉学会第13回全国大会 大阪府立大学

▶社会的活動

全国保育協議会 保育所長専門講座検討委員会 委員

全国保育協会 地域における子育て支援に関する調査研究委員会 委員

大阪府児童措置審査部会 委員

神戸市社会福祉協議会・神戸市総合児童センター予防療育部会 委員

西宮市幼児期の教育・保育審議会 会長

▶特別研究

テーマ：学齢期の親支援プログラムの地域展開モデルの構築

研究経過： 本研究は神戸市社会福祉協議会と宝塚市社会福祉協議会とそれぞれ連携し、地域児童館で親支援プログラムを実践するための方法論を構築することを目的としている。平成24年度は人材育成を中心テーマに実践研究を行った。

人材育成とは、プログラム参加者（親）が支援者側に立って親支援を実践するための方策を検討することである。当事者が支援者として役割を果たすことによって地域子育て支援の「人材循環モデル」と「親のエンパワメント」が可能になる。そのためには、当事者（参加者）が支援人材として登用されるようになるための理念づくり、方策の検討、具体的役割、教育訓練の方法、実践評価といった人材養成の

ための構造を構築する必要がある。

本年度は神戸市、宝塚市の開催される親支援講座の参加者から数名を支援者として養成を目的として地域児童館に派遣を行い講座開催の準備、託児、進行補助、先輩ママとして講座参加者の話を受け止める等といった役割を担ってもらってきた。

次年度以降、人材育成と当事者が支援者役割を担うことによる、参加者の講座への満足度について分析等を勧める予定である。

田 中 孝 彦 (たなか たかひこ) 教授

▶著書

共著 2012年8月、大阪「教育改革」が問う教育と民主主義（共著）、教育科学研究会編、かもがわ出版、「子育て・教育の道理と大阪の『教育改革』」、pp.74-91

▶論文

2012年4月「悲しみにみちた世界、ともに笑う時間、1日」教育科学研究会編『教育』795号、かもがわ出版、pp.5-14

2012年9月「教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想」、研究報告書『現職教師教育カリキュラムの教育学的検討』、日本教育学会特別課題研究委員会「現職教師教育カリキュラムの教育学的検討」編、pp.87-99

2013年3月「大震災と学校の再生の課題—子どもの生存を支え、学習要求に応える教師の模索についての語りから」、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科紀要『臨床教育学研究』第19号、pp.105-113

▶学会報告

2012年7月、フィンランドの二人の教師の語りと教師の専門性、武庫川臨床教育学学会第7回大会

2012年8月、大震災と学校の再生の課題—子どもの生存を支え、学習要求に応える教師の模索についての語りから、日本教育学会第61回大会特別課題研究「震災と教育」報告。

▶社会的活動

2011年3月～現在、日本臨床教育学学会会長

2011年9月～2013年8月

日本教育学会特別課題研究「東日本大震災と教育」研究委員（「学校・教師グループ」責任者）

2011年10月～現在、地域民主教育全国交流研究会代表

2012年4月～2015年3月

科研費共同研究（基盤研究A）「東日本大震災と教育」研究分担者（「学校・教師グループ」責任者）

2012 年 4 月～2015 年 3 月

科研費共同研究（基盤研究 B）「教師教育の改革と『子ども理解のカリキュラム』の構想」
研究代表者

▶ 2012 年度特別研究の経過報告

テ ー マ：東日本大震災の子ども・若者への影響と地域・学校の再建の課題

研究経過： これまでの地域調査研究を踏まえて、報告したものに、地域民主教育全国交流研究会・福島集会の開催要項に掲載された、問題提起「子どもと学習指導を結びつける実践の探求」がある（同会発行の『子ども・学校・地域－交流研通信－No.79』所収）。福島集会・学習分科会の総括が掲載された。

西 井 克 泰（にしい かつやす） 教授

▶ 研究論文

・ 学術論文

単著 「発達障害学生への支援の現状と課題—全国調査報告書を手がかりとして—」、武庫川女子大学学生相談センター紀要 第 22 号、15-32、2013 年 1 月

単著 「教師向け研修プログラムに関する理論的検討—コミュニケーションにおける情報処理に着目して—」、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 臨床教育学研究 第 19 号、63-77、2013 年 3 月

単著 「高等教育における障害学生支援の現状と展望—学びのユニバーサルデザインを目指して—」、武庫川女子大学教育研究所 研究レポート 第 43 号、89-99、2013 年 3 月

・ 著書

分担執筆 「現場で役立つスクールカウンセリングの実際」、パート 2 11 「高等学校執筆のスクールカウンセリング」、創元社、188-202、2012 年 8 月

▶ 学会活動

日本心理臨床学会理事

▶ 社会的活動

大阪府臨床心理士会理事

▶ 2012 年度特別研究の経過報告

テ ー マ：「教師のコミュニケーション力向上のためのプログラム開発」

研究経過： 上記テーマに基づいた研修会を 2 回実施した。共同主催者は宮崎県の小学校教師、長尾岳彦氏である。教師のコミュニケーション能力向上のためのプログラムを 2 種類作成した。

▶研究論文

単著 「『ナラティブ・インクワイアリー』について」『臨床人間関係論研究』第3号、武庫川女子大学教育研究所生徒指導研究室、pp.34-39、2012年8月

単著 「子どもが『学ぶこと』の意味と意義」『臨床人間関係論研究』第3号、武庫川女子大学教育研究所生徒指導研究室、pp.63-72、2012年8月

▶学会発表

「占領軍政下における実験学校のコミュニティ・カリキュラム～デューイ教育論からの検討～」
日本臨床教育学会第2回研究大会（9月30日）

▶学会活動

所属学会：全国社会科教育学会、日本教育学会、日本教師教育学会、武庫川臨床教育学会（事務局長、2008年9月～）、日本臨床教育学会（事務局次長、2011年3月～）

▶社会的活動

西宮市立浜甲子園中学校、滋賀県日野町立桜谷小学校などの校内研究会へ研究協力
西宮市青少年問題協議会副会長（2009年6月～）

▶2012年度特別研究の経過報告

テーマ：臨床教育学実践にかかわる実証的研究

研究経過： 教育実践の創造性が教師の専門性を問われるところであるが、教師へのアンケート調査や聴きとりからは、知識教授中心の形式化された教育観が行政のみならず校内、児童・生徒、保護者からも要求され、その葛藤が精神的苦痛や教師の共同を妨げていることに繋がっていることを読み取ることができた。（平成25年度の武庫川臨床教育学会で報告予定）

▶論文・著書

中尾賀要子（2012）在米被爆者の生活と願い 在ブラジル・在アメリカ被爆者裁判支援ニュース 第31号 pp.7-9

池埜聡・中尾賀要子（2012）「在米被爆者の語りから」荻野昌弘編 戦争が生み出す社会Ⅰ：戦後社会の変動と記憶（pp.157-189）新曜社

中尾賀要子（2013）高齢者に対する日本の回想法研究：文献レビュー（1992 - 2012）
武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究 第19号 pp.79-104

▶講演・シンポジウム

中尾賀要子（2012.07.31）在米被爆者の生活と願い 在ブラジル・在アメリカ被爆者裁判を支援する会主催 在外被爆者を支援する集い 広島市中区福祉センター

▶社会活動

人間福祉学研究（関西学院大学査読制研究雑誌）査読委員

北米在外被爆者の会（North America A-bomb Survivors Association）ボランティア

福島県社会福祉士会・県北支部「福島の援助職支援のために」講師

▶研究助成

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）日本版ガイドド・オートバイオグラフィーの
妥当性検証（研究代表者）（平成 23 年度～平成 25 年度）

▶所属学会

日本社会福祉学会（JSSSW）

▶2012 年度特別研究の経過報告

テーマ：福島原発後の社会福祉士の立場と役割に関する研究

研究経過： 福島に拠点を置く社会福祉士を対象とした調査インタビューを実施し、関連資料
を収集した。ケーススタディアプローチを用いた質的データ分析を行い、論文投稿
に向けた執筆作業を進めている。

武庫川女子大学教育研究所研究レポート 掲載論文総目次（過去10号分）

第34号～第43号

◇第34号（2005年11月）

〈特集〉GPA の運用検討

GPA の効果的運用に関する検討（その2）

—わが国の大学における GPA 活用の事例—

……………（出野 務・安達一美・稲積包則）…………… 1 - 14

GPA の効果的運用に関する検討（その3）

—武庫川女子大学・同短期大学部における成績評価としての GPA の実態—

……………（出野 務・安達一美・稲積包則）…………… 15 - 25

現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移（その3）

—自分史のアカデミック面に代えて—……………（祐宗省三）…………… 27 - 38

女子大学および女子学生に関するデータと解説

……………（安東由則・藤村真理子・大竹綾子）…………… 39 - 110

◇第35号（2006年3月）

〈特集〉女子大学の現状と課題

女子大学の現状と今後の課題

—河合塾・滝紀子先生を招いての研究会記録—……………（友田泰正・安東由則）…………… 1 - 38

女子大学学生寮に関する研究（I）……………（小林 剛）…………… 39 - 71

戦後における女子大学・女子学生関連文献目録集

……………（安東由則・鎮 朋子・末吉ちあき）…………… 73 - 111

◇第36号（2006年11月）

〈特集〉新堀通也先生退職記念最終講義／女子大学研究

教育研究の60年

—分析図表の提唱—……………（新堀通也）…………… 1 - 35

「女子大学」に関する女子学生の意見調査

—2005年度武庫川女子大学4年次生アンケートから—

..... (安東由則・藤村真理子・難波満里子)	37 - 84
35年間における私立女子大学の偏差値推移	
—文学系学部と家政系学部の事例から—	(安東由則・末吉ちあき) 85 - 116
日本の女子大学に関する研究 (Ⅱ)	
—クラスター分析による分類の試み—	(安東由則) 117 - 130
GPA の効果的運用に関する検討 (その4)	
—GPA による成績上位者と下位者の実態—	
..... (出野 務・安達一美・稲積包則)	131 - 139

◇第37号 (2007年 3 月)

〈特集〉女子大学研究

アメリカにおける女子大学の現状と津田塾大学の取り組み

..... (高橋裕子) (友田泰正・安東由則編)	1 - 21
---------------------------------	--------

女子大学に個性を

—生き残りへの挑戦—	(内田伸子) (友田泰正・安東由則編) 23 - 39
------------------	-----------------------------------

女子大学インタビュー安東由則 (編)

(藤女子大学・昭和女子大学・津田塾大学・東京女子大学・広島女学院大学)	41 - 154
---	----------

武庫川女子大学に関する保護者への意見調査

—2006年度4年次生保護者アンケートから—

..... (安東由則・藤村真理子・難波満里子)	155 - 196
--------------------------------	-----------

女子大学学生寮に関する研究 (Ⅱ)	(小林 剛) 197 - 211
-------------------------	------------------------

ターミナルケアから学ぶ生と死

—ユーモアのすすめ—	(アルフォンス・デーケン) 213 - 232
------------------	-------------------------------

◇第38号 (2008年 3 月)

〈特集〉教育の潮流／女子大学研究

教育の潮流観測

—最終講義資料—	(新堀通也) 1 - 119
----------------	----------------------

女子大学の自己像

—大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から—

..... (安東由則・鎮 朋子)	121 - 156
-------------------------	-----------

女子大学学生寮に関する研究 (Ⅲ)

—在寮生の保護者・退寮生・在寮経験をもつ卒業生への意識調査を中心に—

..... (小林 剛)	157 - 183
GPA の効果的運用に関する検討 (その5)	
— 1 年次から 2 年次への GPA の変化—	
..... (出 野務・安達一美・稲積包則)	185 - 194
◇第39号 (2009年 3 月)	
〈特集〉女子大学に関する調査の比較	
「女子大学」に関する意見の因子分析	
— 女子学生への調査と他大学調査との比較—	(安東由則) 1 - 29
明治期における中学校校友会の創設と発展の概観	(安東由則) 31 - 57
新堀通也寄贈図書目録	(新堀通也) 59 - 110
◇第40号 (2010年 3 月)	
〈特集〉女子大学で学ぶとは	
武庫川学院創立70周年記念シンポジウム	(友田泰正・安東由則編) 1 - 2
女子大学だからできること	
— 女性を伸ばす〈学び〉の環境—	(高橋裕子) 3 - 30
卒業生によるパネルディスカッション	(本学卒業生) 31 - 58
女子の大学進学に伴う諸効果に関する考察	
— 広義の人的資本論によるアプローチ—	(西尾亜希子) 59 - 81
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター活動報告	
..... (河合優年・難波久美子・佐々木恵)	83 - 129
◇第41号 (2011年 3 月)	
武庫川学院の名称について	(友田泰正) 1 - 49
自分らしく生きるために	
— 武庫川女子大学で学んだこと—	(本仲純子) 51 - 63
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2010年度活動報告	
..... (河合優年・難波久美子・佐々木恵)	65 - 91
◇第42号 (2012年 3 月)	
武庫川女子大学短期大学部調査 (2007) の結果報告	
— 実態把握と改善に向けて—	(安東由則) 1 - 85
女性のキャリアと金融リテラシー	

—スミス・カレッジの金融教育からの示唆— …………… (西尾亜希子) ……	87 - 105
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2011年度活動報告 …………… (河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫) ……	107 - 121

◇第43号 (2013年3月)

W.K.Cummings 教授による高等教育に関する二つの講演記録	
—日本の大学教育への示唆— …………… W.K.Cummings (安東由則編) ……	1 - 52
韓国における高等教育政策の動向と大学の現況 …………… (安東由則) ……	53 - 88
高等教育における障害学生支援の現状と展望	
—学びのユニバーサルデザインを目指して— …………… (西井克泰) ……	89 - 100
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2012年度活動報告 …………… (河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫) ……	101 - 122

編 集	武庫川女子大学教育研究所
編集委員	友田 泰正 ・ 安東 由則（長） 渡邊 由之 ・ 末吉 ちあき
発 行 者	学校法人 武庫川学院 〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6 番46号
発 行 日	2014年 3 月31日
印 刷	大和出版印刷株式会社